

# 山 口 遺 跡 他

## 発 挖 調 査 報 告 書

山口遺跡第17、18次・陸奥国分尼寺跡第12次

四郎丸館跡第3次・富沢遺跡第142次

沖野城跡第4次・小鶴城跡第3次・与兵衛沼窯跡

2009年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

# 山 口 遺 跡 他

## 発 挖 調 査 報 告 書

山口遺跡第17、18次・陸奥国分尼寺跡第12次  
四郎丸館跡第3次・富沢遺跡第142次  
沖野城跡第4次・小鶴城跡第3次・与兵衛沼窯跡

2009年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

## 序 文

仙台市は「杜の都・仙台」という愛称で広く親しまれ、四季折々の豊かな自然にあふれる仙台の風景は、私たち市民の誇りであると同時に将来へ守るべき大切な財産であります。

この仙台市の素晴らしい自然・風景と同様に、私たち市民の誇りであり大切な財産の一つに、悠久の歴史に育まれ守ってきた文化遺産の存在が挙げられます。実は、仙台市内には現在約800ヵ所もの遺跡が確認されております。これらの埋蔵文化財は、これまでの大きな時の流れの中でその存在価値を高めるとともに、現在においては各種開発事業によって絶えず破壊・消滅の恐れにさらされています。当教育委員会としましては、皆様のご理解とご協力を賜りながら、これらの貴重な文化財を保存し、次世代へと継承していくことに日々努めております。

本報告書には、各種開発に先立ち、平成19年度に発掘調査を実施した山口遺跡の他、平成20年度に発掘調査を実施した陸奥国分尼寺跡、四郎丸館跡、富沢遺跡、沖野城跡、小鶴城跡、与兵衛沼窯跡の調査結果を収録しております。

先人達の遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たち市民の大変な仕事であると思います。つきましては、本報告書が、学術研究のみならず学校教育や生涯学習などのあらゆる場面で活用され、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書刊行に際しましてご協力、ご助言をいただきました多くの方々に、心より深く感謝申し上げます。

平成21年3月

仙台市教育委員会  
教育長 荒井 崇

## 例　　言

1. 本書は、仙台市教育委員会により、平成19年度に実施した個人住宅建設に伴う山口遺跡第17・18次と平成20年度に実施した民間開発事業に伴う陸奥国分尼寺跡第12次、四郎丸館跡第3次、富沢遺跡第142次、沖野城跡第4次、小鶴城跡第3次及び仙台市公園整備に伴う与兵衛沼窯跡隣接地の発掘調査報告書の合本である。

個人住宅建設にかかる調査は公費負担、また民間開発事業にかかる調査は事業者負担により実施した。  
2. 本書の執筆・編集は、仙台市教育委員会文化財調査係の担当調査員の協議のもとに吉濱光朗がとりまとめ、次のように分担して行った。

主　　事 鈴木 隆：小鶴城跡第3次  
主　　事 加藤 隆則：山口遺跡第17・18次、陸奥国分尼寺跡第12次  
主　　事 森田 義史：沖野城跡第4次  
主　　事 大久保弥生：与兵衛沼窯跡隣接地  
文化財教諭 佐藤 正弥：四郎丸館跡第3次  
文化財教諭 熊谷 敏哉：富沢遺跡第142次

3. 遺物実測やトレース等の整理作業は、主に仙台市向田文化財整理収蔵室の作業員が行った。

4. 本書に掲載した陶器・磁器に関する产地及び年代の所見は、文化財調査仙台城史跡調査室の佐藤洋主査によるものである。

5. 本書にかかる遺物・写真・実測図面等の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

6. 本書で使用した十色は、「新版標準上色帖」（小山・竹原：1976）に準拠した。

7. 断面図・平面図の標高値は、海拔高度を示している。

8. 遺物図版の縮尺は、任意とする。

9. 遺構は種別ごとに次の略号を用いた。

SI：堅穴住居跡	SD：溝跡	SK：土坑
SE：井戸跡	P：ピット	SX：性格不明遺構

10. 遺物の登録は、以下の分類と略号を用いた。

A：縄文土器	B：弥生土器	C：上師器（非ロクロ）	D：土師器（ロクロ）		
E：須恵器	F：丸瓦	G：平瓦	I：陶器	J：磁器	K：石器・石製品
L：木製品・杭材	N：金属製品	P：土製品			

11. 遺物観察表のカッコ内の法量のうち、器高は残存値を、また口径及び底径は復元値を示している。

12. 本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田：1980）は、「十和田a (To-a)」を示し、降下年代は現在、西暦915年初夏とされている。

庄子貞雄・山田一郎 1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城—昭和54年度発掘調査概報—』

宮城県多賀城跡調査研究所

# 目 次

序文

例言

目次

I	山口遺跡第17次発掘調査報告書	1
1	調査要項	1
2	調査に至る経過と調査方法	1
3	遺跡の位置と環境	1
4	基本層序	1
5	発見遺構と出土遺物	1
II	山口遺跡第18次発掘調査報告書	
1	調査要項	13
2	調査に至る経過と調査方法	13
3	遺跡の位置と環境	13
4	基本層序	13
5	発見遺構と出土遺物	13
6	まとめ	15
III	陸奥国分尼寺跡第12次発掘調査報告書	
1	調査要項	17
2	調査に至る経過と調査方法	17
3	遺跡の位置と環境	17
4	基本層序	19
5	発見遺構と出土遺物	22
6	まとめ	34
IV	四郎丸館跡第3次発掘調査報告書	
1	調査要項	47
2	調査に至る経過と調査方法	47
3	遺跡の位置と環境	47
4	基本層序	48
5	発見遺構と出土遺物	48
6	まとめ	55

## V 富沢遺跡第142次発掘調査報告書

1 調査要項	66
2 調査に至る経過と調査方法	66
3 遺跡の位置と環境	66
4 基本層序	68
5 発見遺構と出土遺物	69
6 まとめ	73

## VI 沖野城跡第4次発掘調査報告書

1 調査要項	76
2 調査に至る経過と調査方法	76
3 遺跡の位置と環境	77
4 基本層序	77
5 発見遺構と出土遺物	78
6 まとめ	78

## VII 小鶴城跡第3次発掘調査報告書

1 調査要項	82
2 調査に至る経過と調査方法	82
3 遺跡の位置と環境	83
4 基本層序	83
5 発見遺構と出土遺物	83
6 まとめ	84

## VIII 与兵衛沼窯跡隣接地試掘調査報告書

1 調査要項	86
2 調査に至る経過と調査方法	86
3 遺跡の位置と環境	86
4 調査の概要	87

# I 山口遺跡第17次発掘調査報告書

## 1 調査要項

遺跡名	山口遺跡（宮城県遺跡番号01178）
調査地点	仙台市太白区富沢3-103-57
調査期間	平成19年11月26日～11月30日
調査対象面積	103.24m <sup>2</sup>
調査面積	約24m <sup>2</sup>
調査原因	個人住宅建設工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主事 鈴木 降 主事 加藤 隆則 文化財教諭 工藤慶次郎 隊員 森田 賢司

## 2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成19年5月18日付けで地権者より提出された、個人住宅の建築工事に係る発掘届（H19教生文第2-190号）に基づき実施した。確認調査は平成19年11月26日に着手し、遺構が検出されたため引き続き本調査を実施した。調査区は東西5m×南北4mに設定した。重機により盛土からIV層まで掘削し、Va層上面で人力により遺構検出作業を実施した。随時写真記録を行い、平面図・断面図を作成した。SD2溝跡は東側へ広がっていたため一部調査区を拡張している。また、Va層上面の調査終了後、調査区各辺を後退させ下層の調査を実施し、VI層上面とIX層上面で遺構を検出した。これより下層は、東西2m×南北0.8mの範囲を重機掘削し、下層の土層堆積状況を確認し調査を終了した。

なお、今調査は第18次調査と並行して調査を進めたため、遺構名、基本層は両地点で統一して付している。また、遺構の所属年代等についても第18次調査の「6 まとめ」(P15)に記した。

## 3 遺跡の位置と環境

山口遺跡は名取川と荒川によって形成された自然堤防から、北に広がる後背湿地にかけて立地する。標高は約11～14mで、遺跡の広がりは東西約570m、南北約430m程である。今回調査地点は市営地下鉄富沢駅の西方750mにあり、追跡範囲の西側に位置している。これまでの調査で、自然堤防を居住域、後背湿地を生産域とする平安時代の集落の一部が発見された。生産域では灰白色火山灰層下直前の条里型土地割の水田跡が見つかっている（田中・1984）。

## 4 基本層序

第17・18次調査の基本層は、盛土下に15層を確認した。Va層上面、VI層上面、IX層上面が遺構確認面である。

## 5 発見遺構と出土遺物

### ① Va層上面検出遺構

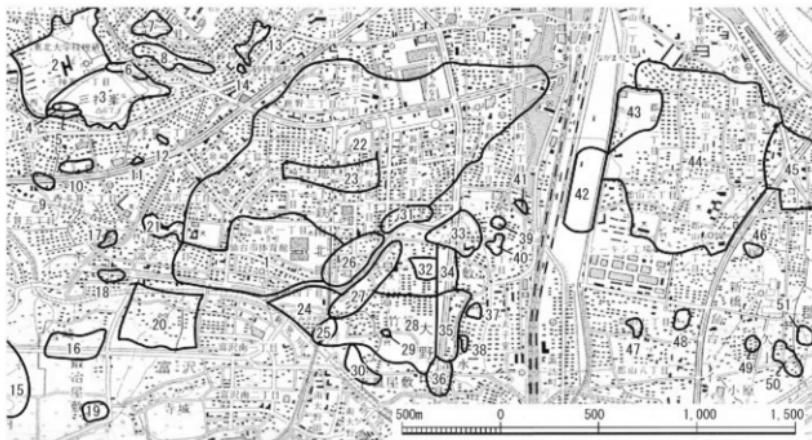
#### 1) 溝跡

SD1溝跡 調査区北側のVa層上面で検出した。東側でSD2溝跡と重複し、本遺構の方が占い。北側および東西方向は調査区外に延びているため、溝幅および長さは不明である。底面は一部が検出された。確認面から最深部

の深さは93cmである。堆積土は2層確認された。ともに鉄分を多く含んでいる。調査区中央部の底面では木組みを検出した。板材を溝に直行するように並べ、杭材を打ち込み固定している。

東側隣接地である第18次調査地点でも本遺構の延長と考えられる溝跡が検出されている(「Ⅱ 山口遺跡第18次発掘調査報告書参照」)。両地点を併せて溝跡の検出長は22.3mである。

遺物は、1層より、18世紀代の肥前染付けの徳利破片1点、鉄釘1点、煙管1点が出土した。いずれも堆積層上位



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	山口遺跡	集落、水田	自然埋没、黄褐色粘土	平安後・中世、奈良、中世	26	下ノ内側遺跡	集落、水田	自然埋没	穂文治・筒・後、光明、古墳、奈良、平安、中世
2	芦ノ口遺跡	集落	丘陵	調査未終、平安	27	六反原遺跡	集落	自然埋没	穂文治・筒・後、光明、古墳、奈良、中世
3	三井塚古墳	古墳	丘陵	調査未終、平安	28	大野田古墳群	古墳	自然埋没	古墳
4	三井塚古墳群	古墳	丘陵	古墳後	29	春日社古墳	古墳	自然埋没	古墳
5	竪穴式住居	集落	丘陵斜面	古墳、平安、奈良	30	伊豆山遺跡	散在地	自然埋没	古墳、奈良、平安
6	土手内側遺跡群	集落	低窪地	古墳末	31	曾根遺跡	散在地	自然埋没	古墳、平安
7	土手内側遺跡	集落	丘陵	調査未終、古墳、奈良、平安	32	舟形遺跡	集落	自然埋没	穂文治、奈良、平安
8	土手内側遺跡群	丘陵斜面	丘陵斜面	古墳未、稍後、奈良	33	山側遺跡	集落	自然埋没	光明、奈良、平安、中世、近世
9	西台古墳	集落	丘陵	奈良、平安?	34	大河原遺跡	集落、集落	自然埋没	穂文治、奈良、中世
10	原遺跡	散在地	丘陵地	奈良、平安	35	二ノ塚遺跡	集落、無数	自然埋没	奈良、平安、中世
11	原寺遺跡	丘陵地	丘陵地	古墳、奈良、平安	36	田畠側遺跡	集落、細緻	自然埋没	奈良、平安、中世
12	豊町玉造遺跡	丘陵地	丘陵地	平安	37	北側遺跡	散在地	自然埋没	奈良、平安
13	砂押戸塚	円墳	丘陵地	古墳	38	良賀浦水田跡	散在地	自然埋没	古墳
14	御津原遺跡	集落	丘陵地	奈良、平安	39	向山南遺跡	散在地	自然埋没	奈良、平安
15	南ノ東遺跡	集落	丘陵地	奈良、平安	40	新田遺跡	散在地	自然埋没	奈良、平安
16	鎌船型墓A遺跡	生溝	自然埋没	穂文、奈良、平安	41	長谷六丁目遺跡	散在地	自然埋没	奈良、平安
17	寶光上ノ古道跡	散在地	自然埋没	穂文、奈良、平安	42	長勢家東遺跡	生溝	自然埋没	穂文、吉備家、奈良
18	東ノ内側	散在地	自然埋没	古墳、奈良、平安	43	西ノ内側遺跡	包合地、表標準	自然埋没	穂文、奈良、吉備
19	鎌船型墓B遺跡	散在地	自然埋没	穂文、奈良、平安	44	吉山遺跡	官衙、寺院、松合寺	自然埋没	穂文治、筒、光明、古墳、奈良、吉備
20	宝光保遺跡	散在地	自然埋没	中世	45	北巨摩溝	城壁、集落、水田	自然埋没	穂文治、筒、光明、古墳、奈良、中世、近世
21	宝光古道跡	古道	自然埋没	奈良、平安	46	矢来遺跡	散在地	自然埋没	古墳、奈良、平安
22	雷門遺跡	混合地	鹽賣溝	穂文治石器、穂文、奈良、古墳、奈良、中世、古墳	47	の堤遺跡	散在地	自然埋没	奈良、平安
23	豈須遺跡	集落、水田、墓地	自然埋没	穂文、奈良、吉備、奈良、中世	48	山ノ内側遺跡	散在地	自然埋没	古墳、奈良、平安
24	下ノ内側	集落	自然埋没	穂文治、古墳、奈良、平安	49	久ノ上ノ遺跡	水田	後齊墓地	古墳、奈良、平安、中世
25	弓古田遺跡	集落	自然埋没	穂文治、古墳、奈良、平安	50	久ノ上ノ遺跡	散在地	自然埋没	古墳、奈良、平安

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

で出土した。18~19世紀前半のまとまった陶磁器を出土したSD2溝跡に切られていることから、これに先行する時期である。

**SD2溝跡** 調査区東側のVa層上面で検出した。北側でSD1溝跡と重複し、本遺構の方が新しい。南北方向は調査区域外に延びている。北側では西壁上端に沿って人頭大の川原石が並ぶ。溝は幅90~110cm、深さ30cmの箱型に掘り込まれ、西側上部は緩やかに傾斜している。堆積土は単層でブロック状に堆積する。

遺物は、西側緩傾斜部の底面で人頭大の川原石に作って、堆積土1層及び1層上面から陶器113点、磁器9点、瓦質土器2点、瓦片3点、木製品2点（下駄、盤）の他、植物遺存体が多量に出土した。また、平面的には南壁寄りの東西1.5m、南北1m程の範囲からまとまって出土した。

## ②VI層上面検出遺構

### 1) 溝跡

**SD3溝跡** 調査区北側のVI層上面で検出した。上層検出のSD1溝跡と重複する。SD1溝跡とは並行し、東側隣接地である第18次調査でも同じように検出されている。隣接地を含めた検出長は22.3mである。溝幅は北側がSD1溝跡に壊されているため不明、

掘り込み面からの深さは20~25cm

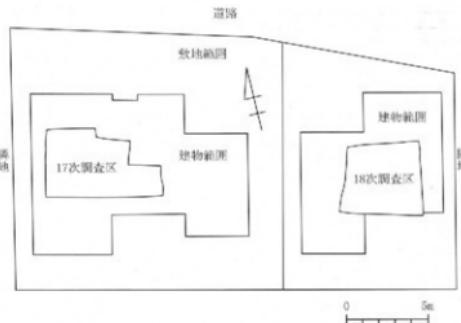
である。堆積土は単層で、基本層Vb層が入り込んでいる。出土遺物はないが、重複状況からSD1溝跡に先行する時期である。

### 2) 土坑

**SK1土坑** 調査区南西、VI層上面で検出した。西側は調査区域外に延びている。規模は、幅60cm、深さは5~10cmである。堆積土は単層で、基本層Vb層が入り込んでいる。時期はSD3溝跡と同じ頃と考えられる。



第2図 調査地点の位置

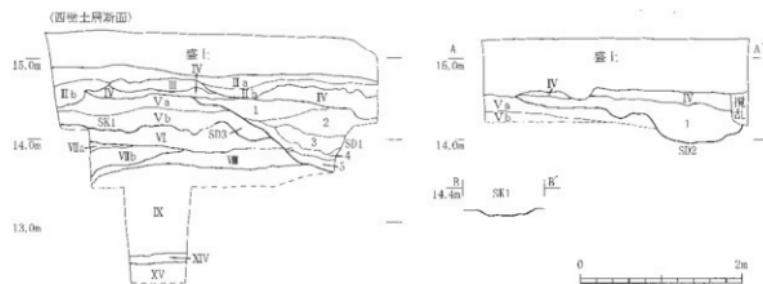
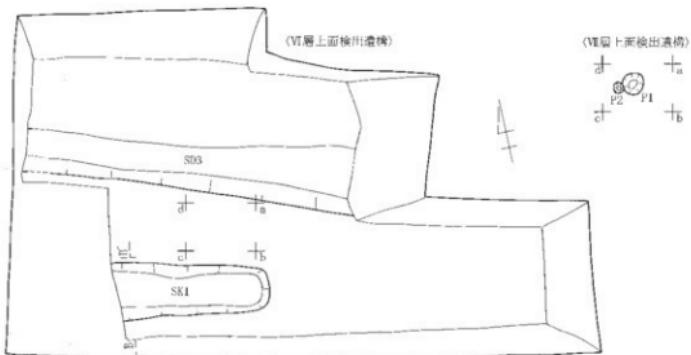
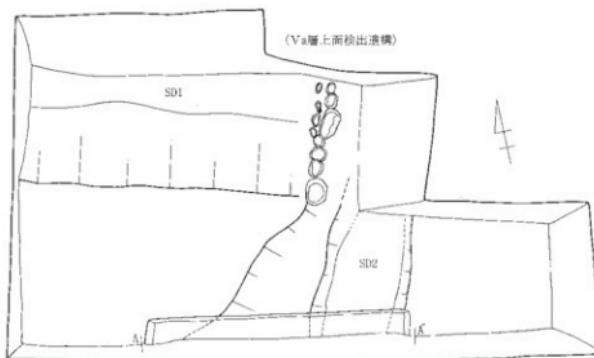


第3図 調査区配置図

## ③VII層上面検出遺構

### 1) ピット

調査区中央のVII層上面で2基検出した。規模（長軸×短軸）はP1が28×25cm、P2が15×15cmである。ともに柱痕は確認されず、堆積土は単層で基本層VI層に類似する土である。遺物は出土していない。



第4図 遺構平・断面図

基準層	土	色	土	色	基 層 名
IIa	2.5Y4/2	神灰褐色	シルト質砂	難化鉄ブロックを多量に含む。ヒートブロックをやや多量に含む。	
IIb	3Y5/2	同オリーブ色	シルト質砂	難化鉄ブロックを多量に含む。	
III	2.5Y4/0	オリーブ褐色	シルト質砂	2.5Y4/0暗赤苔色ナラブロックを多量に含む。	
IV	2.5Y4/0	オリーブ褐色	砂質シルト		
Va	2.5Y3/0	威オリーブ褐色	砂質シルト	(←近里的遺物確認断面) 難化物を微量に含む。2.5Y4/0暗赤苔色ブロックを少量含む。	
Vb	2.5Y3/0	神オリーブ褐色	砂質シルト	難化物を少量含む。下部がモザイク。	
VI	2.5Y3/0	黄褐色	シルト質砂	(←近似的な遺物確認断面) 難化鉄を神灰に多量に含む。マンガンをやや多量に含む。	
Vb	2.5Y4/0	オリーブ褐色	砂質シルト	難化物を少量含む。	
VIb	2.5Y4/0	オリーブ褐色	砂質シルト	難化物を砂灰に多量に含む。灰化物を微量に含む。マンガンをやや多量に含む。下部に難化鉄共存。	
VIIa	2.5Y3/0	黄褐色	粘土質シルト	難化鉄を砂灰に多量に含む。	
IX	7.5Y4/1	褐色	細粒	細粒	↑に難化物を砂灰にやや多量に含む。灰化物を微量に含む。
XIV	5Y3/1	オリーブ褐色	細粒	細粒	時代的特徴を示すもの。灰質粘土をやや多量に含む。3-50mmの塊を簡単に含む。
XV	5Y3/2	オリーブ褐色	粘土	粘土	灰化物を微量に含む。
分 位	上	色	土	色	基 層 名
SD1 - 1	10Y3/0	暗褐色	シルト質砂	難化鉄、マンガンを微量に多量に含む。グリーン。	
2	2.5Y5/1	褐色	粘土	2.5Y5/1粘土ブロック、灰化物を多量に含む。難化鉄、砂粒を少量含む。	
SD1 - 1	10Y3/0	暗褐色	砂質シルト	難化物ブロックに難化鉄を含む。NPKの海底鉱物ナラブロックを前にやや多量に含む。白熱物ブロックを少量含む。西側のSD1(3)褐色ナラブロックをやや多量に含む。	
SD1 - 2	2.5Y3/0	威オリーブ褐色	粘土質シルト	Vと同一。	
SK1 - J	2.5Y4/0	オリーブ褐色	粘土質シルト	難化物を砂灰に多量に含む。マンガンをやや多量に含む。	
PI - 2 - 1	2.5Y3/0	黄褐色	シルト質砂	底部を砂灰に多量に含む。マンガンをやや多量に含む。	

※基本層は山口遺跡第17次調査と共通である。

第1表・土層観察表

#### ④出土遺物

今回の調査では、陶器115点、磁器12点、瓦質土器2点、瓦片3点、木製品2点、金属製品2点、土製品1点が出上した。陶器2点、磁器2点が基本層Ⅰ層から、磁器1点がSD1溝跡から出土した他は、すべてSD2溝跡からの出土遺物である。

ここでは、特にSD2溝跡からまとめて出土した陶器113点、磁器9点についてその概略を述べる。なお、出土点数については、接合したもの、接合はしていないが明らかに同一個体と判断されるもの、そして接合せず同一個体とも判断できない破片資料についてそれぞれ1点として算出した。

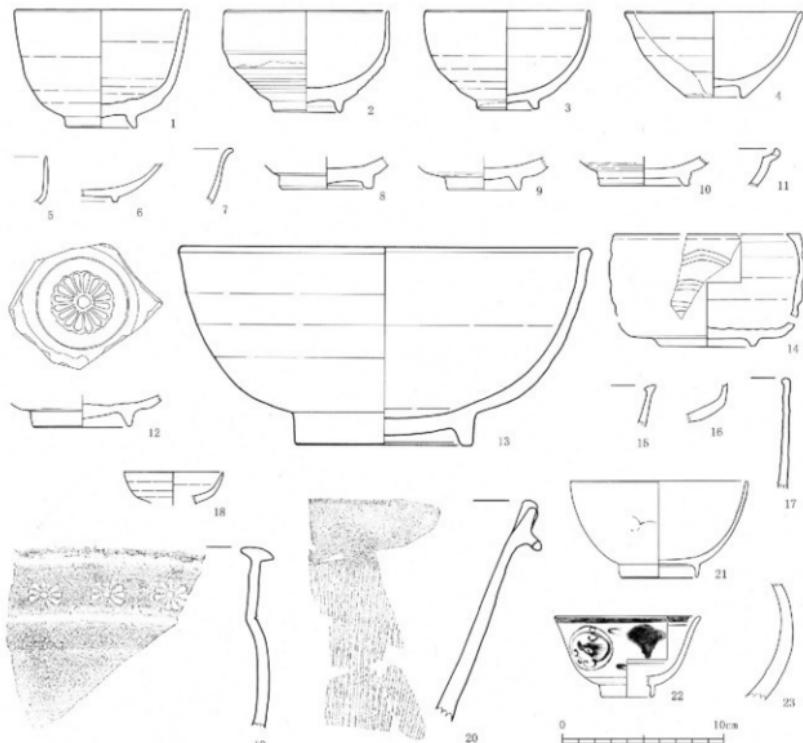
まず、製作年代別の割合についてみると、陶器では、18世紀が113点中93点で全体の82%を占めるが、17世紀の陶器も3点出土している。磁器も同様の傾向を示し、18世紀が9点中2点で最も多い。また、陶器、磁器共に少量ながら19世紀前半の資料が含まれることから、この頃に一括廃棄されたものと考えられる。

次に産地別の割合では、大堀相馬産が73点で陶器全体の65%を占め、他、小野相馬産20点、京・信楽系4点、唐津産3点、堤産2点、美濃産1点と続く。少数ではあるが、比較的高価な京・信楽系碗(18世紀)や津浦産・鉢(17世紀)がみられる点は、使用者の生活水準を知る上で注目される。また、仙台市内出土の当該期の陶器では、量的に大堀相馬産が圧倒的な優位性を示すが、小野相馬産の碗や人形鉢、香炉等が比較的まとまって出土した点も本資料の特徴として指摘できる。

器種組成の点では、陶器、磁器ともに碗が最も多く、特に陶器では93点で82%を占める。その他陶器では、擂鉢7点、鉢3点、皿3点、香炉3点、灰吹1点、伝飯器1点が出土している。磁器では、碗5点の他、皿2点、鉢1点、徳利1点が出土している。器種の多様さは特に陶器で目立つが、碗、鉢、擂鉢以外の器種が全て大堀相馬産、小野相馬産である点は、特に18世紀代における相馬産陶器の仙台藩内における流通・販売力の強さを示しているものと考えられる。

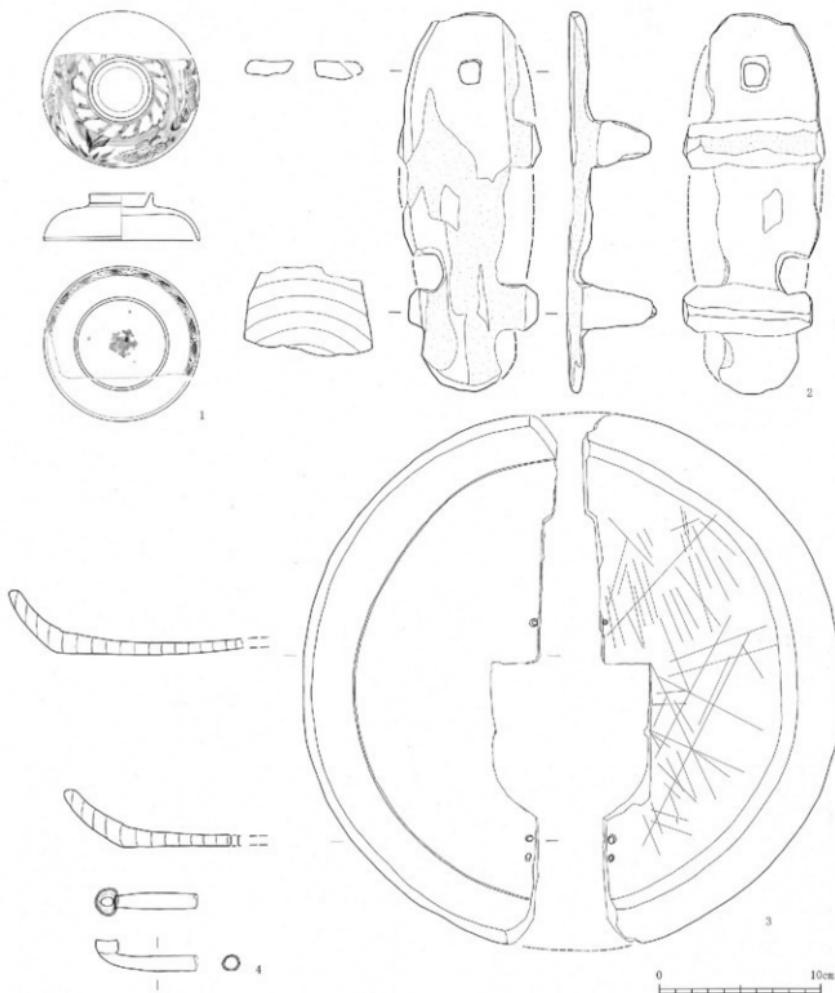
#### <参考文献>

田中惣和「1984年山口遺跡II 一仙台市体育馆建設予定地一」仙台市文化財調査報告書第61集



中国 番号	亞鉢 番号	所見地點	分類	直徑 (cm・c)	特徴・参考 (产地・釉質・文様・時期・その他)		写真 枚数		
					底本類	被模類			
1	1-3	SD2	1層上部	直鉢	7.3	3.5	5.4	小野村馬 底脚・直鉢・高 7.3cm 見込み目録2つ	4-1
2	1-9	SD2	1層上部	直鉢	6.3	3.0	4.4	大根付馬 底脚・既燒接け口鉢 18c	4-2
3	1-21	SD2	直鉢	6.1	3.0	3.2	大根付馬 底脚 18c	4-3	
4	1-22	SD2	直鉢	5.3	3.8	3.9	大根付馬 底脚・既燒接け分け縫 18c	4-4	
5	1-11	SD2	1層上部	直鉢	—	—	—	京・伊集系 危險 (京・青・綠) 未	4-5
6	1-34	SD2	1層上部	直鉢	—	—	—	京・伊集系 危險 (京・青・綠) 未	4-6
7	1-18	SD2	直鉢	—	—	—	大根付馬 底脚 18c 既燒接	4-5	
8	1-5	SD2	直鉢	6.0	—	5.6	野拂 底脚 17c	4-8	
9	1-26	SD2	直鉢	(1.5)	—	4.4	達摩 長石脚 17c	4-9	
10	1-25	SD2	直鉢	(1.5)	—	5.4	美濃 底脚 17c	4-10	
11	1-13	SD2	1層上部	直鉢	—	—	小野村馬 底脚 未	4-12	
12	1-8	SD2	1層	直鉢	6.0	5.1	小野村馬 見込み既ノ日焼附 菊唐花文 18c	4-11	
13	1-23	SD2	直鉢	(2.3)	(25.3)	10.9	小野村馬 底脚 大樂傳 見込み目録2つ	4-14	
14	1-4	SD2	1層	香炉	—	(1.5)	5.9	小野村馬 底脚 18c	5-1
15	1-12	SD2	1層上部	香炉	—	—	大根付馬 底脚 8~9世	4-16	
16	1-15	SD2	1層上部	香炉	—	—	小野村馬 底脚 未	4-17	
17	1-1	SD2	1層上部	直鉢	4.8	—	大根付馬 底脚 口器部に胎打跡あり	4-15	
18	1-5	SD2	直鉢	4.5	—	—	大根付馬 底脚 18c	5-2	
19	1-16	SD2	1層	瓦黃土器	—	—	達摩・白 新前 前蜀文・赤褐文 18c	5-6	
20	1-10	SD2	1層上部	直鉢	—	—	堺? 新前 既燒 18c 蔚土色	5-4	
21	1-17	SD2	直鉢	6.0	11.0	4.7	京・伊集系 危險 (京) 18c	5-7	
22	3-1	SD2	1層上部	直鉢	(5.1)	(6.0)	0.2	肥前 染付 丸文 18c 既燒接	5-8
23	3-3	SD2	直鉢	—	—	—	肥前 染付 17c	5-9	
1-7	SD2	1層	直鉢	—	—	—	京・伊集系 17c	4-12	
1-19	SD2	直鉢	既燒	—	—	—	堺? 新前 既燒 18c 蔚土色	5-3	
1-34	SD2	直鉢	既燒	—	—	—	肥前 既燒 18c 既燒	5-5	

第5図 出土遺物1



序号	登録番号	出土地点	分類	重量 (cm・g)	特徴・備考 (摩訶、神薬、符牒、羽扇、その他)	写真	
1	J-2	S02	上洞上面	環形 鉛鏡	2.9 1.0cm・重 度鋸歯・有	○.0 肥前 球村 特文、松文、見込みコンニャク塗料 (五弁花)	図版 5-10
2	L-1	S02	木製品	下駄	23.5 8.7 5.5	一丸形鉢面	5-11
3	L-2	S00	木製品	足	4.0 (33.0)	(77.4) 猪山山多數の切端あり 宮丸塗所 (漆抜板) 解剖材	5-12
4	N-1	S01	金葉然	透管	(5.3)	○.0 細めのみ 大葉径1.6	5-13
P-1	1	解	土器柄	土人形	-	大かきの周部?	5-14

第6図 出土遺物2



1 遺構完掘状況（東から）



2 調査終了状況（東から）



3 調査区西縦断面

図版1 遺構完掘状況、調査区断面



1 SD1・3溝跡西壁断面



2 木材出土状況（北西から）



3 染付徳利（第5図23）出土状況（東から）



4 木組み検出状況（南西から）



5 木組み検出状況（南東から）

図版2 SD1溝跡



1 SD 2 溝跡検出状況（南から）



2 SD 2 溝跡完掘状況（南から）



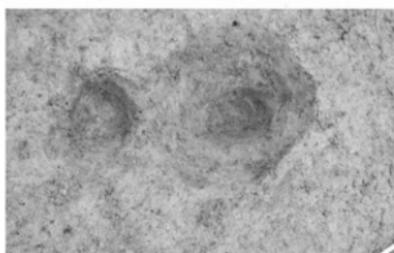
3 SD 2 溝跡南壁断面



4 SD 2 溝跡遺物出土状況（東から）



5 SK 1 土坑検出状況（南から）



6 P1・2（南から）

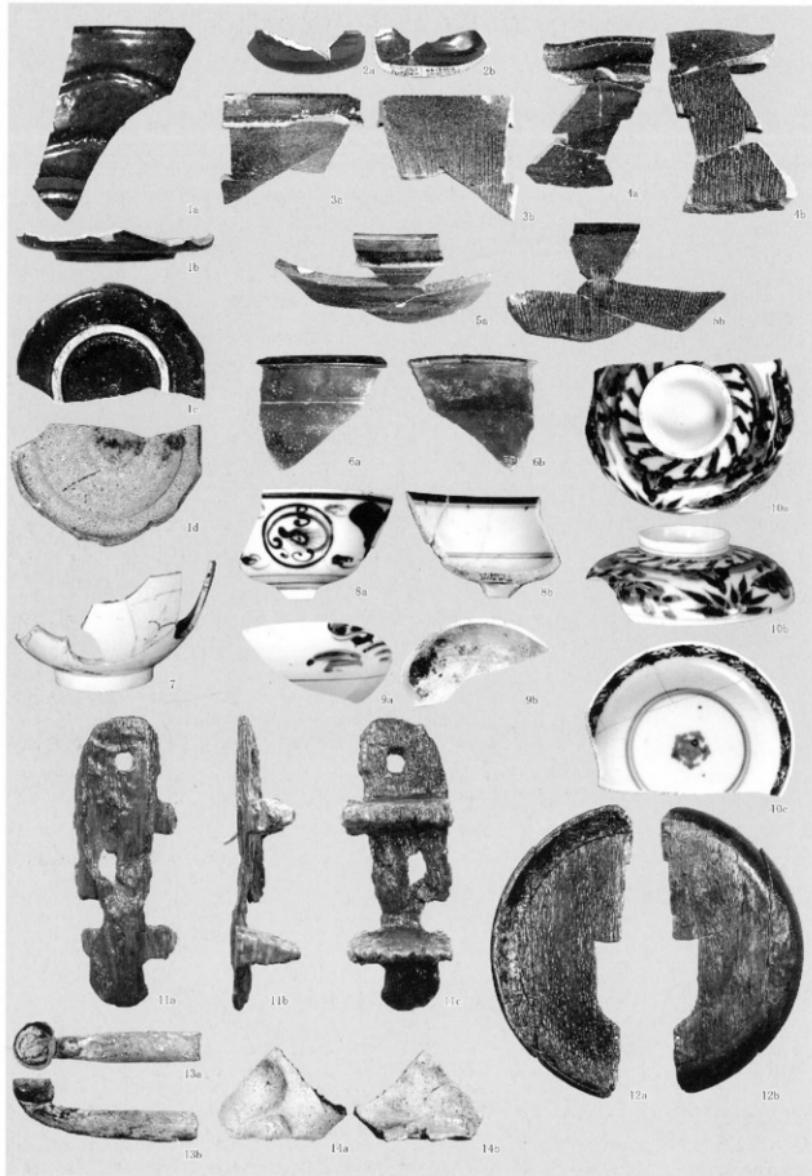


7 下層調査地点（VI～XV層）（東から）

図版3 溝跡・土坑・ピット・基本層序



図版4 出土遺物1



図版5 出土遺物2

## II 山口遺跡第18次発掘調査報告書

### 1 調査要項

遺 跡 名	山口遺跡（宮城県遺跡番号01178）
調 査 地 点	仙台市太白区富沢3-103-57
調 査 期 間	平成19年11月26日～11月30日
調査対象面積	61.44m <sup>2</sup>
調査面積	約25m <sup>2</sup>
調査原因	個人住宅建設工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主事 鈴木 降 主事 加藤 降則 文化財教諭 工藤慶次郎 臨時職員 森田 賢司

### 2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成20年5月18日付で地権者より提出された、個人住宅建築に係る発掘届(H20教生文第2-222)に基づき実施した。確認調査は平成19年11月26日に実施した。調査区は東西5m×南北5mに設定した。地表下1mまでは調査区規模で重機削除し、これ以下は調査区各辺を50cmほど後退させ、盛上および1層を削除した。遺構検出面はVI層上面、IX層上面である。地表下2m以下はさらに調査区を後退させ、バケット幅で下層の土層堆積状況を確認し調査を終了した。

なお、今調査は第17次調査と並行して調査を進めたため、遺構名、基本層は両地点で統一して付している。また、遺構の所属年代等についても本章でまとめて記した。

### 3 遺跡の位置と環境

今調査地点は遺跡範囲の西側に位置し、前章で扱った第17次調査の東側隣接地である。立地と環境および周辺の遺跡については、「V 富沢遺跡第142次発掘調査報告書」を参照されたい。

### 4 基本層序

基本層は、盛土下に15層を確認した。今調査地点の遺構検出面はVI層上面、IX層上面であるが、西側隣接地との対応関係からII～V層は削平されたものと考えられる。

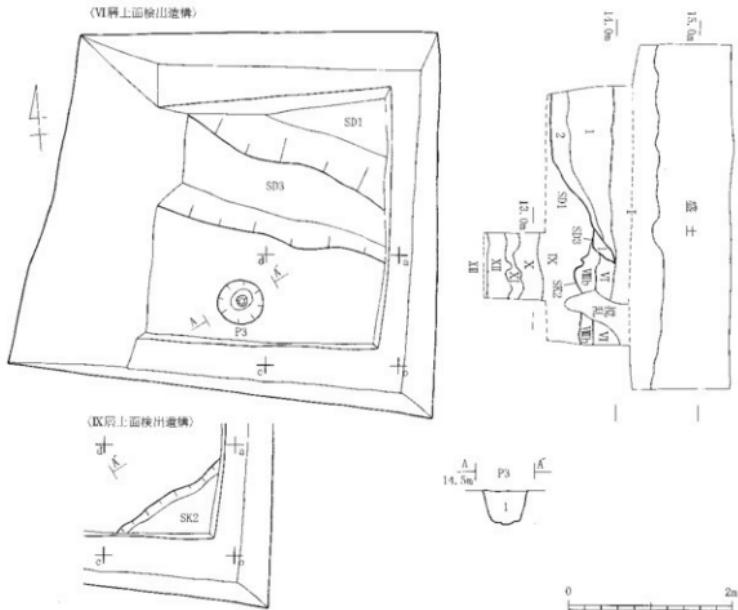
### 5 発見遺構と出土遺物

#### ① VI層上面検出遺構

##### 1) 溝跡

SD1溝跡 調査区北側のVI層上面で検出した。南側でSD3溝跡と重複し、本遺構の方が新しい。北側および東西両側は調査区域外に延びる。方向はN-65°-Wで、溝幅は不明である。底面は一部を検出した。確認面からの深さは70～75cmである。堆積層は2層で、1層は酸化鉄を多量に含むシルト質粘土で、2層は炭化物を多量に含む粘土である。遺物は出土していない。

SD3溝跡 調査区北側のVI層上面で検出した。SD1溝跡と重複し、本溝跡の方が古い。SD1溝跡と並行してお



基本層	土色	土性	層
I	10YR5/2	褐色透赤	V帶ブロックを多量に含む。灰化物を微量に含む。
VI	10YR5/2	呉須透赤	酸化鉄、マンガン粒を微量に含む。灰化物ブロックを多量に含む。10YR5/2砂質シルトブロックを微量含む。
VBh	10YR5/2	黒褐色	粘土
IX	10YR5/2	黒褐色	酸化鉄、マンガン粒を多量に含む。
X	10YR3/4	ぬれ色	シルト質粘土
XI	10YR3/3	鮮褐色	酸化鉄、マンガン粒、灰化物を含む。10YR4/3粘土ブロックを多量に含む。
XII	10YR5/2	暗褐色	酸化鉄、灰化物を多量に含む。特に上部に砂粒を多量に含む。
又Ⅲ	10YR5/2	黒褐色	粘土
層②	土色	土性	層
SD1	10YR5/3	暗褐色	シルト質粘土
2	2.5GY5/2	赤色	酸化物を多量に含む。酸化鉄、砂粒を少量含む。
SD1	2.5Y3/3	オリーブ褐色	粘土
SK1-1	10YR5/2	黒褐色	粘土ブロックを多量に含む。酸化物を微量含む。酸化マンガンをやや多量に含む。
P1-1	10YR5/2	呉須透赤	粘土

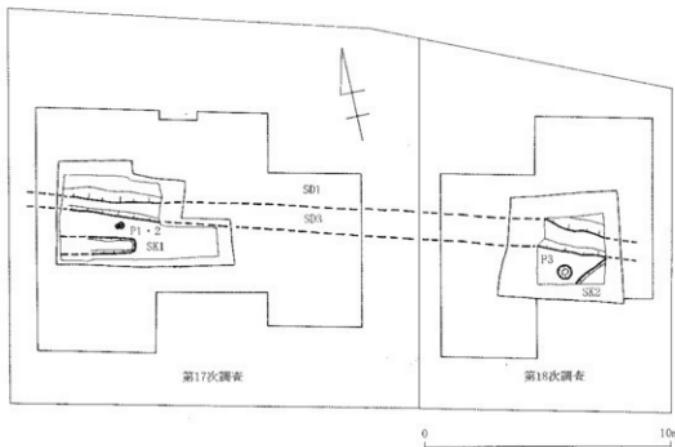
\*基本層は山口直面帶、次層古と異端である。

第7図 遺構平・断面図

り、西側隣接地でも検出されている。方向はN-64°-Wで、規模は北側がSD1溝跡に塗されているため、溝幅は不明である。確認面から底面までの深さは25~30cmである。東側隣接地を含め、検出された長さは22.3mである。遺物は時期不明の陶器片1点、非クロロ土師器片2点が出土したが、小片のため時期不明である。重複状況からSD1溝跡に先行する時期である。

## 2) ピット

P3 調査区南側、VI層上面で検出した。規模(長軸×短軸×深さ)は55×54×41cm、堆積土は1層で底面には15×13×3cmの柱状が認められる。遺物は近世陶器片1点、非クロロ土師器片2点が出土したが、小片のため図示し得なかった。



第8図 第17・18次調査成果

## ②IX層上面検出遺構

### 1) 土坑

SK2 土坑 調査区南東、IX層上面で検出した。土坑としたが、自然地形の傾斜の可能性も考えられる。堆積土は単層で、基本土層のⅥb層が入り込む。遺物は時期不明の非ロクロ上師器片が1点出土した。

### ③出土遺物

遺物はVI層で上師器小片が1点出土した。細片のため時期は不明である。

## 6まとめ

山口遺跡第17次調査地点と第18次調査地点は遺跡範囲の内側に位置し、地点間の距離は15mと隣接している。第17次調査では、SD1溝跡、これよりも新しい南北方向に延びるSD2溝跡、またSD1溝跡の南側に並走するやや規模の小さいSD3溝跡を検出した。第18次調査でも同様に、SD1溝跡、SD3溝跡を検出し、平面位置や走行方向、掘り込み形状や層位的関係から第18次調査の溝跡の延長と考えられる(第8図)。

SD1溝跡は底面にしがらみ状の施設を持った溝跡で東西方向に延びている。溝跡の肩部から出土した遺物より、18世紀頃にはある程度埋没していたものと考えられる。SD2溝跡では碗・皿・鉢・擂鉢・香炉などの陶器に加え、下駄や盤などの木製品、煙管や土人形などが出土した。SD1溝跡を切っており、1層上部および上面出土遺物は18世紀代のものが主体となるが、19世紀前半頃の遺物も含まれていることからその頃には埋まつたものと考えられる。溝跡の新旧関係はSD1溝跡⇒SD2溝跡となろう。SD3溝跡、SK1・2土坑はこれらの溝跡よりも下層で検出された。いずれも時期は不明であるが、堆積土よりSD3溝跡とSK1土坑は同時期のものと考えられる。



1 VI層上面遺構完掘状況（西から）



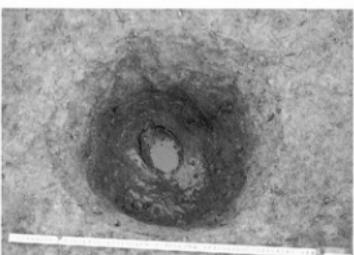
2 VI層上面遺構検出状況（西から）



3 調査区東壁



4 SK1 土坑完掘状況（西から）



5 P3 完掘状況（西から）

図版6 検出遺構

## 1 調査要項

遺跡名	陸奥国分尼寺跡（宮城県遺跡番号01020）
調査地点	仙台市宮城野区宮千代1丁目2-1, 2-11, 2-14, 2-16, 2-17
調査期間	平成20年4月30日～5月30日
調査対象面積	217m <sup>2</sup>
調査面積	約217m <sup>2</sup>
調査原因	共同住宅建設工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主事 加藤 隆則 文化財教諭 佐藤 正弥

## 2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成19年8月8日付けで地権者より提出された、共同住宅の建築工事に係る「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」（H19教生文第1-24号）に基づき、平成19年10月5日・9日に確認調査を実施した。確認調査の結果、遺構の存在が確認されたため、建物全般を対象とした本調査を実施した。なお発掘届は、調査終了後に平成20年6月24日付けで提出された（H20教生文第184-97号）。

発掘調査は建物建設予定地に東西8.5m×南北25.8mの調査区（約217m<sup>2</sup>）を設定し、はじめ調査区北半部を重機によりⅡ層（地表下55～90cm）まで掘削し、以下を人力により調査した。北半部におけるすべての調査を終了し、重機により埋め戻した。引き続き南半部をⅡ層（地表60～85cm）まで掘削し、以下を人力により調査した。

なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A-X=-194260.077m, Y=-7054.145m 杭B-X=-194290.024m, Y=-7057.103m）。

## 3 遺跡の位置と環境

陸奥国分尼寺跡は仙台市東部のJR仙台駅から東南東約2.5kmの若林区白萩町と宮城野区宮千代に位置している。広瀬川が形成した新寺の仙台中町段丘から沖積平野へ移行する自然堤防上に立地し、標高は11m前後である。

当遺跡では昭和39年から平成17年まで第1～11次にわたる発掘調査が行われており、伽藍配置は未確定ながらも、寺域の中心部で確認された建物跡は大きく2時期（I期・II期）に分けられることが明らかとなってきた。第10次調査では、創建期段階であるI期の遺構を6次調査S B 1と10次調査S B 2の掘立柱建物跡2棟と金堂跡下層遺構をあて、またII期の遺構を金堂跡と捉えている（渡部2005）。

今回調査地点は、遺跡の北東に位置し、推定寺域線の東辺が敷地西溝を通過している。推定寺域線の東辺中央部に位置する第10次調査では、区画施設が検出されず、また推定寺域線より東側で軒瓦類が出土することから、寺域はさらに東側に及ぶと推測している（渡部2005）。また、本地点の西側隣接地の第8次調査では、平安期の堅穴住跡4軒を検出した。これらの住居跡からは須恵器の大甕、直刀、刀子などの他、「佛」・「妙」と墨書きされた土器も出土し、一般集落とは異なった性格が考えられている（主演1999）。



第9図 遺跡の位置と周辺の遺跡

#### 4 基本層序

基本層は盛土下に8層を確認した。I層は現代の耕作土で、III層が古代～近世の遺構確認面である。III層以下は北壁中央で下層調査を実施しIV～VI層を確認した。土質はI～III層までが砂質シルトで、これ以下は粗・細粒砂や粘土の互層である。V層以下は西側へ傾斜している。

#### 5 発見遺構と出土遺物

調査区は東西約9m×南北約22mの南北に長い長方形（約217m<sup>2</sup>）である。大部分を搅乱に壊され、実質的な面積は調査区全体の半分程度である。遺構は、III層上面で竪穴住居跡1軒、竪穴造構2基、溝跡6条、土坑26基（うち倒木痕1）、ピット146基を検出した。出土遺物は平箱13箱で、このうち6箱が表土および搅乱で出土した。遺物の多くは瓦（軒丸瓦片1点、軒平瓦片2点、丸瓦片2箱、平瓦片10箱）で、土器平箱1箱（非クロロ土師器、須恵器甕・高台付甕とともに1個体のほか、須恵器甕、甕の破片約50点）が含まれる。

##### 1) 竪穴住居跡・竪穴遺構

S I I 竪穴住居跡 調査区南側に位置し、S D 2溝跡、P 44・45・47・129・130・133・134と重複し、いずれの遺構よりも古い。北東コーナーは搅乱によって壊されている。平面形は南北方向に長い長方形で、規模は東西221cm×南北244cm。壁の高さは、北壁と西壁で25cm、南壁と東壁で15cmである。堆積土は5層で、III層ブロックを含んだ暗褐色土を基準としている。2～5層はカマド内堆積土で、3層は燃焼部内の灰集積層である。床面は中央部分が平坦で、北西隅はやや低くなっている。貼り床はしまりの強い黄褐色砂質シルト土（6層）を、カマド前面のみに厚さ5cmほど敷設している。掘り方理上は

番号	遺跡名	種別	立地	持代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	祭祀用石塔寺	寺社	段丘	奈良、平安	8	南小糸遺跡	集落・散居	自然埋葬	绳文～近世
2	須恵器分野跡	寺殿	段丘	奈良、平安	9	須恵器古墳	前方後円墳	自然埋葬	古墳（前期）
3	法螺吹き跡	臼納	自然掩埋	古編	10	古林城跡	円墳、集落、遺構	自然埋葬	古墳、平安、中世、近世
4	保春院貨造跡	乳頭	自然掩埋	古代、中世、近世	11	革谷河原奈良里跡	集落遺跡	後晉後期	古代
5	米穀面積跡	集落、畠跡	自然掩埋	夷文、古墳、古代、中世、近世	12	中仁家遺跡	盆地地	後晉後期	平安
6	塙跡古墳	円墳？	自然掩埋	（後晋？）	13	中仁家南遺跡	集落、墓地	自然埋葬、秋津跡	新石器～近世
7	鍋古墳	円墳？	自然掩埋	古編（後晋？）	14	古井遺跡	古井	自然埋葬	奈良、平安



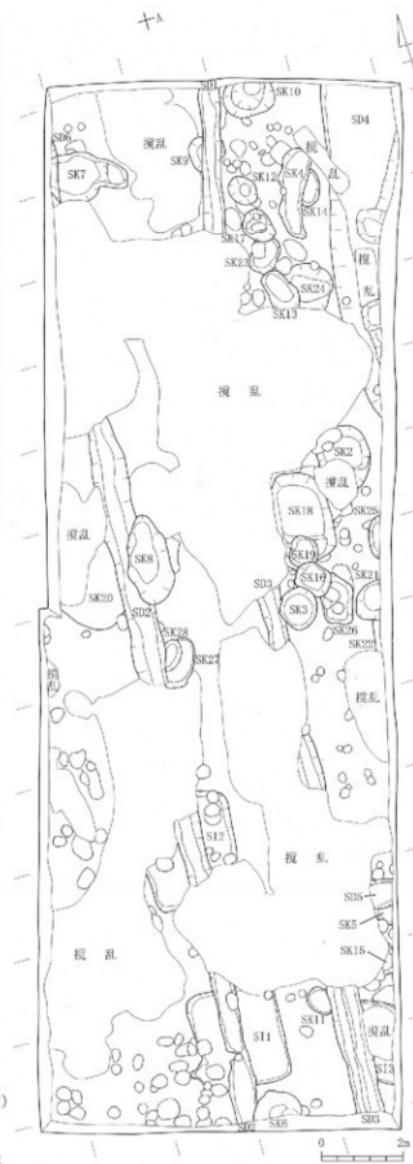
第10図 調査地点の位置



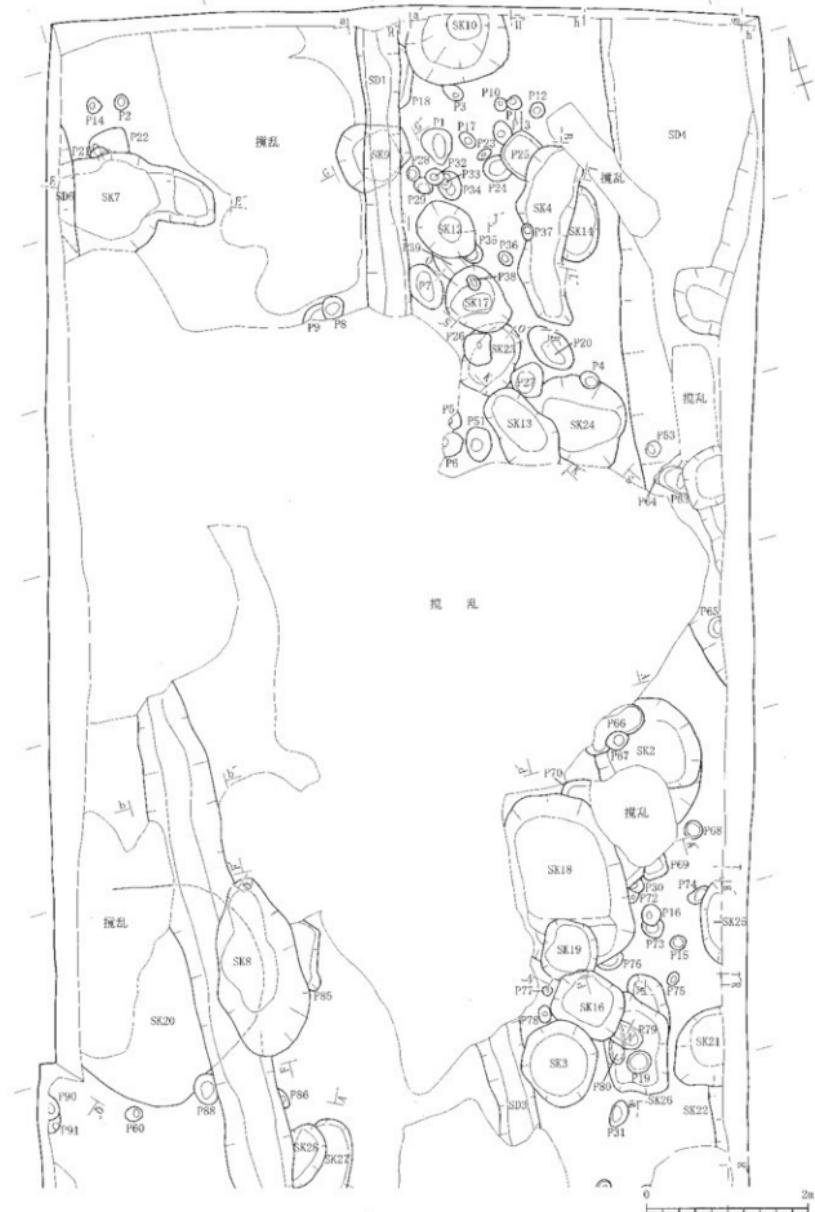
第11図 調査区配置図

暗褐色砂質土ブロックを含んだ黄褐色砂質シルト土(7層)である。床面ではビットが検出されず、柱穴は不明である。

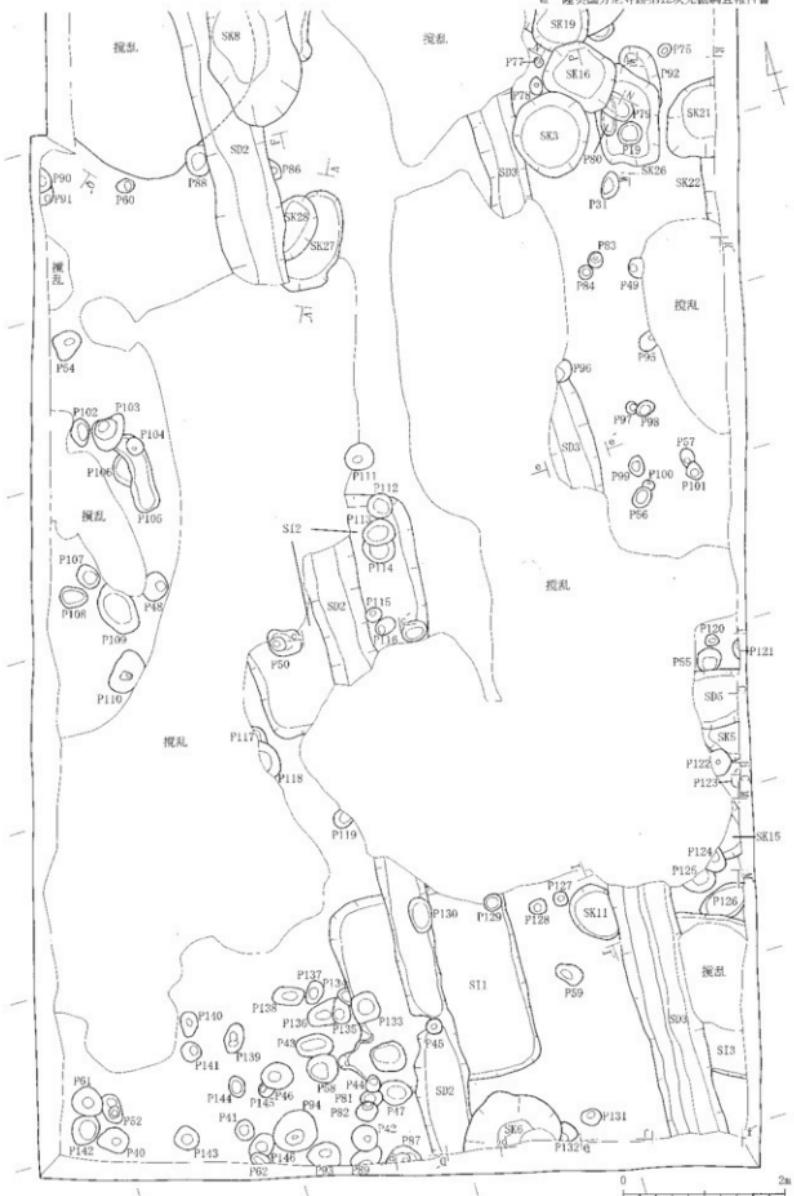
カマドは西壁南側に設けられる。袖は右袖が残存するが、左袖はP44に積されている。両袖芯材には丸瓦2個体(No.

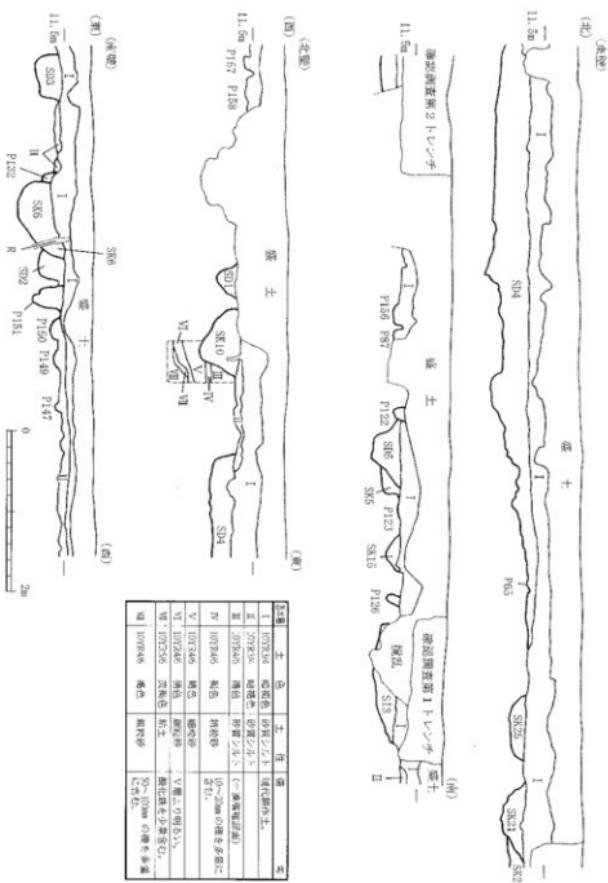


第12図 調査区全体図



第13図 遺構平面図・北半





### 第15図 土層断面図

3・5)を用いている。袖構築土は基本層Ⅲ層に非常によく似たしまりの強い黄褐色砂質シルト土(8層)である。燃焼部は、焚口前面を長軸43×短軸36cmの円形に深さ20cmほど掘り込んでいる。煙道は外側へほとんど延びず燃焼部に煙出しが隣接する。断面観察によればカマドの構築は、住居掘り方を掘削後、掘り方の埋積や貼り床敷設に先行してしまりの強い黄褐色砂質シルト土で袖芯材を据え、その後掘り方を埋め貼り床を敷設している。

出土遺物は、カマド軒袖の芯材に用いられていた丸瓦のほか、カマド焚口付近で非ロクロ土器盤1個体(No.1)、その下部より完成の丸瓦(No.4)が出土した。ともに2層から出土している。またこのほか、南壁際の堆積土1層より須恵器高台付环(No.2)が出土した。第17図に示したものは5点である。1は非ロクロ土器盤である。底径が大きく、最大径は胴部中央からやや上付近である。底部には木葉痕が見られる。2は須恵器高台付环で、底部は

回転ヘラ切り後高台をナデつけている。3～5は丸瓦で3・5は袖芯材、4はカマド2層出土である。

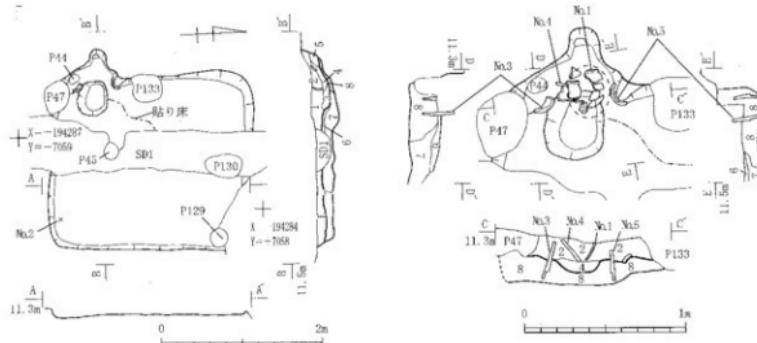
S I 2 穴造構 調査区南側に位置し、SD 2 溝跡、P 50-112～116と重複し、新旧関係はいずれの遺構よりも古い。北西および南西部が擾乱によって大きく壊されている。平面形は南北方向に長い長方形で、規模は東西225cm × 南北265cm、壁の高さは南西部が3～5cm、北壁から東壁にかけては約20cmである。カマドやその他の施設は見られず、また堆積物や貼り床等も見られないことから、堅穴造構とした。堆積土は単層でⅢ層ブロックを極多量に含む暗褐色砂質シルト土である。床面は中央部から西側がやや高く、南西部および北東部がわずかに低い。ピットは南東隅に1基検出した。P 1は平面形が楕円形で、規模は長軸29cm、短軸26cm、深さ6cmである。堆積土は炭層でⅢ層ブロックを多量に含む暗褐色土である。

遺物は南西部床面から須恵器壺(No.2)の口縁部から胴部上半の破片が1点、P 1より平瓦(No.3)1点が出土した。ピット底面に狭端部を据え、直立した状態で出土している。また堆積土中より微量の須恵器壺・鏡のほか、瓦が平箱1箱出土している。第20図に示したのは5点である。1は堆積土中出土の須恵器壺の破片で、底部は回転糸切りで「一」のヘラ書きが見られる。

S I 3 穴造構 調査区南東に位置し、東側は調査区域外に延びている。SD 3 溝跡、P 126と重複し、いずれの遺構よりも古い。中央は擾乱によって壊されている。カマドおよびその他の施設はなく、安定した床面も見られないことから堅穴造構とした。規模は、西壁が195cmで、北壁および南壁は不明である。壁の高さは、北壁と南壁で約10cm、西壁はSD 3 溝跡に残され2～3cm程度しか残っていない。底面は擾乱により北側はほとんど残っていない。残存部では南側に向かって緩やかに上がっている。堆積土は4層で、いずれもⅢ層ブロックを多く含み、3層では特に集積している。出土遺物はない。

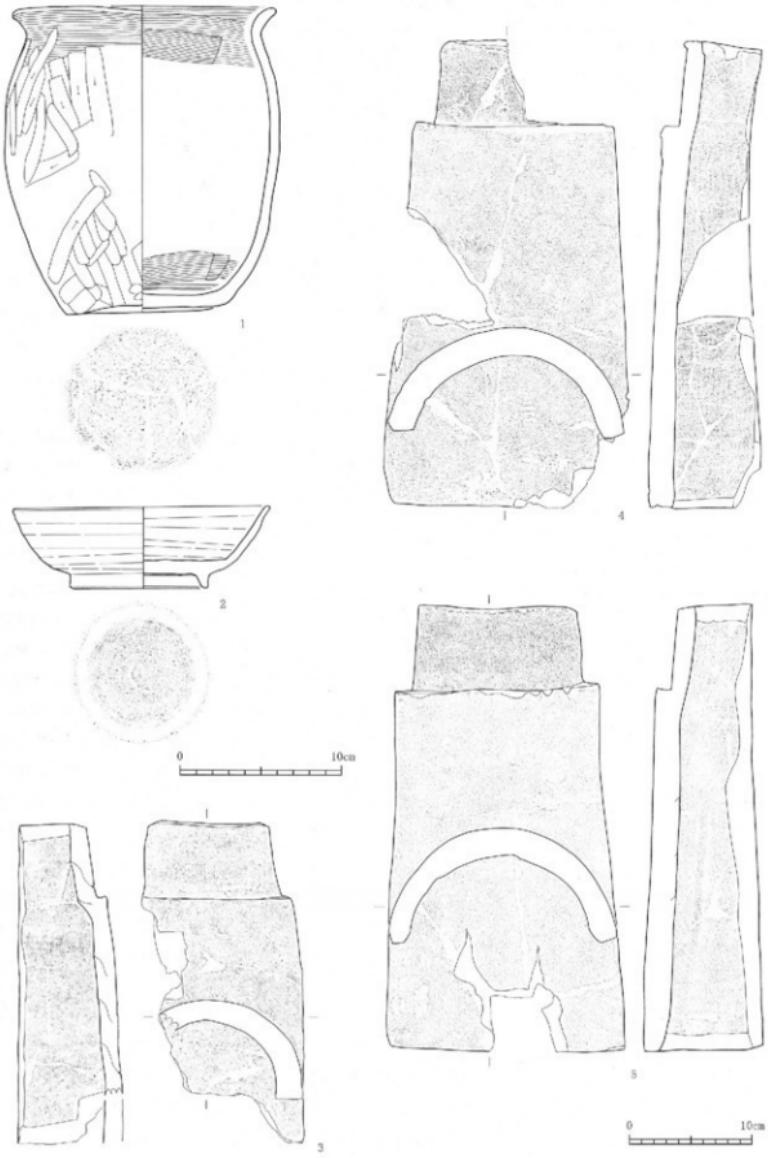
## 2) 溝跡

SD 1 溝跡 調査区北側のⅢ層上面で検出した。北側は調査区域外に延び、南側は擾乱に接されている。SK 9 土坑、P 7・18と重複し、P 7よりも古く、SK 9 土坑、P 18よりも新しい。方向はN-14°-E、規模は検出長3.6



層位	上色	土性	備考
S I 1-1	07YK34 暗褐色	砂質シルト 砂を少量化。	
2	07YK35 暗褐色	砂質シルト Ⅲ層ブロックをやや多量に含む。無化物質を微量に含む。	
3	10YR2/3 黄褐色	砂質シルト	
4	10YR2/3 黄褐色	砂質シルト	
5	10YK34 暗褐色	砂質シルト Ⅲ層ブロックをやや多量に含む。無十ブロックを微量に含む。	
6	10YK35 暗褐色	砂質シルト (=貼り床) 10YR3/4 暗褐色砂質シルトブロックを少量含む。	
7	10YK36 暗褐色	砂質シルト (=貼り方壁土) 10YK3/4 暗褐色砂質シルトブロックを少量化。	
8	10YK36 暗褐色	砂質シルト (=砂質帶土)	

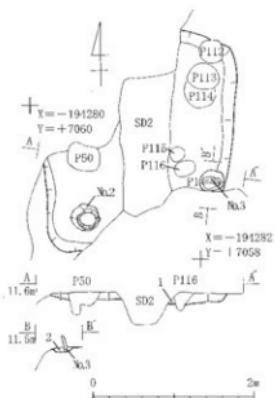
第16図 S I 1 穴造居住跡平・断面図



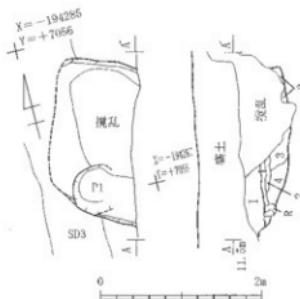
第17図 SI 1 積穴住居跡出土遺物

学年 季節	登録番号	音声標本名	出田地名	分類別	記録日 (日付)	特徴 (形狀、形態、體積)、時間	販賣	
							箱號	箱號
							直徑 (mm)	高さ (mm)
1 春	C-1 1-1	カヌマドリ	西原	箱	19.1	16.2	9.6	【譜面】外側: 1:横ヨコズナ、頭へカラヅミ・内側: ハツナ
2 夏	U-9 1-1	南極朱鷺	西原	箱	19.6	15.8	8.5	内腹堅膜: 外側: ホクナシ、頭へカラヅミ・内側: 11カラヅミ
No.	登録番号	種名: 俗名	病害類	種類	日付	直徑	高さ	販賣
3 秋	I-1 1-1	カヌマドリ	赤瓦	日付	19.0	16.0	9.5	【譜面】外側: 1:横ヨコズナ、頭へカラヅミ・内側: ハツナ
4 冬	P-2 1-1	カヌマドリ	赤瓦	日付	19.0	16.0	9.5	【譜面】外側: 1:横ヨコズナ、頭へカラヅミ・内側: ハツナ
5 冬	F-2 1-1	カヌマドリ	赤瓦	日付	19.0	16.0	9.5	【譜面】外側: 1:横ヨコズナ、頭へカラヅミ・内側: ハツナ

### SI 1 嚴穴住居跡出土遺物觀察表



第18図 SI2 穴道模平・断面図



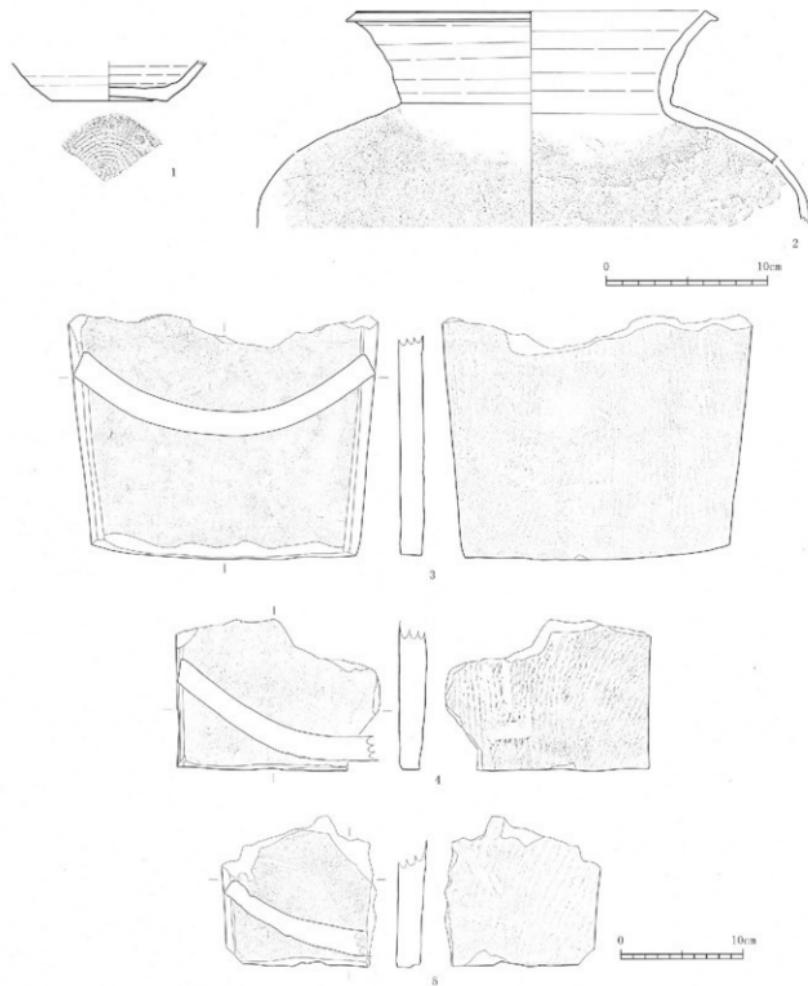
第19図 Si3縦穴構造・断面図

m. 最大幅55cm、最小幅45cm、深さ20cmである。断面形は台形で堆積土は2層である。遺物は土器標3点、丸瓦3点、平瓦16点が出土したが、いずれも小片のため図示しえなかった。

S D 2溝跡 調査区北西から南側のⅢ層上面で検出した。北東部および中央部で搅乱に壊されているが、北側は搅乱を経て、S D 6溝跡に続く可能性もある。S I 1堅穴住居跡、S I 2堅穴造構、SK 6・8・20・27-28土坑、P45-86・88・115・130と重複し、堅穴住居跡・堅穴造構よりも新しく、その他の土坑やピットよりも古い。方向はN-3°-Eで、規模は検出長17.5m、最大幅88cm、最小幅30cm、深さ29cmである。断面形は台形で、堆積土は北側では1層、南側では4層確認される。遺物は北側の堆積土1層で特に集中して出土した。内容は土器器坏3点、甕5点、口クロ土器器坏2点、須恵器残4点のほか、大量の瓦(丸瓦123点、平瓦202点)が出土した。第22図に示したのは6点で2・4が丸瓦、5・6・8・9は刻印をもつ平瓦である。刻印は5が「尺」、6・8・9は「物」である。

SD 3溝跡 調査区中央から南側のⅢ層上面で検出した。北側が搅乱により壊されているほか、中央や南側も搅乱に棲されている。南側でS I 3竪穴造構、SK 11土坑と重複するほか、北側でSK 3十坑と重複している。新旧関係はSK 3土坑よりも古く、S I 3竪穴造構、SK 11土坑より新しい。方向はN-5°-EでSD 2溝跡とはおおむね平行している。規模は検出長13.0m、最大幅78cm、最小幅18cm、深さ29cmである。南部ではテラス状に段差をつけて掘り込まれている。堆積土は1層で、出土遺物は土師器壺・甕がともに3点、須恵器壺1点のほか、丸瓦9点、平瓦44点である。第22図に示したのは丸瓦1点、平瓦1点で、上部は小片で図示し得ない。

S D 4 溝跡 調査区北側のⅢ層上面で検出した。北側および東側は調査区域外に延びているほか、一部が擾乱に遭されている。方向はN=11°-E、検出長は8.3mである。溝幅は最大部で北壁部の114cmである。立ち上がりは北側ほど急で、南側に至り緩やかになる。底面は、溝あるいは土坑状の掘り込みをもっている。またP53・63~65としたものも堆積上の類似から他遺構ではなく、本溝跡に伴うものと思われる。堆積上は4層で、上層から下層まで酸化鉄を大量に含んでおり、部分的に画面的な沈着を見せる。遺物は堆積土1層で須恵器蓋(第22図1)が1点出土したのみである。



第204図 SI2竪穴遺構出土遺物

出土 番号	種類	出土点		分類		法算 (cm)		特徴 (形状・壁形・裏面)、時期	等級 固形
		遺構名・位置	遺構圖	縦断	横断	断面	口徑		
1 G-2	G-2	假山部	环	(2.5)	—	(2.7)	【側面】外面：底面斜板角切へラ型き／一 内面：ロコロナフ	17-6	
2 G-1	G-2・南西部	假山部	奥	(3.4)	21.7	—	【側面】外面：タタキ打 内面：当て具板	17-9	
No. 9強凸井 遺構名・位置	遺構圖	別別	凹	—	—	—	—	9強凸井	
3 G-2 S-2・2	平直	有目→ケツリ(頭)→ナメ(腰)→側面ケズリ	側面直(腰)	—	—	—	高大且(20.0cm, 幅25.0cm, 高さ5.0cm)	18-5	
4 G-3 S-2	平瓦	有目→ナメ(腰)→側面ケズリ	側面直(腰)	—	—	—	—	18-7	
5 G-4 S-2	平瓦	有目→薄ケズリ→側面ケズリ	側面直(腰)	—	—	—	—	18-8	

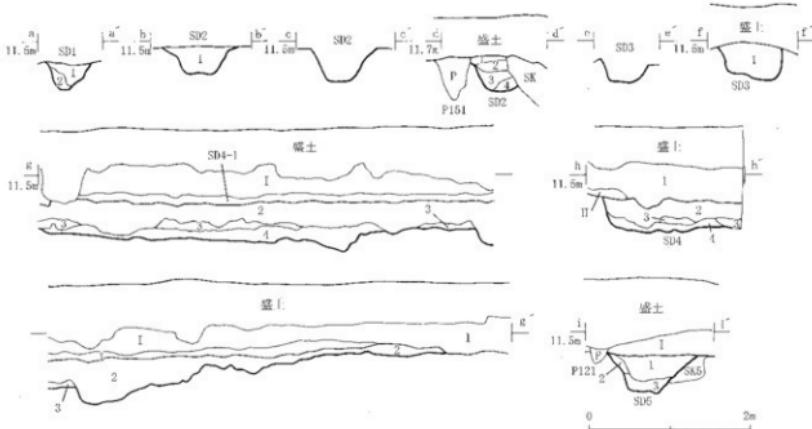
S D 5溝跡 調査区南側Ⅲ層上面で検出した。S K 5土坑、P55・121と重複し、S K 5土坑よりも新しく、いずれのビットよりも古い。東西方向に延びる溝と思われるが、西側は搅乱に壊され、東側は調査区域外に延びており方位は不明である。断面形は箱型で堆積土は3層である。遺物は丸瓦4点、平瓦1点出土しているが、小片のため図示し得なかった。

S D 6溝跡 調査区北西のⅢ層上面で検出した。調査区内にわずかに掘り込みが見られる程度で底面の検出には至らなかった。大部分は調査区域外に延びるものと思われる。南側は搅乱に壊されている。方向はN $\sim$ 10°~Eで検出長は1.6m。南側の搅乱を終て、SD 2溝跡につながる可能性もある。出土遺物はない。

### 3) 土坑

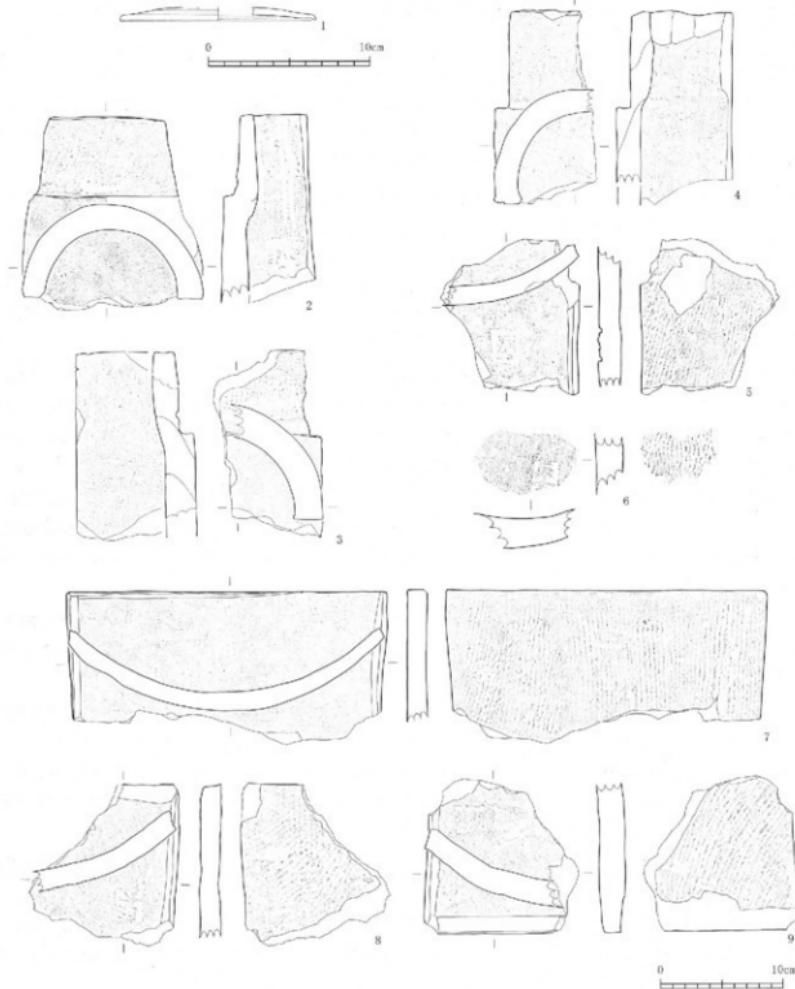
S K 2土坑 調査区中央東寄りで検出した。P66・67と重複し、いずれのビットよりも古い。南北を搅乱に壊されているが、平面形は楕円形であろう。底面は北側が深く南側が浅い。規模は長軸165cm以上、短軸126cm以上、深さは北側で50cmである。堆積土は4層で、近世陶器少量、須恵器壊・甕の破片2点、平瓦片約20点が出土した。第24図に示したのは須恵器甕と平瓦の各1点で、9の平瓦の凹面にはヘラ書きが見られる。時期は出土遺物から近世以降と思われる。

S K 3土坑 調査区中央東寄りで検出した。SD 3溝跡、SK 16土坑と重複し、いずれの造構よりも新しい。平面形は楕円形で、長軸は105cm、短軸は95cm、深さは35cmである。断面形はすり鉢状で堆積土は1層、瓦や柱大の礫が多量に出土した。遺物は平瓦が平箱1箱出土したほか、丸瓦片1点、須恵器壊・甕片、土師器甕片いずれも1点、



層	成	土色	土性	層	成	
SD4	1	10YR4/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅳ層	Ⅳ層
	2	10YR4/5	暗褐色	砂質シルト		
SD5	1	7.5YR3/2	黒褐色	砂質シルト	Ⅰ層	Ⅰ層
	2	7.5YR3/2	深褐色	砂質シルト	Ⅱ層	Ⅱ層
	3	10YR4/6	褐色	砂質シルト	Ⅲ層	Ⅲ層
	4	10YR4/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅳ層	Ⅳ層
SD6	1	10YR3/4	褐色	砂質シルト	Ⅳ層	Ⅳ層
	2	10YR3/4	褐色	砂質シルト		
	3	10YR9/8	明褐色	砂質シルト		
	4	10YR4/4	褐色	粘土質シルト		
SUS-1	1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	Ⅳ層	Ⅳ層
	2	10YR4/4	褐色	砂質シルト		
	3	10YR4/4	褐色	砂質シルト		
SUS-2	1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	Ⅳ層	Ⅳ層
	2	10YR4/4	褐色	砂質シルト		
	3	10YR4/4	褐色	砂質シルト		

第21図 溝跡断面図



回中 番号	出雲 番号	出土地点 遺物名・位置	分類 遺物名	法縦 高さ (cm)	法横 幅 (cm)	法深 奥 (cm)	特徴(形状、整形、開口、時差)			写真 図版
							縫隙 縫隙	凸 面	裏 面	
1	H-1	SD-4 安堵名・竪置	縫隙	11.1	16.0	-				17-3
2	P-5	SD-2 瓦瓦	縫隙	11.1	16.0	-	縫隙(切)→ナガ(縫)	高大(16.0cm、幅(14.0cm、高さ(7.7cm	18-1	
3	P-6	SD-3 瓦瓦	縫隙	11.1	16.0	-	縫隙(切)→ナガ(縫)	18-2		
4	P-4	SD-2 瓦瓦	縫隙	11.1	16.0	-	縫隙(切)→ナガ(縫)	18-3		
5	G-8	SD-2 瓦瓦	縫隙	11.1	16.0	-	90度「瓦」	19-1		
6	G-7	SD-2 瓦瓦	縫隙	11.1	16.0	-	90度「地」	19-2		
7	G-1	SD-2 瓦瓦	縫隙	11.1	16.0	-	90度「地」	19-3		
8	G-9	SD-2 瓦瓦	縫隙	11.1	16.0	-	90度「地」→六角→縫隙(切)	19-4		
9	G-5	SD-2 瓦瓦	縫隙	11.1	16.0	-	90度「地」	19-5		

第22図 溝跡出土遺物 1

鉢玉1点が出土した。第24図5は鉢玉で底面付近から出土している。よって本遺構は、近世以降に棗や瓦、土器などをまとめて棄てた施棄土坑と思われる。

S K 4 土坑 調査区北側で検出した。SK14土坑、P25・37と重複し、P37よりも古く、SK14土坑、P25よりも新しい。北側は一部擾乱に遭されている。平面形は南北に長い不整形で、長軸は218cm、短軸は50cm、深さは15~20cmである。断面形は浅いすり鉢状で堆積土は1層である。遺物は土師器隻片、須恵器壊片1点、平瓦片が少量出土した。このうち第24図に示したのは1点の須恵器壊である。底部は回転糸切りである。

S K 5 土坑 調査区南東で検出した。東側は調査区域外に延び、西側は擾乱に遭されている。また、SD 5溝跡、P122に切られているため、平面形および規模は不明である。確認面からの深さは34cmである。堆積土は1層で、遺物は出土していない。

S K 6 土坑 調査区南側で検出した。南側は調査区域外に延びている。SD 2溝跡、P132と重複し、P132よりも古く、SD 2溝跡よりも新しい。平面形は楕円形で、規模は南壁断面で118cm、深さ78cmである。堆積土は2層で、遺物は平瓦片が2点出土している。

S K 7 土坑 調査区北西側で検出した。西側は調査区域外に延びている。SD 6溝跡、P21・22と重複し、いずれの遺構よりも古く。西側は調査区域外に延び、南側は擾乱に遭されている。平面形は、楕円形の土坑東側に浅い土坑が取り付く形をしている。長軸192cm以上、短軸116cm以上、深さは西側58cm、東側は16cmである。堆積土は5層で、いずれもⅢ層ブロックを多量に含んでいる。遺物は丸瓦片7点、平瓦片38点が出土した。

S K 8 土坑 調査区中央西寄りで検出した。SD 2溝跡、P85と重複し、両遺構よりも新しい。北側の上部は擾乱に遭されている。平面形は楕円形で、長軸212cm、短軸108cm、深さは9cmである。堆積土は2層で、遺物は土師器甕3点、壺3点、須恵器壊4点のほか、丸瓦9点、軒平瓦1点、平瓦61点が出土した。図示したのは1点で、第24図6は凸面に「古」の刻印をもつ丸瓦である。

S K 9 土坑 調査区北側で検出した。西側上部を擾乱に遭されており、SD 1溝跡と重複する。新旧関係は本遺構のほうが古い。平面形は東西にやや長い楕円形で、長軸90cm、短軸80cm、深さ36cmである。堆積土は1層で、瓦が出土した。

S K 10 土坑 北壁中央付近で検出し、北側は調査区域外に延びる。P3・18と重複し、本遺構が新しい。平面形は円形と考えられる。規模は長軸126cm、短軸86cm、深さ68cmである。堆積土は2層で、瓦片が出土した。

S K 11 土坑 調査区南東側で検出した。東側でSD 3溝跡と重複し、同溝跡よりも古い。平面形は南北方向に長い楕円形で、規模は長軸68cm、短軸56cm以上、深さ16cmを計る。断面形は浅いすり鉢状で、底面は南側は低く北側が高い。堆積土は3層で、遺物は出土していない。

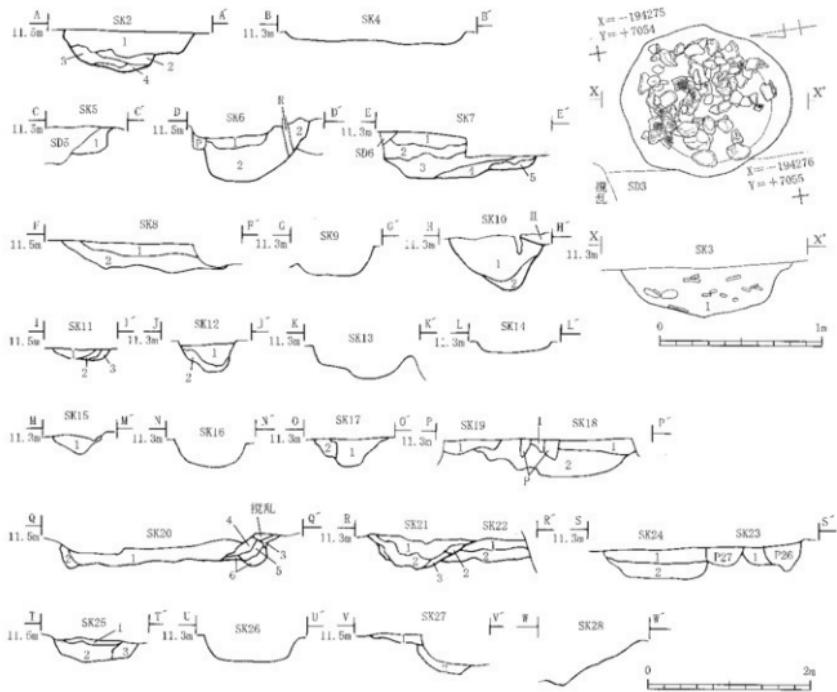
S K 12 土坑 調査区北側で検出した。P35・39と重複し、同ピットよりも新しい。平面形は楕円形で、規模は長軸80cm、短軸62cm、深さ40cmである。堆積土は2層で、遺物は出土していない。

S K 13 土坑 調査区北側で検出した。SK23・24土坑、P27と重複し、いずれの遺構よりも新しい。また南側を擾乱に遭されている。平面形は南北に長い楕円形で、規模は長軸118cm以上、短軸54cm、深さは南側で42cmである。遺物は土師器隻片1点、須恵器壊片1点、丸瓦片2点、平瓦片11点が出土した。

S K 14 土坑 調査区北側で検出した。SK4土坑と重複し、本遺構の方が古い。平面形は南北に長い楕円形で、規模は長軸100cm以上、短軸12cm以上、深さ13cmである。断面形は浅い皿状で底面はおおむね平坦である。堆積土は単層で、遺物は出土していない。

S K 15 土坑 調査区東壁際南部で検出した。東側は調査区域外に延び、西側は擾乱に遭されている。またP124にも切られているため、平面形および規模は不明である。深さは13cmである。堆積土は1層で、遺物は出土していない。

S K 16 土坑 調査区中央東寄りで検出した。SK3・19・26土坑、P79・80と重複し、SK3土坑よりも古く、その



第23図 土坑平・断面図

他の遺構よりも新しい。平面形は隅丸方形で、規模は長軸80cm、短軸60cm、深さ36cmである。断面形はU字形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

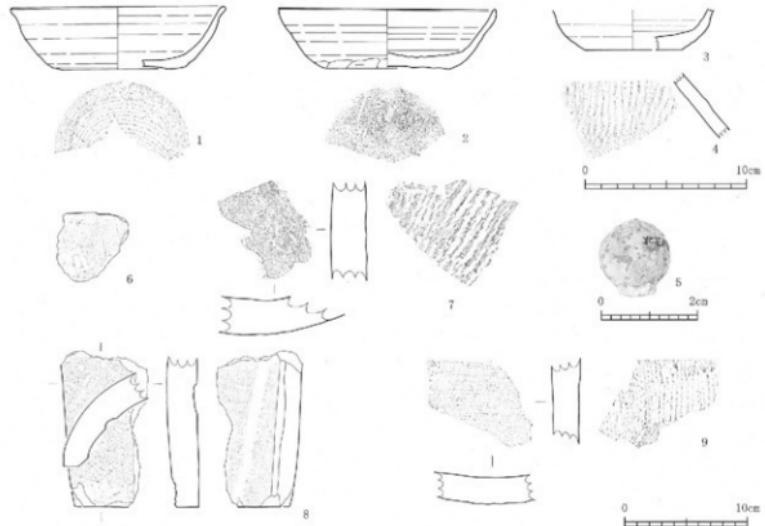
S K17土坑 調査区北側で検出した。SK23土坑、P38・39と重複し、P38よりも古く、SK23土坑、P38よりも新しい。平面形は南北に長い楕円形で、規模は長軸86cm、短軸72cm、深さ35cmである。堆積土は2層で、遺物は平瓦片6点が出土した。

S K18土坑 調査区中央東寄りで検出した。西側上部は擾乱に壊されている。SK19土坑、P71・72・76と重複し、SK19土坑よりも古い。平面形は南北に長い楕円形で、規模は長軸215cm、短軸140cm以上、深さは最深部で48cmである。底面は北側が平坦で、南側に向かって浅くなる。堆積土は2層で、土師器壊片3点、須恵器壊片1点が出土した。

S K19土坑 調査区中央東寄りで検出した。SK16・18と重複し、SK16土坑よりも古く、SK18土坑よりも新しい。平面形は楕円形で、規模は長軸74cm以上、短軸66cm、深さは18cmである。堆積土は1層で、遺物は平瓦片1点が出土した。

S K20土坑(倒木痕) 調査区西壁中央で検出した。西側は調査区域外に延び、擾乱にも壊される。SD2溝跡、SK8土坑、P88と重複し、いずれの遺構よりも古い。平面形は不整形で、規模は長軸220cm以上、短軸140cm以上、深さ45cmである。堆積土は6層を確認し、いずれも非常にしまりがある。遺物は出土していない。

S K21土坑 調査区東壁中央で検出した。東側は調査区域外に延びる。南側でSK22土坑と重複し、本遺構が新し



図号	登録番号	出土地点	分類	法量 (cm <sup>3</sup> )			特徴 (形状、墳形、窓型)	時代	写真 (枚数)
				縦幅	横幅	厚さ			
1	G-5	SK-4	須恵器 壺	<0	(13.0)	G.0	【須恵器】外面：クロナガ、底面：輪郭	古墳時代	17-4
2	G-7	P27	須恵器 壺	3.8	(13.0)	G.8	【須恵器】外面：クロナガ、底面：輪郭	古墳時代	17-5
3	G-5	SK-74	須恵器 壺	(2.0)	—	(6.2)	【須恵器】外面：クロナガ、底面：輪郭	古墳時代	17-7
4	G-4	SK-2	須恵器 壺	—	—	—	【須恵器】外面：タカラ目	古墳時代	17-8
5	N-1	SK-3	須恵器 壺	新玉	—	13.5	内面：輪郭	古墳時代	17-9
No.	出土地点	分類	法量 (cm <sup>3</sup> )	特徴 (形状、墳形、窓型)	時代	写真 (枚数)			
6	P-9	SK-8	須恵器 壺	1.0	—	—	縫合 (縫) → ナギ (縫)	古墳時代	18-5
7	G-16	P43	須恵器 壺	—	—	—	縫合 (縫)	古墳時代	19-5
8	P-16	P43	須恵器 壺	—	—	—	縫合 (縫) → ナギ (縫)	古墳時代	18-6
9	G-13	SK-2	須恵器 壺	—	—	—	縫合 (縫)	古墳時代	19-7

第24図 土坑・ピット出土遺物

い。平面形は不明で、規模は東壁で94cm、深さは43cmである。堆積土は3層で、遺物は出土していない。

S K22土坑 調査区東壁中央で遺構の立ち上りがみ検出した。底面は未検出で、東側は調査区域外に延びる。北側でS K21土坑と重複し、木造構の方が古い。平面形および規模は不明である。堆積土は2層で、遺物は出土していない。

S K23土坑 調査区北側で検出した。S K13・17土坑、P 26・27と重複し、いずれの遺構よりも古い。北側はP 27に接されているほか、西側一部を擾乱に壊されている。平面形は東西に長い楕円形である。規模は、長軸92cm、短軸62cm以上、深さ27cmである。堆積土は1層で、遺物は瓦片が2点出土した。

S K24土坑 調査区北側で検出した。S K13土坑、P 4・27と重複し、いずれの遺構よりも古い。南側一部を擾乱に壊されている。平面形は東西にやや長い楕円形で、規模は長軸116cm以上、短軸104cm以上、深さは39cmである。

堆積土は2層で、遺物は1層から丸瓦片1点、平瓦片2点、2層より須恵器坏片1点、丸瓦片1点、平瓦片9点が出土した。第24図に示したのは1点である。3は2層出土の須恵器坏片1点で、底部はヘラケズリである。

S K25土坑 調査区東壁中央で検出した。北側でP 74と重複する。東側は調査区域外に延びているため不明だが、調査区内では南北に長い楕円形である。規模は、東壁断面で104cm、深さ27cmである。堆積土は3層で、遺物は平瓦片2点が出土した。

S K26土坑 調査区中央東寄りで検出した。S K16土坑、P 19・79・80・92と重複し、S K16土坑、P 19・79・80よりも古くP 92よりも新しい。平面形は方形を基調とするが北側でやや不整になる。規模は、長軸130cm以上、短軸は80cm、深さ32cmである。底面はおおむね平坦で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

S K27土坑 調査区中央で検出した。SD 2溝跡、S K28土坑と重複し、西側を同遺構に接している。そのため平面形は不明であるが、南北方向に長い楕円形と思われる。底面は北半が浅く、南半で深く掘り込まれる。規模は長軸134cm、短軸54cm以上、深さは北側で12cm、南側で50cmである。堆積土は2層である。遺物は出土していない。

S K28土坑 調査区中央で検出した。SD 2溝跡、S K27土坑と重複し、SD 2溝跡よりも古くS K27土坑よりも新しい。東側は溝跡に接しているが、平面形は南北方向に長い楕円形と思われる。規模は、長軸82cm以上、短軸44cm以上、深さ27cmである。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

#### 4) ピット

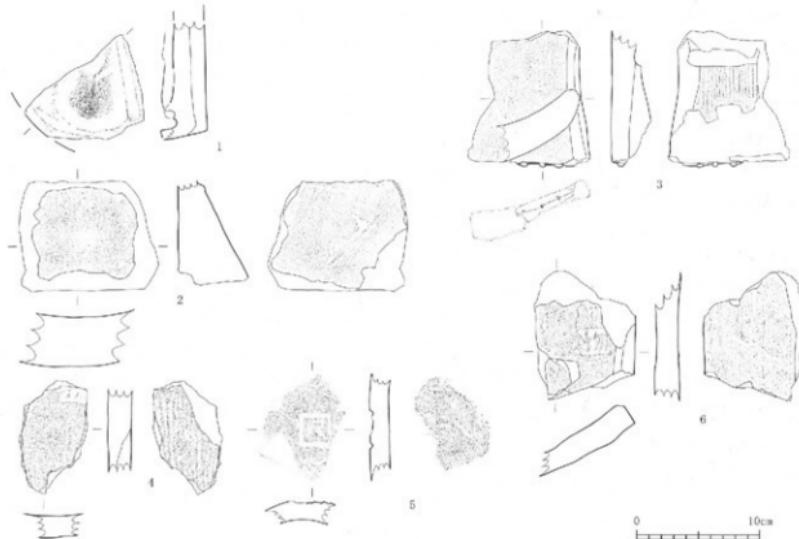
調査区全域に分布し146基を検出した。検出面はⅢ層であるが、調査区壁断面を観察する限り、Ⅱ層上面から掘り込まれる比較的新しいものも含まれている。堅穴住居跡や堅穴遺構、溝跡よりも古いピットはほとんど見られず、大半はピット以外の遺構を切っている。規模は直径20~60cmのものも見られるが、25~40cm程度の小規模なものが大半である。柱痕跡を確認したピットは、P 1・19・40・50・52・56・61・87・110など一部であるが、掘立柱建物跡を構成するものは見受けられない。P 3・4・7、18~21、26、31、40~44、46、48~49、52、56~58、60~61、87、94、136で土師器甕、坏、須恵器坏、ロクロ土師器坏、丸瓦、平瓦の小片が出土したが、図化し得る遺物はほとんどなかった。P 43では平瓦、丸瓦が2点出土し、第24図で示している。

#### 5) 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺物のうち、その半数である平箱6箱が表土および基本層Ⅰ・Ⅱ層、ないしは擾乱出土である。とりわけ調査区内の擾乱内だけでも4箱分出土している。軒丸瓦、軒平瓦を各1点ずつ含むほかはすべて丸瓦、平瓦のいずれかであり、土器は認められなかった。このうち、特徴的なものを第25図に示した。1は重弁蓮華文軒丸瓦、2は偏向唐草文軒平瓦である。4~6は刻印瓦で4・6は平瓦の背面に「物」を、また5は丸瓦の正面に「尺」を刻印している。

No.	施 備 (長軸×短軸×深さ)								
1	40×37×28	25	39×33×1	51	43×33×1	76	33×13×16	101	22×20×19
2	30×18×19	27	44×42×26	52	37×21×23	77	12×11×5	102	34×23×9
3	32×18×19	28	38×15×7	53	26×18×11	78	21×14×19	103	48×39×19
4	26×18×11	29	23×17×7	54	37×32×15	79	36×28×20	104	26×20×7
5	280×135×26	30	18×13×12	55	300×20×22	80	36×18×2	105	96×28×12
6	240×130×9	31	34×20×27	56	26×22×32	81	27×12×27	106	98×125×23
7	40×36×19	32	23×20×13	57	(22)×15×6	82	19×23×36	107	21×23×15
8	27×26×15	33	18×15×15	58	37×36×31	83	19×17×22	108	35×77×9
9	300×129×9	34	26×22×22	59	36×22×23	84	17×17×20	109	67×43×18
10	27×14×5	35	24×14×19	60	22×17×28	85	680×280×11	110	53×132×30
11	55×30×7	36	20×15×36	61	30×34×1	86	26×100×11	111	23×30×15
12	18×17×4	37	20×13×6	62	(15)×12×10	87	44×100×35	112	20×30×11
13	(27)×22×15	38	20×14×30	63	30×30×12	88	20×20×10	113	40×31×-
14	18×18×20	39	280×135×10	64	(20)×(20)×10	89	(42)×(25)×10	114	38×(22)×5
15	20×17×9	40	39×32×22	65	26×(15)×11	90	32×(13)×14	115	20×18×6
16	26×24×40	41	24×22×11	66	83×(40)×6	91	26×(34)×15	116	26×18×19
17	23×(5×11)	42	31×30×37	67	30×22×8	92	(34)×(65)×14	117	(10)×(10)×15
18	80×(10)×14	43	45×28×12	68	25×21×5	93	4×(38)×9	118	54×(23)×14
19	30×26×22	44	22×30×31	69	38×(20)×13	94	54×50×48	119	31×(30)×14
20	65×40×17	45	20×18×-	70	(20)×(30)×13	95	(19)×19×16	120	36×14×13
21	23×(10)×22	46	40×33×21	71	(52)×(35)×14	96	28×(18)×4	121	24×(7)×5
22	46×(25)×65	47	42×13×29	72	(18)×(16)×13	97	14×13×10	122	22×(24)×27
23	30×12×6	48	37×(20)×17	73	26×(14)×10	98	34×17×5	123	(24)×(10)×9
24	35×13×19	49	25×(18)×24	74	26×17×9	99	24×18×17	124	(20)×(30)×16
25	50×(37)×6	50	49×30×26	75	17×14×7	100	15×19×33	125	(40)×(25)×20

第2表 ピット計測表



No.	復得番号	遺物名・位置	種別	西 面	東 面	備 考	写真出典
1	P-7	陶器	鉢瓦			新井留文	19-9
2	G-8	陶器	鉢瓦	布目→ナデ	ナデ(綺)		
3	G-7	陶器	鉢瓦	布目→ナデ(綺)→一側面ケズリ	ナデ(綺)→一側面ケズリ→ナデ	留井留文・武田尚之編	19-8
4	G-36	陶器	平瓦	布目→ナデ	留井留文	留井留文	5-30
5	P-11	陶器	瓦	布目	ナデ(綺)	留井留文	5-11
6	G-29	陶器	平瓦	布目→一部ナデ→側面ケズリ	留井留文→ナデ(綺)	留井留文	5-12

第25図 遺構出土遺物

## まとめ

今回調査地点は陸奥国分尼寺跡の遺跡範囲北東側で、推定寺域の東辺北寄りに位置する。調査の結果、Ⅲ層上面で古代の竪穴住居跡1軒、竪穴造構2基、溝跡6条、土坑28基（倒木痕1基含む）、ピット多数を検出した。

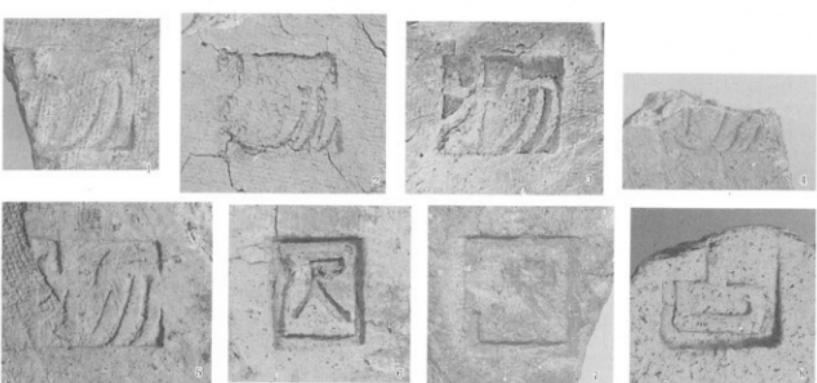
S I I 竪穴住居跡は西壁にカマドをもつ住居跡で、カマド袖の芯材に丸瓦を用いている。またカマド燃焼部からは完形の非クロロ土師器甕、南壁際堆積土1層からは須恵器高台付壺が出土した。出土遺物より、住居跡は陸奥国分尼寺の創建より下る8世紀半ば以降と考えられる。

溝跡は6条検出した。このうちSD2溝跡は、S I I 竪穴住居跡やS I 2 竪穴造構を切っており、堆積土中からは繩を伴って大量の瓦片が出土している。SD3溝跡も堆積土中に瓦片を含むがその量は少ない。同溝跡の同時性や新旧関係は明らかにすることはできないが、平行しており、ともに陸奥国分尼寺跡の推定寺域線の方位にはほぼ一致している。また、S I I 竪穴住居跡やS I 2 竪穴造構の東壁や西壁の方位も、陸奥国分尼寺跡の推定寺域線方位にはほぼ一致する。以上のこととは、陸奥国分尼寺が創建される8世紀半ば以降、同寺を意識して土地割されていたことを示している。

これまで、推定寺域東辺にわたる調査は第10次調査で実施されており、東辺中央の位置で、南北棟の掘立柱建物跡が確認された。しかしながら東辺区画施設の発見はなく、掘立柱建物跡も間尺から門跡の可能性は低いこと、また推定寺域の東側でも軒瓦類が出土することから、寺域ラインがさらに東側に位置することを想定している。本調査地点では、推定寺域東辺に推定方位と一致する溝跡が2条見られたが、他造構との重複関係より、時期は8世紀後半以降と思われる。同溝跡のある段階での区画施設と見なすか否かは、今回の調査成果のみでは判断できず、今後の成果を待たい。8世紀後半頃のS I I 竪穴住居跡やS I 2 竪穴造構も、東辺の位置によりその意味が異なる。同様に今後の課題である。

### 参考文献

主演光朗 1999『陸奥国分尼寺跡－第8次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第238集 仙台市教育委員会  
渡部弘美 2005『陸奥国分尼寺跡－第10次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第286集 仙台市教育委員会  
吉岡恭平 2002『8陸奥国分尼寺跡（第10次調査略報）』『小鶴城跡ほか』仙台市文化財調査報告書第261集 仙台市  
教育委員会

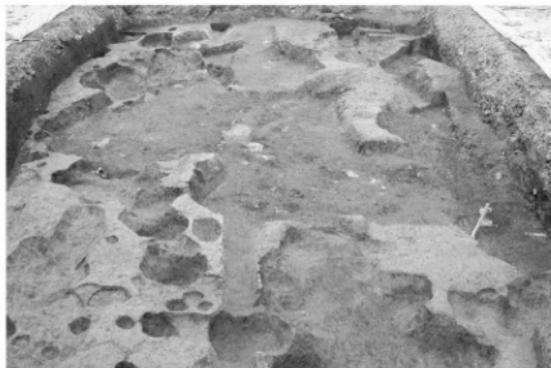


1. 「物」 SD2溝跡 平瓦凹面（第22図6）  
2. 「物」 SD2溝跡 平瓦凹面（第22図8）  
3. 「物」 SD2溝跡 平瓦凹面（第22図9）  
4. 「物」 遺構外 平瓦凹面（第25図4）  
5. 「物」 遺構外 平瓦凹面（第25図6）  
6. 「尺」 SD2溝跡 平瓦凹面（第22図5）  
7. 「尺」 遺構外 丸瓦凸面（第25図5）  
8. 「占」 SK8土坑 丸瓦凸面（第24図6）

図版7 刻印瓦



1 完掘状況・北半（南から）



2 完掘状況・北半（北から）



3 完掘状況・南半（南から）

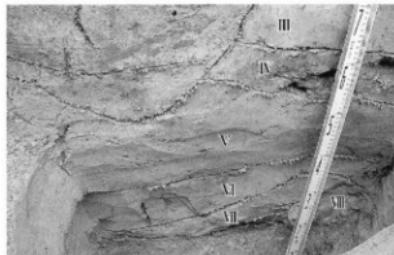
図版8 遺構完掘状況



1 完掘状況・南半（北から）



2 北壁断面（南東から）



3 下層調査地点（北壁中央）



4 東壁断面（西から）



5 東壁断面・北半（南西から）

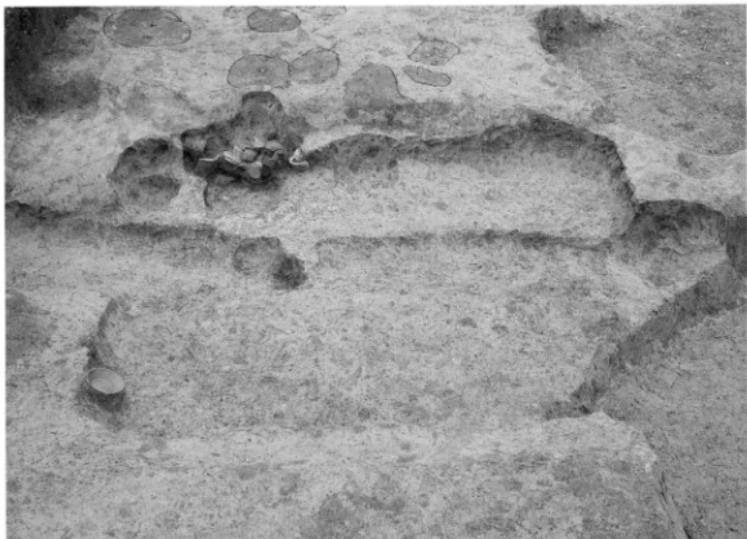


6 東壁断面・中央（南西から）



7 東壁断面・南半（北西から）

図版9 完掘状況・基本層序



1 完掘状況（東から）



2 カマド遺物出土状況（東から）



3 カマド完掘状況（東から）



4 カマド断ち割り状況（南から）



5 須恵器杯(No.2)出土状況（東から）

図版10 SI 1 穫穴住居跡



1 SI 2 竪穴遺構完掘状況（南から）



2 P1 内平瓦出土状況(No. 3)(西から)



3 須恵器甕(No. 2)出土状況（東から）



4 SI 3 竪穴遺構完掘状況（南から）

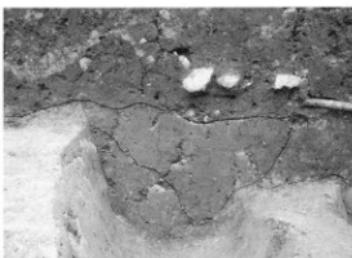


5 SI 3 竪穴遺構南北断面（西から）

図版11 SI 2・3 竪穴遺構



1 SD 1溝跡完掘（南から）



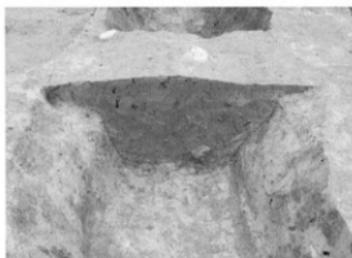
2 SD 1溝跡断面（南から）



3 SD 2・3溝跡完掘状況（北から）



4 SD 2溝跡完掘状況（南から）



5 SD 2溝跡断面（北から）

図版12 SD 1～3溝跡



1 SD 3 溝跡完掘状況（北から）



2 SD 3 溝跡断面（北から）



3 SD 4 溝跡完掘状況（北から）



4 SD 4 溝跡内ピット（北から）



5 SD 4 溝跡断面（南から）



6 SD 5 溝跡断面（西から）



7 SK 2 土坑完掘状況（西から）



8 SK 2 土坑断面（西から）

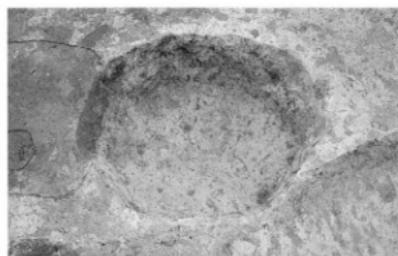
図版13 SD 3～5 溝跡・SK 2 土坑



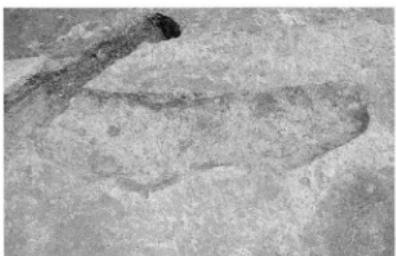
1 SK 3 土坑瓦・砾出土状況 (西から)



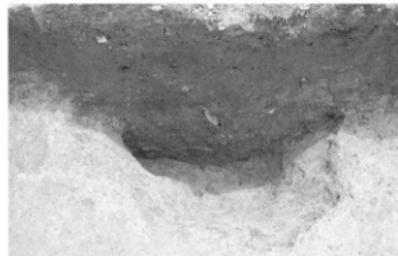
2 SK 3 土坑断面 (西から)



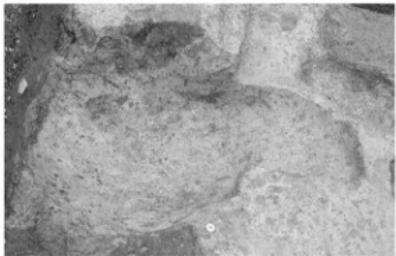
3 SK 3 土坑完掘状況 (西から)



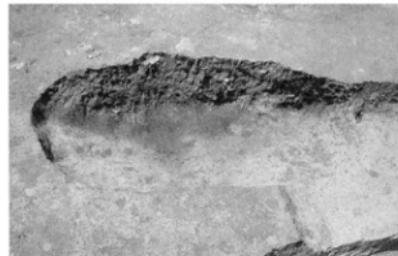
4 SK 4 土坑断面 (西から)



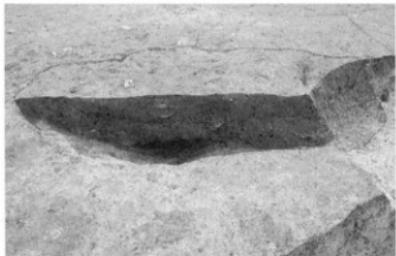
5 SK 5 土坑完掘状況・断面 (西から)



6 SK 7 土坑完掘状況 (南から)



7 SK 8 土坑完掘状況 (東から)



8 SK 8 土坑断面 (東から)

図版14 土坑(1)



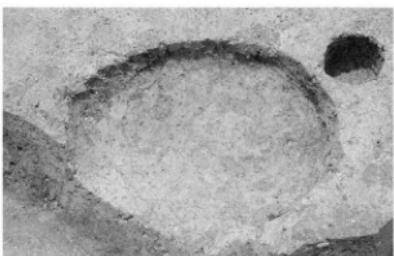
1 SK 9 土坑完掘状況（南から）



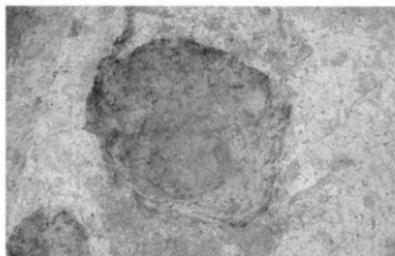
2 SK 9 土坑完掘状況（北東から）



3 SK 10 土坑完掘状況（南から）



4 SK 11 土坑完掘状況（西から）



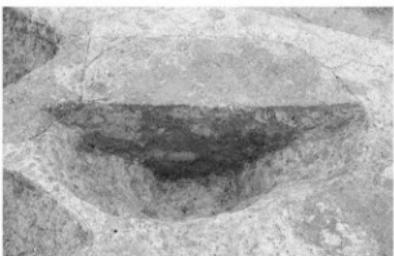
5 SK 12 土坑完掘状況（南から）



6 SK 13 土坑完掘状況（西から）

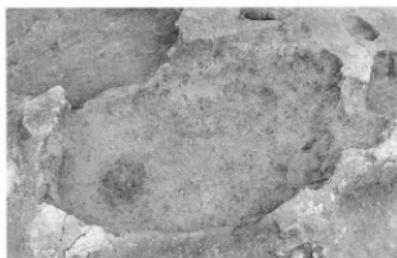


7 SK 16 土坑完掘状況（南から）



8 SK 17 土坑（西から）

図版15 土坑(2)



1 SK18土坑完掘状況（西から）



2 SK18土坑断面（西から）



3 SK20土坑(倒木痕) (南東から)



4 SK20土坑(倒木痕) (北から)



5 SK23土坑完掘状況（西から）



6 SK24土坑完掘状況（北から）

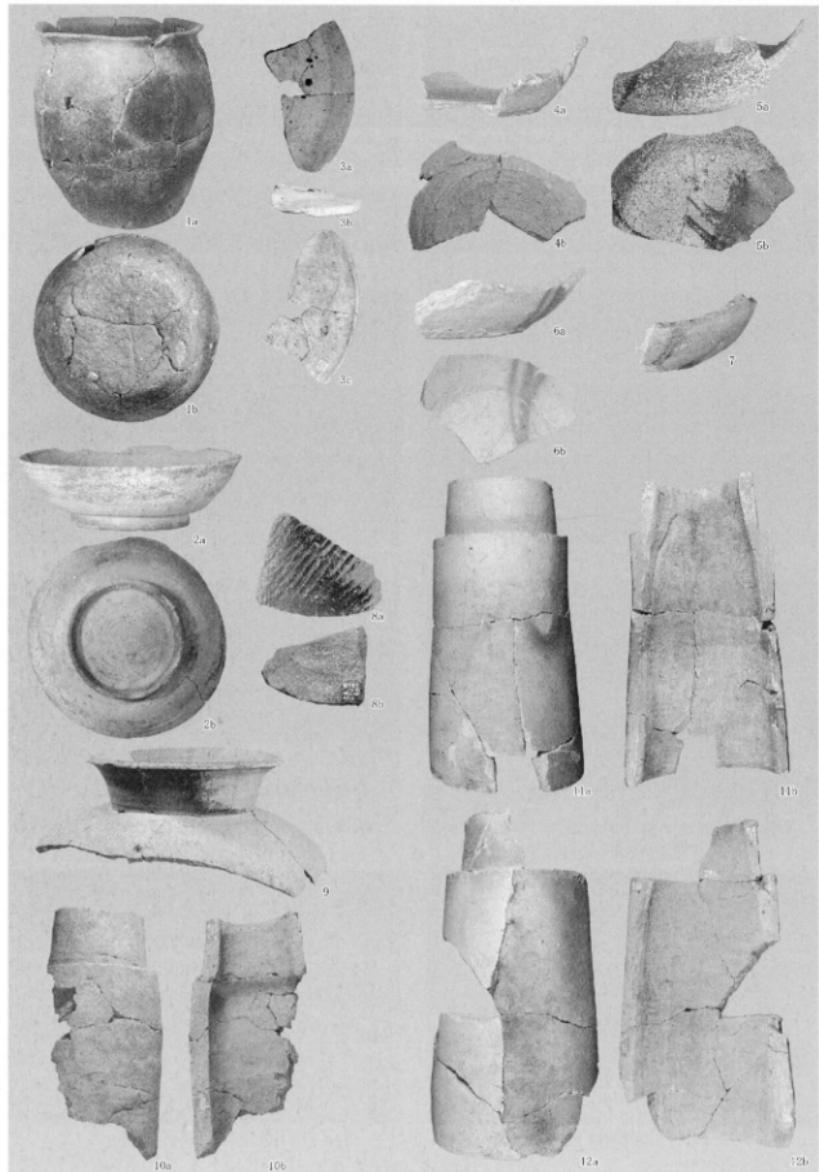


7 SK23・24土坑断面（北東から）

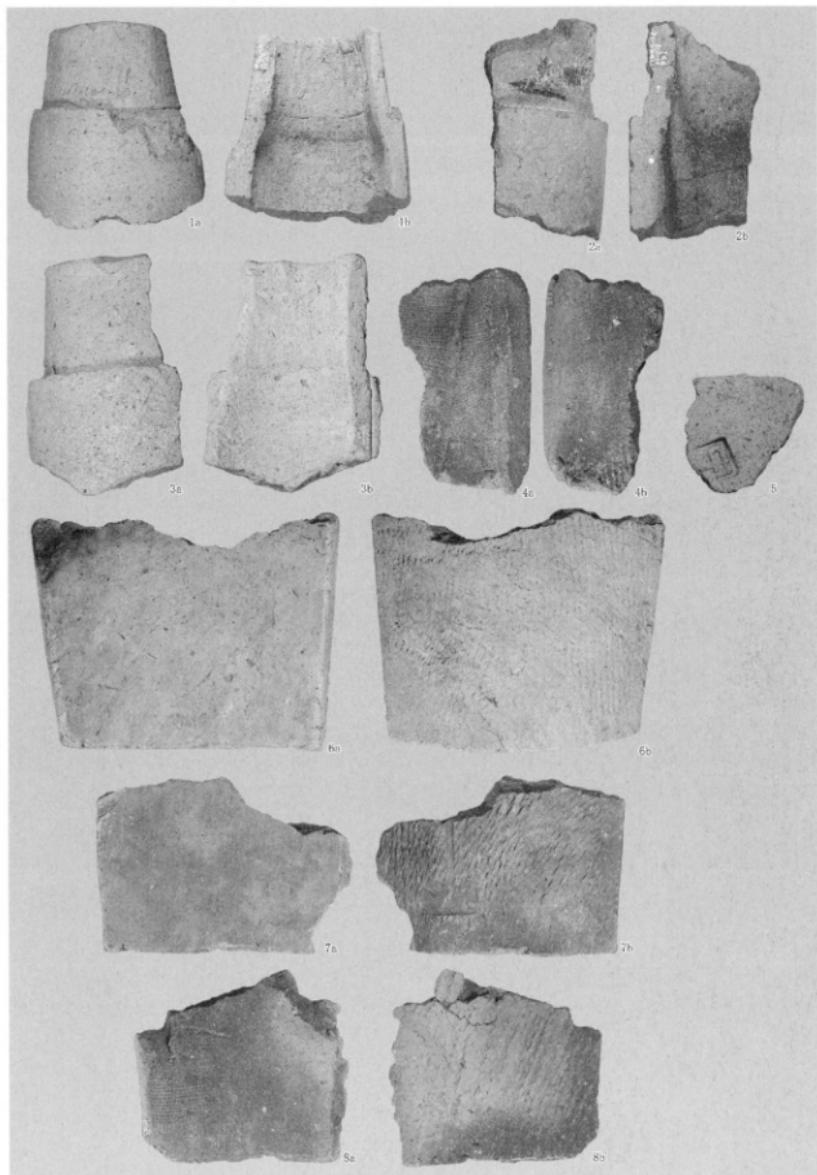


8 SK26土坑完掘状況（西から）

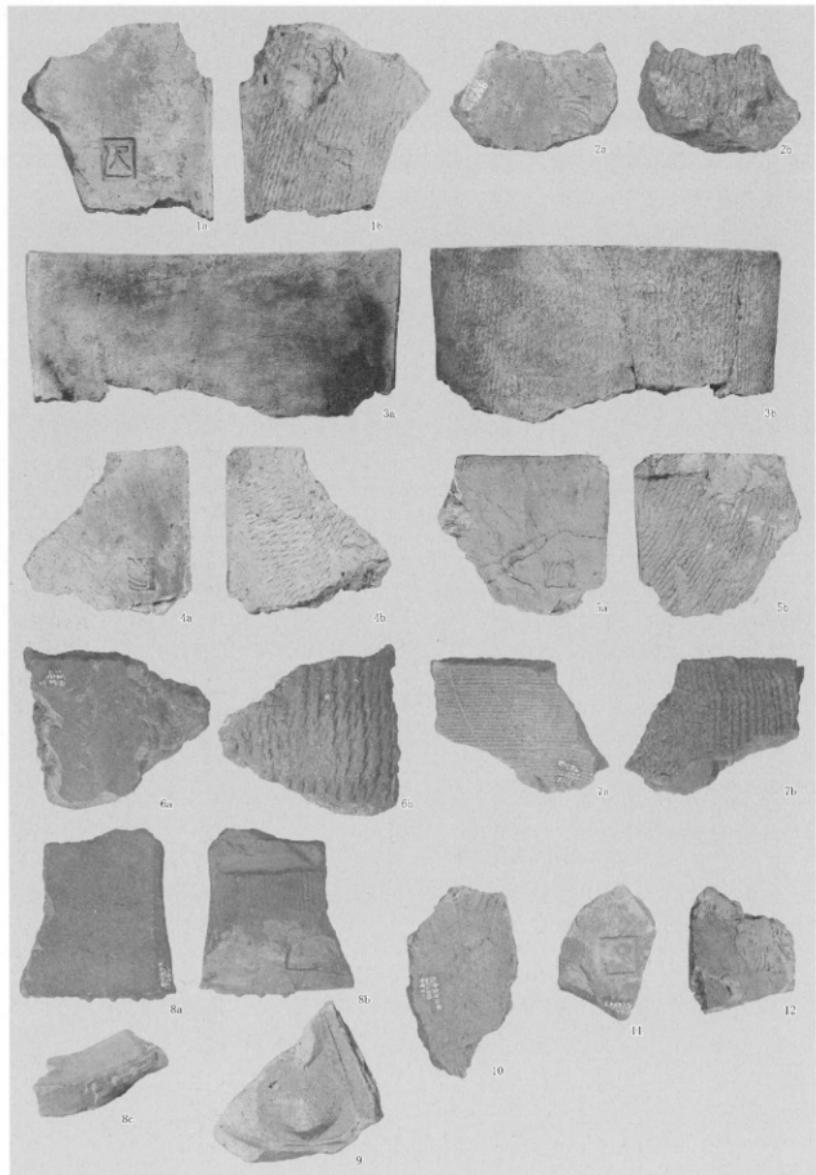
図版16 土坑(3)



図版17 土師器・須恵器・丸瓦



図版18 九瓦・平瓦



图版19 平瓦·軒丸瓦·軒平瓦

## IV 四郎丸館跡第3次発掘調査報告書

### 1 調査要項

遺跡名	四郎丸館跡（宮城県遺跡番号01240）
調査地点	仙台市太白区四郎丸字戸ノ内93-1, 93-2, 93-51
調査期間	平成20年5月28日～6月16日
調査対象面積	200m <sup>2</sup>
調査面積	200m <sup>2</sup>
調査原因	共同住宅建設工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財調査係
担当職員	文化財教諭 佐藤 正弥 文化財教諭 佐藤 典昭

### 2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成19年12月27日付けで地権者より提出された、共同住宅の建築工事に係る「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」(H19教生文第1-35号)に基づき、平成20年3月24日～27日に確認調査を実施した。確認調査（1～5トレンチ）の結果、遺構の存在が確認されたため、建物範囲全域を対象とした本調査を実施した。なお発掘届は、調査終了後に平成20年6月24日付けで提出された（H20教生文第184-98号）。

建物範囲全域（東西約22.2m×南北約9m）を調査区として設定し、重機により盛土及び現代～近世頃までの水田層を除去した。その後、IV層上面で人力による遺構検出作業を実施した。調査区東端に南北約2.5m、東西0.5mの下層調査区を設定し調査を行い、堆積状況を記録し、すべての調査を終了した。

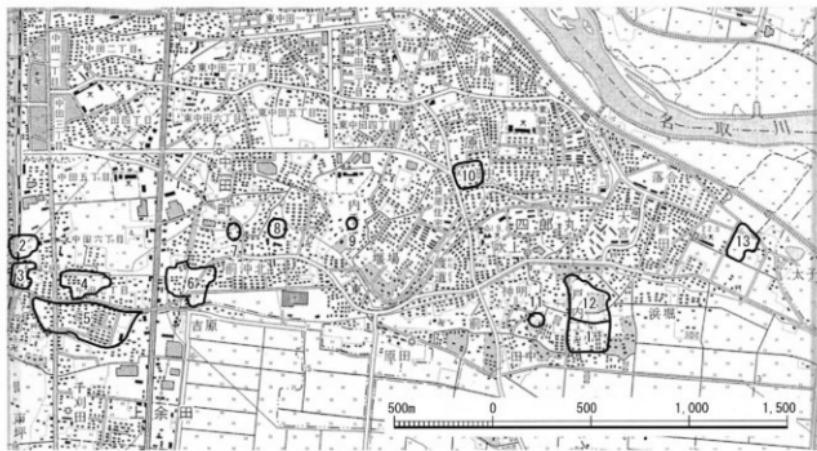
尚、確認調査では、V層上面で小規模な溝跡を2条発見したが、本調査では下層調査区のV層上面には遺構がなく、V層上面での遺構の広がりは確認できなかった。さらに上層からの擾乱が広範囲に及んでいたため、本調査ではV層上面の調査を行わなかった。

### 3 遺跡の位置と環境

四郎丸館跡はJR東北本線南仙台駅の東方約3km、名取川の南岸の自然堤防上に位置している。名取川の河口からは約4kmで、標高は3～3.5mである。東側と南側には水田として利用されている低湿地が迫っており、水田との比高差は約1mである。

四郎丸館跡は、藤原秀衡の家臣である名取四郎の居館、同氏が源頼朝に滅ぼされた後は曾我氏の居館、さらに室町末期には伊達家家臣曾井和泉守実因の居館として伝えられてきた。平成6年の第1次調査では四郎丸館跡に関連すると考えられる遺構や近世の屋敷跡に関する遺構が検出されている（竹田ほか1995）。また、第1次調査で3基、平成8年の第2次調査で1基の方形周溝墓が確認されるなど、館跡としてだけでなく古墳時代の墓域であったことが明らかになってきている（竹田ほか1995、平間ほか1997）。

古墳時代の集落跡は、当遺跡に隣接する戸ノ内遺跡、北西1kmの中田畠中遺跡、北東約1kmの昭和北遺跡、西方約3kmの安久東遺跡、西方約2.5～4kmの中田南遺跡などにおいても確認されている（太田1994）。さらにこれらの集落遺跡のうち戸ノ内、安久東の各遺跡では方形周溝墓が発見されており、方形周溝墓と集落が密接な関係を持ちながら平野の各地に散在している。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	西高麗遺跡	古墳、墓葬、灰塚	自然地帯	古墳、平安、中世	8	南神北遺跡	墓葬地	自然地帯	古墳、奈良、平安
2	前田館跡	城跡	自然地帯	中世	9	内子御跡	墓葬地	自然地帯	平安
3	無縫道跡	墓葬地	自然地帯	奈良、平安	10	中田側牛廻跡	生活	自然地帯	古墳、奈良、平安
4	中田北遺跡	墓葬地	自然地帯	奈良、平安	11	押明道跡	墓葬地	自然地帯	古墳、奈良、平安
5	中田南遺跡	集落、墓葬	自然地帯	奈良、平安、中世	12	戸ノ内遺跡	墓葬、墓地	自然地帯	古墳、奈良、平安
6	後河原遺跡	水田	自然地帯、苔青草地	奈良、平安、中世、近世	13	昭和北遺跡	墓葬	自然地帯	古墳、奈良、平安
7	前沖中遺跡	墓葬地	自然地帯	奈良、平安					

第26図 遺跡の位置と周辺の遺跡

奈良・平安時代には中田南遺跡などで集落の拡大が認められる他、当遺跡を含む新しい集落もその周辺に点在するようになる。

中世になると平野西側の高館丘陵の上には大規模な山城が築かれ、平地には当遺跡の他、安久東遺跡、前田館跡、中田南遺跡など、城館や居館・屋敷が数多く造られている。

近世の名取川沿いの地域は農村地帯である。「封内風土記」によれば、当遺跡の含まれる四郎丸村は約60戸の屋敷があったとされる。第1次調査では、文政年間に作られた「名取郡北方四郎丸邑絵図」に描かれた屋敷に関連すると考えられる建物跡や溝跡が発見されている（仙台市史編さん委員会2006）。

#### 4 基本層序

調査地点は120~160cmの盛土がある。基本層序はI~IX層が確認され、全体的に酸化鉄を多く含んでいる。I層は層厚10~20cmの現代水田層、II層は層厚20~50cm旧水田層で、ともに部分的にグライ化している。III層はにぶい黄褐色の粘土質シルト層で、水田の底土であると考えられる。IV層は黒褐色の粘土層である。V層はにぶい黄褐色の粘土質シルト層で、褐灰色のシルト質粘土を多く含んでいる。VI層以下は下層調査で確認された。VI層は灰オリーブ色の砂層である。VII層は黄褐色の砂質シルト層、VIII・IX層は褐灰色の粘土層である（P50基本層上層記述表）。尚、構造確認面はIII・IV・V層である。

#### 5 発見遺構と出土遺物

VII層上面で井戸跡1基、IV層上面で溝跡8条、土坑1基、井戸跡1基、ピット2基、性格不明遺構2基、V層上面で溝跡2条を検出した。



第27図 調査地点の位置



第28図 調査区配置図

### ①III層上面発見の遺構

#### 1) 井戸跡

S E 2 井戸跡 調査区中央で検出した。素掘りで井戸枠等は確認されていなかった。平面形は南北にやや長い楕円形で、断面形は下に窄まる円筒状である。検出面から120cm の深さまで調査し、堆積土 4 層を確認した。底面は検出していない。規模は上端で長軸76cm、短軸62cm、確認した最深部で長軸48cm、短軸35cm である。遺物は出土していない。

### ②IV層上面発見の遺構と遺物

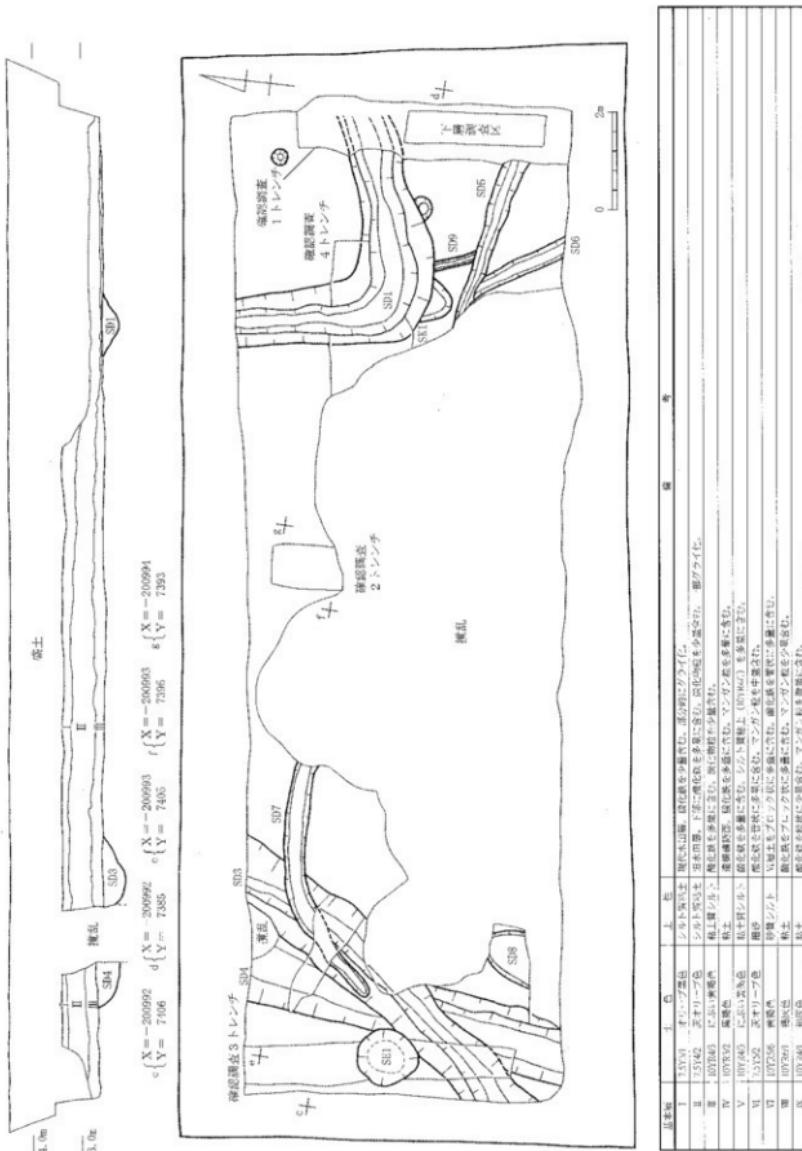
#### 1) 溝跡

S D 1 溝跡 調査区東側で検出した。S D 9 溝跡、S K 1 土坑、P 1、P 2 と重複し、いずれの遺構よりも新しい。東西方向から南北方向に屈曲し、北側および東側はそれぞれ調査区外へ延びている。規模は検出長で東西方向が380cm、南北方向が390cm、幅は上端で90~180cm、底面で30~100cm、確認面からの深さは北側で25~27cm、屈曲部で20~22cm、東側で40~41cm である。方位は東西方向がN -71°-E、南北方向がN -13°-W である。断面形は逆台形で、堆積土は2層に分かれる。遺物は確認調査1トレンチの1層上面で、占墳時代前期の土器器甌の口縁部から胴上半部破片が約10点出土している。

S D 3 溝跡 調査区西側で検出した。北側および西側は調査区域外に延びている。S D 4・7 溝跡、S E 1 井戸跡と重複し、一部が搅乱により削平を受けている。S D 7 溝跡、S E 1 井戸跡よりも古く、S D 4 溝跡よりも新しい。方位はN -36°-E、規模は検出長で700cm、幅は上端で100~160cm、底面で20~50cm、確認面からの深さは北側で40~45cm、西側で10~17cm である。断面形は逆台形で、堆積土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

S D 4 溝跡 調査区西側で検出した。南北両側が調査区域外に延びている。S D 3 溝跡、S E 1 井戸跡と重複し、本遺構の方が古い。一部が搅乱により削平を受けているが、底面は全体が残っている。方位はN -17°-W、規模は検出長で650cm、幅は上端で120~180cm、底面で50~80cm、確認面からの深さは北側で39~42cm、南側で28~36cm である。断面形は逆台形で、堆積土は3層に分かれる。遺物は出土していない。

S D 5 溝跡 調査区南東で検出した。東西に延びる溝跡で西側は搅乱に壊され、東端部は東壁断面で確認されない



第29図 調査区全体図

ことから、排水用の側溝により削平されており、不明である。SD 6・9溝跡と重複し、本造構がもっとも新しい。方位はN-79°-W、規模は検出長で350cm、幅は上端で30~50cm、底面で10~20cm、確認面からの深さは西側で8~10cm、東側で8~10cmである。断面形はU字形で、堆積土は1層である。遺物は出土していない。

SD 6溝跡 調査区東側で検出した。南北に延びる溝跡で北側はSD 5溝跡と重複し、本造構が古い。南側は調査区域外に延びている。北側はSD 5溝跡を境に延びていかない。方位はN-33°-W、規模は検出長で200cm、幅は上端で30~40cm、底面で15~20cm、確認面からの深さ8~10cmである。断面形はU字形で、堆積土は1層である。遺物は出土していない。

SD 7溝跡 調査区西側北部で検出した。緩やかに弧を描いて東西に延び、東側は搅乱に埋されている。SD 3・4溝跡と重複し、本造構がもっとも新しい。規模は検出長で300cm、幅は上端で25~50cm、底面で10~30cm、確認面からの深さ5~10cmである。断面形はU字形で、堆積土は1層である。遺物は出土していない。

SD 8溝跡 調査区西側南端で検出した。南北方向に延びる溝跡と思われるが、土坑の可能性もある。北側および南側は搅乱により削平を受けている。規模は検出長で80cm、幅は上端で50~110cm、底面で35~100cmで、確認面からの深さが15~20cmである。断面形はU字形で、堆積土は1層である。遺物は出土していない。

SD 9溝跡 調査区東側で検出した。南北方向に延びる溝跡で、SD 1・5溝跡と重複し、本造構がもっとも古い。重複造構からの延長は認められなかった。方位はN-23°-W、規模は検出長で162cm、幅は上端で約18cm、底面で約8cm、確認面からの深さは10~12cmである。断面形はU字形で、堆積土は1層である。遺物は出土していない。

## 2) 土坑

SK 1土坑 調査区東側で検出した。北側はSD 1溝跡に埋されている。平面形は楕円形で、規模は長軸100cm以上、短軸100cm、深さは20cmである。断面形は浅い皿状で、底面は平坦である。堆積土は1層である。遺物は出土していない。

## 3) 井戸跡

SE 1井戸跡 調査区西側で検出した。SD 3・4溝跡と重複し、本造構の方が新しい。素掘りで井戸枠等は確認されていなかった。平面形は南北にやや長い楕円形で、断面形は下に窄まる円筒状である。検出面から120cmの深さまで調査し、堆積土4層を確認した。底面は検出していない。規模は上端で長軸130cm、短軸128cm、確認した最深部で長軸75cm、短軸62cmである。遺物は出土していない。

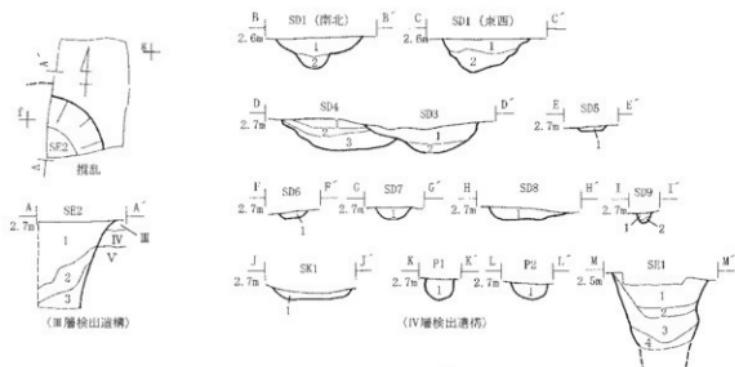
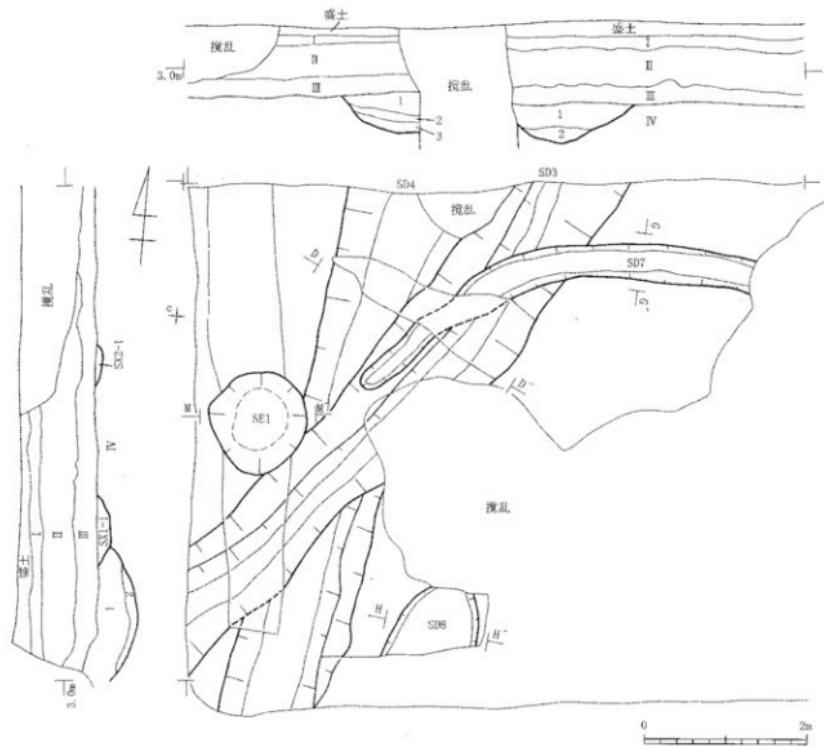
## 4) ピット

P 1 調査区東側で検出した。平面形は円形で、直径20cm、深さ27cmである。断面形はU字形で、堆積土は1層である。柱根跡は確認されなかった。遺物は土師器片が数点出土している。

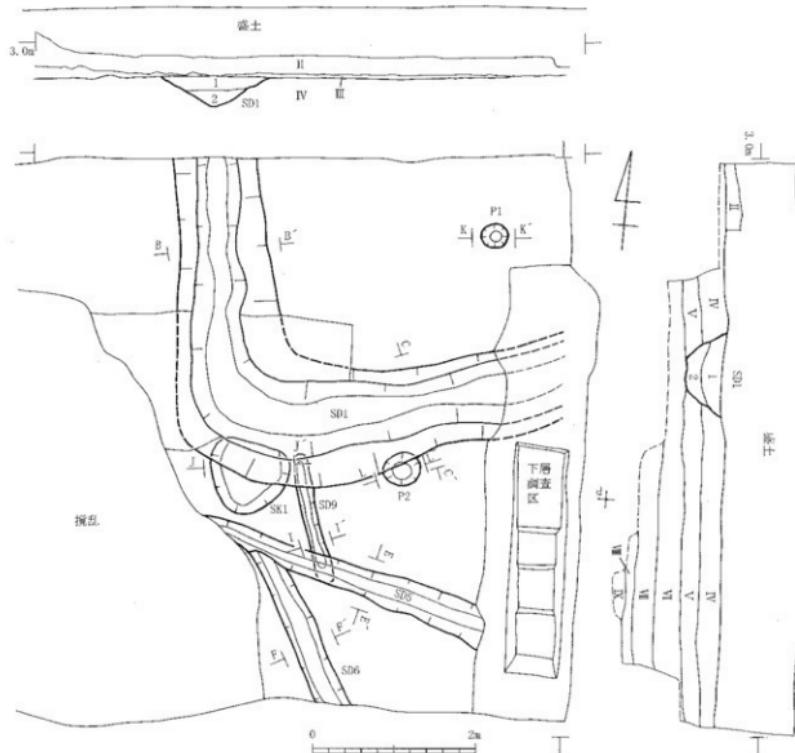
P 2 調査区東側で検出した。SD 1溝跡と重複し、同溝跡に切られている。平面形は楕円形で、長軸45cm、短軸40cm、深さ21cmである。断面形はU字形で、堆積土は1層である。柱根跡は確認されなかった。遺物は土師器片が数点出土している。

## 5) 性格不明造構

S X 1・2性格不明造構 西壁で2ヶ所の落ち込みを確認したが、平面的には確認できなかった。SX 1性格不明造構はSD 3溝跡と重複し、同溝跡を切っている。断面での規模は、幅90cm、深さ17cmである。SX 2性格不明造構の断面での規模は、幅52cm、深さ8cmである。いずれの造構も断面形は皿型で、堆積土は1層である。

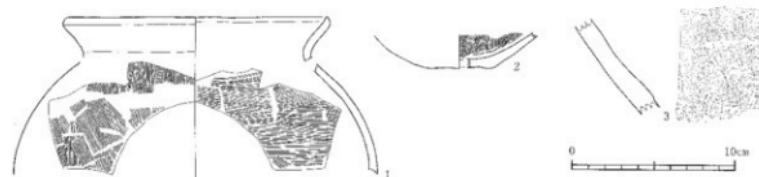


第30図 III・IV層検出遺構平・断面図



## 6) 出土遺物

P1、P2から土師器片がそれぞれ数点、P1、P2の西側のIV層上面から土師器片が数点出土した。他、IV層上面から陶器片が数点出土している。第32図に示したのは3点である。1は確認調査1トレンチのSD1溝跡上層出土の土師器片である。破片の状態でまとめて出土した。全体的に磨滅が進んでおり、口縁部と胴部が接合するかは明らかでないが、胎土、出土状況から同一個体であろう。器壁は非常に薄く、調整は内外面ハケメである。口縁部は外半するが端部でやや内反りになる。2はIV層出土の土師器片底部破片で、底面は上げ底気味である。器壁の薄さ、調整、胎土・色調等、1の土師器片に類似する。3は常滑窯の肩部で、断面に漆接ぎの痕跡が見られる。時期は不明である。1・2は形態、調整の特徴から、古墳時代前期の上器と思われる。



項目 番号	型種 系名	出土地点	分類	法量 (cm)	特徴 (形状・盤形・調節)、時期		参考 図版
					遺跡名・位置	造形	
1 C-3	C-3	SD1 溝跡 上層	SD1 溝跡 上層	10.0 (幅) 1.5 (厚)	【焼成】外面・ハケメ 【調節】外面・ハケメ	—	29-1
2 C-1	C-1	常滑以上北東部 IV層上面	常滑以上北東部 IV層上面	10.0 (幅) 1.0 (厚)	【焼成】底やや内反 【調節】外面・不明 (厚減) 内面・ハケメ	—	29-2
3 T-1	T-1	常滑以上北東部 IV層上面	常滑以上北東部 IV層上面	—	—	浮沈 (胎土)、接合部	39-3

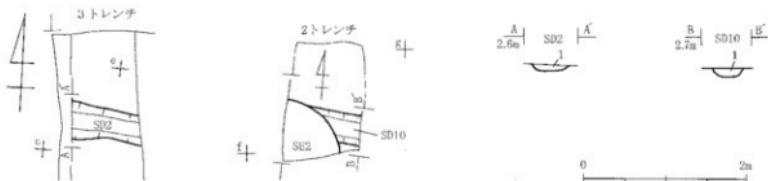
第32図 出土遺物

## ③V層上面発見の構造

### 1) 溝跡

S D 2溝跡 確認調査3トレンチで検出した。東西方向に延びる溝跡で、方位はN-88°-W、規模は検出長で82cm、上幅で30~40cm、底面幅で20~30cm、確認面からの深さは10cmである。堆積層はIV層が入り込む。遺物は出土していない。

S D 10溝跡 調査区中央V層上面で検出した。東西方向に延びる溝跡と思われるが、西側はS E 2井戸跡に、また東側は擾乱に壊されている。方位はN-90°-W、規模は検出長で80cm、幅は上端で24cm、底面で12cm、確認面からの深さは6~8cmである。断面形はU字形で、堆積土は1層である。遺物は出土していない。



層位	土色	土性	備考
SD2-1	JOYK52 栗褐色	粘土	無化鉄を多量に含む。
SD10-1	JOYK30 無色	砂土	無化鉄を多量に含む。マンガン鉄を多量に含む。

第33図 V層検出構造平・断面図

## 6 まとめ

III層上面で井戸跡1基、IV層上面で溝跡8条、井戸跡1基、土坑1基、ピット2基、性格不明造構2基、V層上面で溝跡2条を検出した。造構に帰属する遺物が極めて少なく、それぞれの造構の時期を明らかにすることはできない。屈曲する溝跡のSD1溝跡は、堆積土上層より古墳時代前期土師器窯破片が少量出土しているが、この上器をもって造構の時期や性格を推定するのは困難である。周辺調査の成果を待ちたい。

### <参考文献>

- 太田昭夫 1994『中田南遺跡－古代・中世の集落跡の調査－』仙台市文化財調査報告書第182集 仙台市教育委員会  
竹田幸司 1995『四郎丸館跡』仙台市文化財調査報告書第200集 仙台市教育委員会  
平間亮輔・伊藤孝行 1997『四郎丸館跡-第2次発掘調査報告書-』仙台市文化財調査報告書第218集 仙台市教育委員会  
仙台市史編さん委員会 2006『仙台市史 特別編7 城館』



1 調査区全景（西から）



2 調査区西側（南から）



3 調査区東側（南から）

図版20 遺構検出状況



1 検出状況全景（南東から）



2 完掘状況全景（西から）



3 完掘状況全景（東から）

図版21 遺構検出・完掘状況



1 調査区全景（南西から）



2 調査区西側（南から）



3 調査区東側（南から）

図版22 遺構完掘状況



1 全景（南西から）



2 西側（南から）



3 東側（南から）

図版23 北壁断面



1 西壁断面（東から）



2 東壁断面（南西から）



3 下層調査区断面（西から）

図版24 基本層序



1 完成状況（南から）



2 A-A' 断面(南から)



3 B-B' 断面(西から)

図版25 SD 1 溝跡



1 SD3・4溝跡完掘状況(北東から)

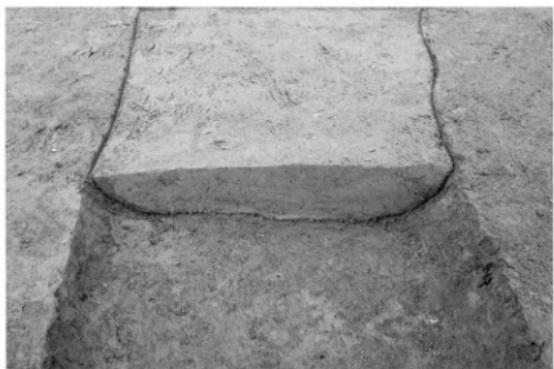


2 SD 3 溝跡完掘状況(北東から)



3 C-C'断面(北東から)

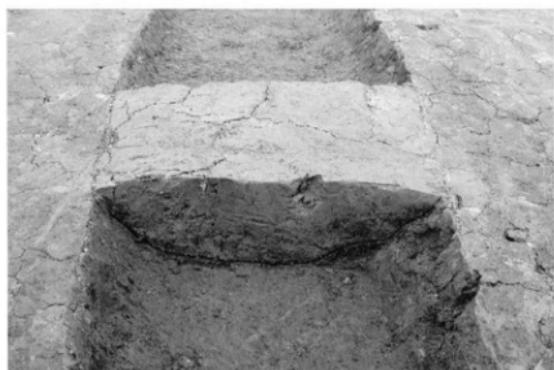
図版26 SD 3・4 溝跡



1 SD 5 溝跡断面（北西から）



2 SD 6 溝跡断面（南から）



3 SD 7 溝跡断面（西から）

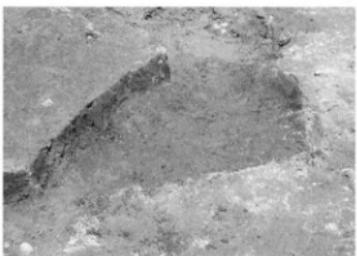
図版27 SD 5・6・7溝跡



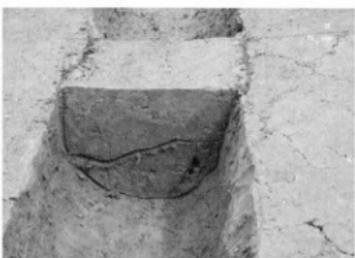
1 SD 7 溝跡完掘状況（西から）



2 SD 8 溝跡断面（南から）



3 SD 8 溝跡完掘状況（南から）



4 SD 9 溝跡断面（南から）

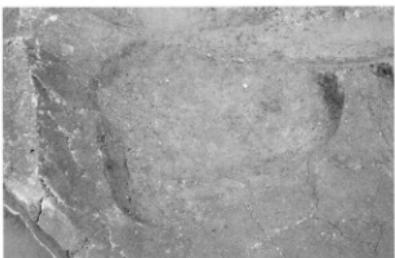


5 SE 1 井戸跡完掘状況（南から）

図版28 SD 7・8・9 溝跡・SE 1 井戸跡



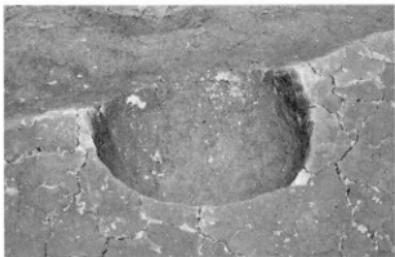
1 SE 2 井戸跡（東から）



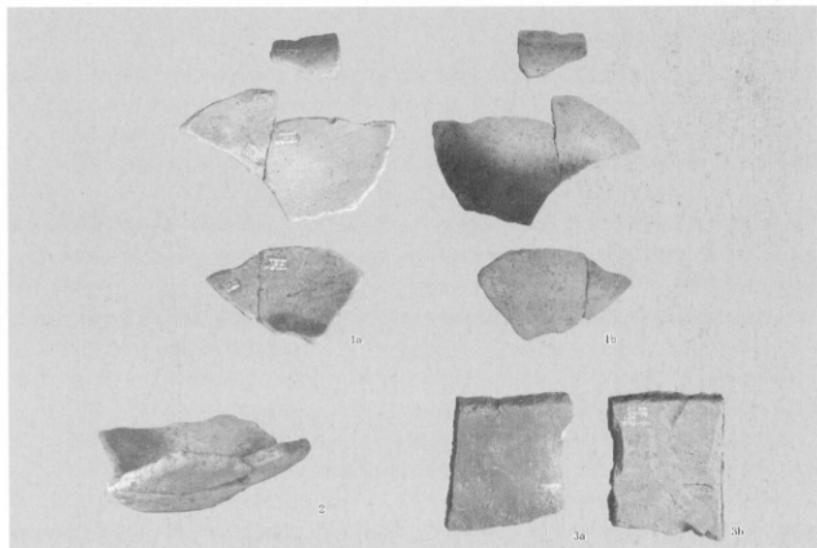
2 SK 1 土坑完掘状況（南から）



3 P 1 完掘状況（北から）



4 P 2 完掘状況（南から）



図版29 SE 2 井戸跡、SK 1 土坑、P 1・2、出土遺物

## V 富沢遺跡142次調査報告書

### 1 調査要項

遺 跡 名 富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）  
調 査 地 点 仙台市太白区長町南1丁目209-7, 209-8  
調 査 期 間 平成20年6月3日～6月22日  
調査対象面積 445.62m<sup>2</sup>  
調査面積 65m<sup>2</sup>  
調査原因 共同住宅建設  
調査主体 仙台市教育委員会  
調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係  
担当職員 主査 主濱 光朗 主事 鈴木 隆一 文化財教諭 熊谷 敏哉

### 2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成19年11月6日付けで地権者より提出された、共同住宅の建築工事に係る「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」（H19教生文第1-32号）に基づき、平成20年6月3日～22日に発掘調査を実施した。

調査区は東西15m×南北5m（北西角10m<sup>2</sup>は搅乱のため、面積から差し引く）に設定した。重機により盛土・I・II層を削除した。III層上面以下で人力により遺構検出作業を実施した。

### 3 遺跡の位置と環境

富沢遺跡はJR仙台駅の南方約4kmに位置し、総面積は90haである。標高9～16mの平坦な沖積地で、北東側を広瀬川の自然堤防、南側を名取川の支流である笊川とその左岸の自然堤防に囲まれた後背湿地に立地している。

富沢遺跡を中心とする周辺地域一帯は、旧石器時代から現在に至るまで連続として人々の営みが継り広げられてきた所である。旧石器時代においては、本遺跡で後期旧石器時代に関わる焚き火の跡と石器が見つかっており、当時のキャンプサイトと考えられている。

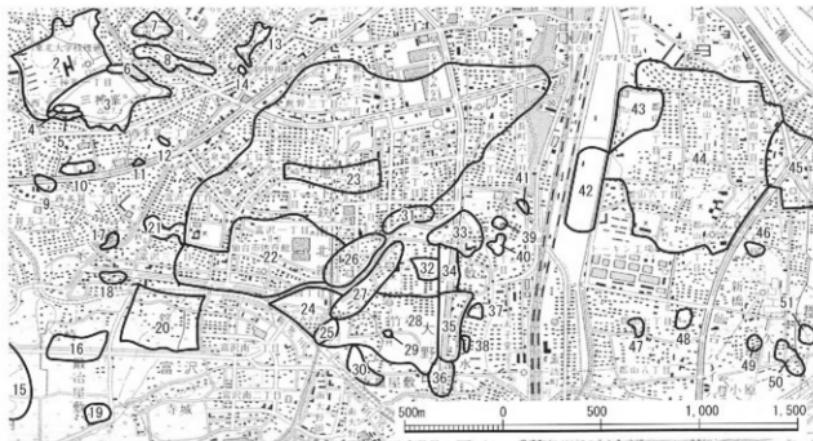
縄文時代早期の遺跡として、南接する下ノ内浦遺跡が挙げられる。同じく前期では北西部の丘陵上に三神峯遺跡が立地しており、大規模な集落跡の存在が推定されている。中期になると遺跡数の増加と規模の拡大が見られる。本遺跡南方に位置し、笊川の両岸に展開する六反田遺跡・トノ内遺跡・伊古田遺跡・山口遺跡・下ノ内前遺跡では、中期中葉以降後期後葉に至るまで連續的に遺構・遺物の検出がなされており、富沢地区を中心とする郡山低地において、この時期に安定した生活の舞台が広がっていたと考えられる。一方、晩期になると遺跡の数は減少する。

弥生時代では、中期および後期の水田が見つかっている他、東方に位置する西台畠遺跡では、中期の土器墓が発見されている。また、後期の遺跡としては、土坑墓が検出された下ノ内浦遺跡が知られている。

古墳時代は、5世紀代から6世紀前半にかけて、笊川流域でも埴輪を持った大野田古墳群が次々と築かれる。これららの埴輪を焼いた窯跡としては、三神峯丘陵に立地する富沢窯跡が調査されている。

7世紀後半になると、富沢地区においても律令体制が及んでくる。律令支配のありかたを示す遺跡として、富沢遺跡東方に位置する郡山遺跡がある。この遺跡は、7世紀後半から8世紀初頭にかけて機能していた官衙路と考えられている。同時に青葉山丘陵東麓部でニツ沢横穴群・土手内横穴群などの横穴群も造られていく。

奈良・平安時代に入ると遺跡の分布が全般的に拡大する。当地区では、山口遺跡・下ノ内浦遺跡・伊古田遺跡な



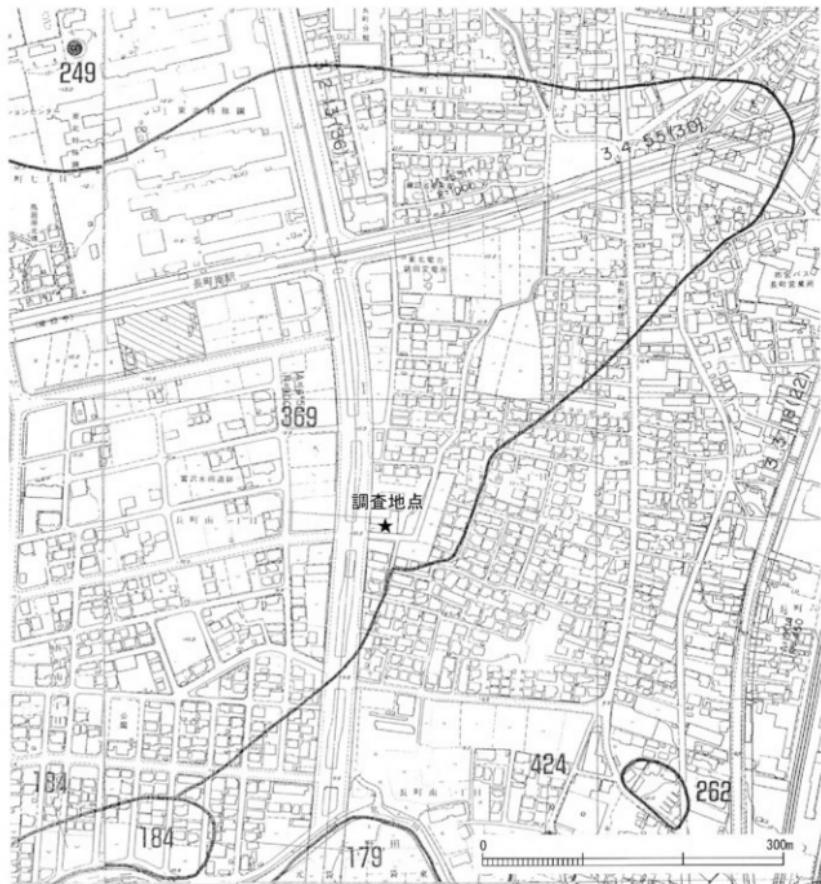
番号	地名	種別	区地	時代	番号	遺跡名	種別	立場	時代
1	富沢跡	住居跡	水田	後世湿地	26	下ノ内遺跡	集落	水田	自然堤防
2	芦ノ内遺跡	住居跡	丘陵	説文、算生、平安	27	大野町古墳群	円墳	複数基、古墳、古墳、奈良、平安、中世	
3	三井原跡	住居跡	丘陵	説文前、中、平安	28	春日社遺跡	円墳	自然堤防	古墳
4	三井原古墳群	円頂	丘陵	古墳後	29	春日社遺跡	円墳	自然堤防	古墳
5	福地跡	住居跡	丘陵西斜面	古墳、平安、奈良	30	伊吉田古道跡	谷沿地	自然堤防	古墳、食喰、平安
6	土内西古道跡	狭隘路	丘陵東斜面	古墳後	31	赤坂遺跡	谷沿地	自然堤防	古墳、平安
7	土手内遺跡	集落	丘陵	説文、算生、古墳、奈良、平安	32	岩原遺跡	集落	自然堤防	魏文、奈良、平安
8	土内内六条跡B	狭隘路	丘陵斜面	古墳後古墳後、食喰	33	元袋跡	集落	水田	自然堤防
9	西台遺跡	住居跡	丘陵	奈良、平安?	34	大野町遺跡	集落	赤坂	自然堤防
10	原跡	住居跡	丘陵	説文、古墳、平安	35	下ノ原遺跡	集落	解釈	自然堤防
11	原東遺跡	住居跡	丘陵	古墳、奈良、平安	36	原町散居跡	集落	解釈	自然堤防
12	原東東遺跡	住居跡	丘陵	平安	37	元山散居跡	集落	解釈	自然堤防
13	寺河原散居跡	住居跡	丘陵最高	奈良、平安	38	長瀬川水道跡	谷沿地	自然堤防	古墳
14	寺河原古道跡	平地	丘陵	古墳	39	利根川西岸	谷沿地	自然堤防	奈良、平安
15	東内西遺跡	住居跡	丘陵	自然堤防	40	新田遺跡	谷沿地	自然堤防	奈良、平安
16	西折井跡A跡跡	集落	丘陵	説文、奈良、平安	41	日野元二丁目跡	谷沿地	水田	自然堤防
17	當原上ノ台跡跡	住居跡	丘陵	説文、平安	42	長瀬川東岸	水田	自然堤防	生文、内溝式、奈良
18	福ノ内跡跡	住居跡	丘陵	古墳、奈良、平安	43	西台遺跡	谷沿地	張相模	自然堤防
19	鶴谷跡	住居跡	丘陵地	自然堤防	44	野山遺跡	谷沿、谷合	自然堤防	説文、奈良、古墳、奈良
20	富沢跡	城郭	自然堤防	中世	45	北日高城跡	近頃、水田	自然堤防	説文地、説文、奈良、奈良、奈良
21	富沢水道跡	集落	丘陵地	古墳後	46	矢来遺跡	荒布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
22	山口遺跡	集落、水田	後背湿地	説文草、中絶、奈良、平安、中世	47	の原遺跡	荒布地	自然堤防	奈良、平安
23	島崎前遺跡	集落、水田、山地	自然湿地、後背湿地	説文草、中絶、奈良、平安、中世	48	新ノ瀬跡跡	荒布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
24	下ノ内遺跡	集落	自然堤防	説文草、平安、奈良、平安	49	久ノ上ノ遺跡	水田	被覆地	占墳、奈良、平安、中世
25	伊吉田遺跡	集落	自然堤防	説文後、古墳、奈良、平安	50	久ノ上ノ遺跡	荒布地	自然堤防	占墳、奈良、平安

第34図 遺跡の位置と周辺の遺跡

どで当該地の住居跡が検出されている。中世の遺跡としては、名取川北岸の低地部に富沢館跡が、大年寺丘陵上に茂ヶ崎城跡が築かれ、広瀬川の南岸には北目城跡がある。

近世に至り、仙台城の築城と共に藩体制が始まるとき、富沢地区は名取郡に組み込まれ、典型的な農村村落を形成しつつ現代を迎える。

これまでの調査結果として、昭和57年に山口遺跡の自然堤防から後背湿地にかけての地域において、仙台市内においては初めての水田跡が発見された。また、地下鉄建設工事に伴う調査により、水田跡が広く分布しているこ



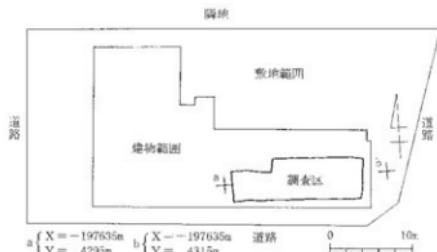
第35図 調査地点の位置

とが明らかになった。水田跡の存在が推定される後背湿地は、昭和58年に「富沢水田遺跡」として遺跡登録された。その後、調査の進展に伴って、この地域では弥生時代以降近年まで連続的に稻作が営まれていることが明らかになった。また、遺跡内の水田跡の検出される地層より下層から绳文時代の遺構・遺物が発見されることや、居住域に係わる遺構が発見されることにより、昭和62年には「富沢遺跡」と名称が変更された。

これまでの発掘調査や、周辺の自然堤防部の調査結果によって、各時代の様相が次第に明らかになりつつある。

#### 4 基本層序

調査地点における盛土の厚さは約1mである。基本層は14層に大別し、このうちI・II・V層についてはそれぞれ2



第36図 調査区配置図

層に細分した。I層は現代の耕作土である。III層は、10世紀前半に降灰したとみられる灰白色火山灰が含まれていることから、富沢遺跡で確認されている条里型地割に関わる大畔群の検出が予想される層位である。より下位の基本層のうちV・VI層は、下面に著しい凹凸がみられるなど水田土壤の可能性もあるが、面的な精査を行っていないため詳細は不明である。IX層以下に、基本層が搅拌される部分が数カ所ある。最下層のXIV層は、植物遺体を多く含むスクモ層である。

## 5 発見遺構と出土遺物

Va層上面で畦畔1条、VI層上面で土坑2基、VII層上面で、溝跡2条、土坑1基、性格不明遺構1基を検出した。

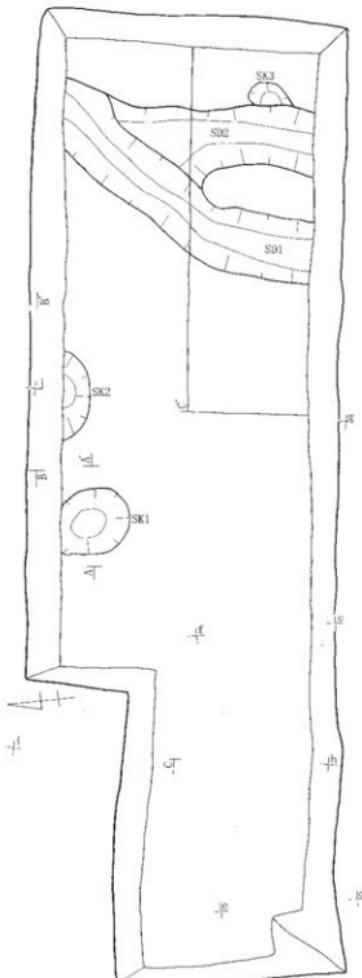
### 1) Va層水田跡

調査区の西南部で畦畔を1条検出した。西端は概略に切られ、東端は途切れている。検出部の長さは約360cm、高さは4cmである。幅は立ち上がり部分で125cm、上面で75cmである。土壠の厚さは6~25cmである。Vb層上面を見ると、畦畔直下こそ凹凸は少ないが、それ以外の部分では凹凸が顕著に見られる。耕作によっての凹凸であると考えられるので、Va層は水田であったと推定される。

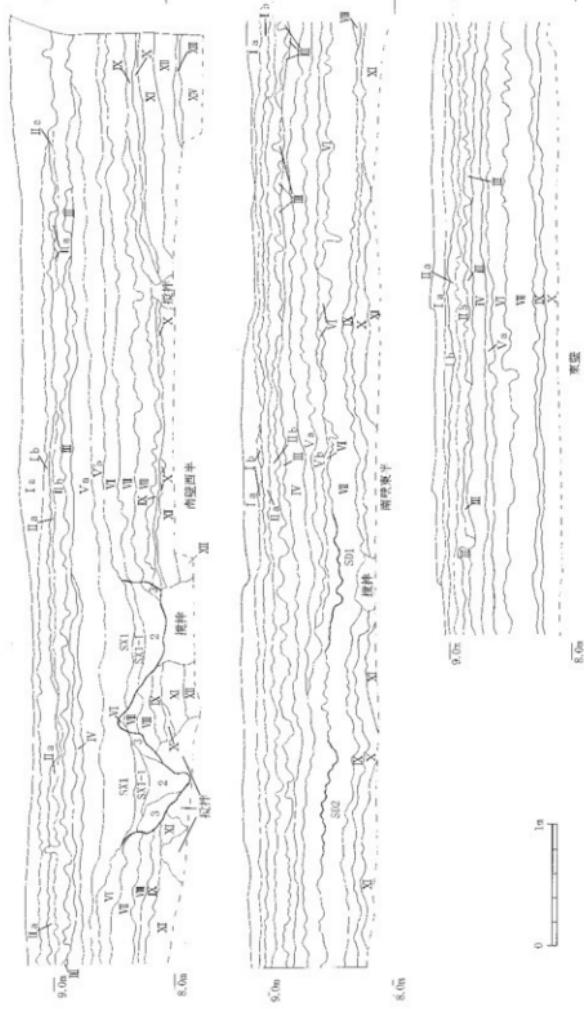
### 2) 土坑

SK1土坑 調査区の北部、VI層上面で検出した。平面形はやや南北に長い楕円形である。規模は東西105cm、南北115cm以上、深さ20cmで、断面形は船底形である。堆積土は2層に分かれ、いずれもシルト質粘土である。遺物は出土していない。

SK2土坑 調査区北部、VI層上面で検出した。北部は調査区の外に延びる。検出部の東西142cm、南北は途中で北壁に遮断されているが、40cmを測る。深さは約100cmである。断面形は逆台形



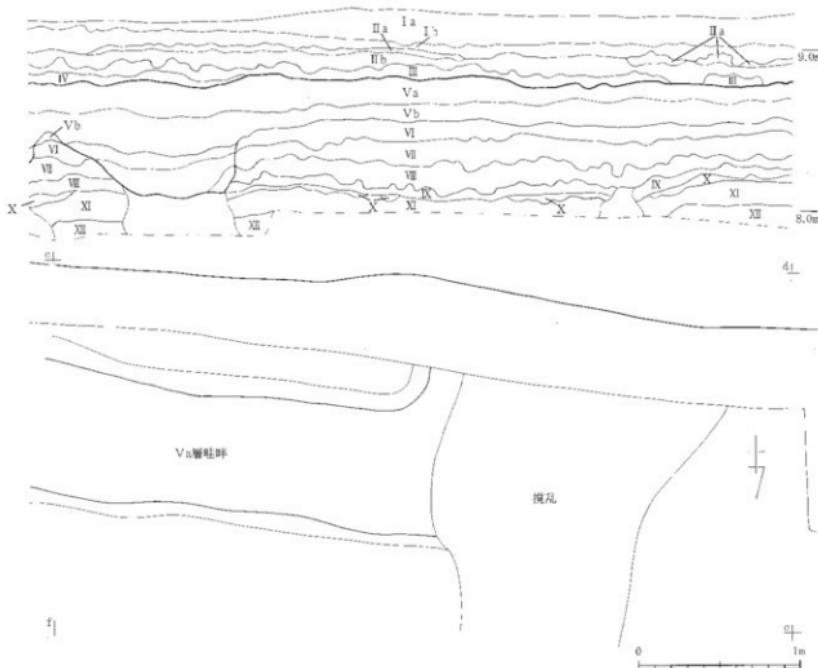
第37図 VI層上面、VII層上面 検出遺構合成配置図



第38図 基本層断面図

で、堆積土は4層に分かれる。1層はシルト質粘土で、2層以下はいずれも粘土である。遺物は出土していない。

S K 3 土坑 調査区南東部、VII層上面で検出した。西側はSD 2溝跡に切られているが、平面形は楕円形であると推定される。規模は南北が50cm、東西は30cm以上である。深さは約8.6cmである。堆積土は1層である。遺物は出土していない。

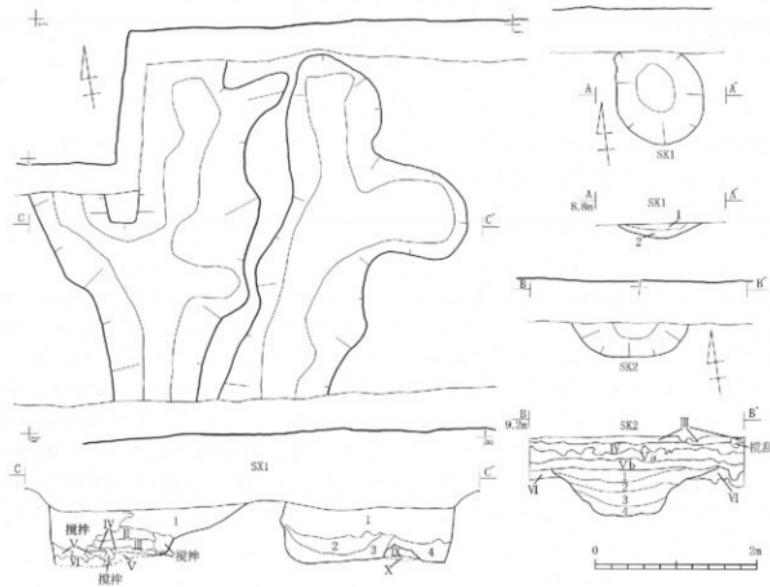


層番号	上位色	土 特	標 無
I	10YR5/2 黄褐色	シルト質粘土	
II	10YR6/3 淡紅褐色	シルト質粘土。熟分を多量に含む。	
III	10YR6/2 深褐色	シルト質粘土。10YR6/3が、熟褐色を既成化に多量に含む。	
IV	10YR6/2 反黄褐色	シルト質粘土	
V	10YR6/5 深紅褐色	シルト質粘土。西面の山麓で赤い。熟分を少量含む。	
VI	10YR6/6 深褐色	シルト質粘土。剖面を多く含む。	
VII	10YR7/3 深黃褐色	シルト質粘土。西面の山麓で黄褐色の部分が多い。	
VIII	10YR7/3 反黃褐色	シルト質粘土。西面を多く含む。堅軟の部分が多い。	
IX	10YR7/3 層相色	シルト質粘土。西面を多く含む。西向きより、堅軟の部分が多い。	
X	10YR7/3 反深褐色	シルト質粘土。西面を多く含む。西向きより、堅軟の部分が多い。	
XI	10YR7/3 反黃褐色	シルト質粘土。西面を多く含む。	
XII	10YR7/3 深褐色	シルト質粘土。西面を多く含む。	
XIII	10YR7/3 反黃褐色	シルト質粘土。西面を多く含む。	
XIV	10YR7/3 反褐色	シルト質粘土。シルトテクスチャ。堅軟の部分が多い。	
層番号	上位色	土 特	標 無
S&C-1	7.5Y3/5I 黄褐色	シルト質粘土。下層から土素を割合的に多く含む。	
-2	5Y5/2 黄オリーブ色	シルト質粘土。液化鉛を含む。粘土。(SY4/0)を頭に含み。壁面に軸生。(10YR1/3)を部分的に含む。	
S&C-2	5Y4/2 色	シルト質粘土。液化鉛、マンガン含む。粘土。(SY5/0)。壁面に軸に含む。	
-2	2.5Y4/1 淡褐色	粘土。液化鉛、マンガン含む。	
-3	10YR4/1 淡褐色	粘土。液化鉛。(ランドバップ)含む。	
-4	2.5GY4/1 黄オリーブ灰褐色	粘土。新山。(SY5/0, 10YR3/3)の小ブロックを含む。	
S&C-1	5Y3/1 色	シルト質粘土。液化鉛を多く含む。	
-2	10Y7/4/1 色	シルト質粘土。液化鉛を少度含む。粘土質シルト(10YR5/0)をブロック状に含む。	
-3	10Y7/4/1 しない黄褐色	シルト質粘土。粘土質シルト(10YR5/0)を多量に含む。	
-4	10Y7/4/1 色	シルト質粘土。10YR5/0を薄い層でブロック状に含む。	

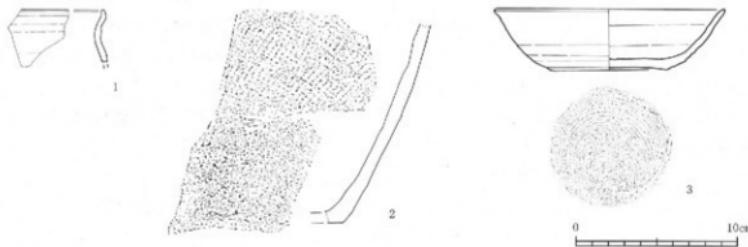
第39図 V<sub>a</sub>層水田跡 平・断面図

## 3) 溝跡

S D 1 溝跡 調査区東部、VII層上面で検出した。北端も南端も調査区外に延びる。検出部の長さは約400cmである。



第40図 土坑・性格不明遺構 平・断面図



団号 番号	登録 番号	出土地点		分類		法算 (cm・g)		特徴、参考 (建地、種類、文様、時期、その他)	写真 回数
		基本所 在地名	遺構名	種別	器種	最高 基高	口径・幅 直徑・底		
1	D-1	IV層		柱形	圓筒	-	-	-	31-7
2	E-1	IV層		圓筒	圓筒	-	-	-	31-6
3	E-2	SX-1 2層	圓筒	柱形	圓筒	35	14.2	外因：棒子叩き 内因：アテ具痕 横刃切削	31-8

第41図 出土遺物

上端幅は約100cm、深さは約10cmである。堆積土はVI層が入り込んでいる。出土遺物はない。

S D 2溝跡 調査区東部で検出した。北端はS D 1溝跡に切られ、南端は調査区外に延びる。検出部の長さは約300cmである。上端幅は約100cm、深さは約8cmである。堆積土はVI層が入り込んでいる。出土遺物はない。

#### 4) 性格不明遺構

S X 1性格不明遺構 調査区西部で検出した。北端の一部は調査区の外に延び、南端は全体的に調査区外に延びている。検出部の長さは420cmである。幅は上面で520cm、深さは約70cmである。堆積土は4層に分かれる。堆積土2層中から須恵器の环が出土した。

#### 5) 出土遺物

IV層中からロクロ土師器甕の小片、須恵器甕の小片が出土した。いずれも年代は不明である。また、S X 1性格不明遺構の2層中から須恵器の环が出土した。この須恵器环は器高3.9cm、口径14.2cm、底径7.3cmである。体部は底部からやや屈曲して立ち上がり、全体的に丸みを持っている。口縁部はやや開いて外傾している。底部回転糸切りでロクロ回転方向は右である。この須恵器环に類似するものはV B群土器として分類されている(村田1992)。時期としては9世紀第4四半期を中心とする頃とされており、仙台市では仙台市五本松窯跡C群窯跡(第12~15号窯跡)で出土している。報告書第99集(佐藤1987)を参照したところ、五本松窯跡で出土した須恵器环の中に、器高・口径・底径の数値が極めて近く、体部や口縁の形状が類似するものが確認された。よって今調査で出土したこの須恵器环の時期も9世紀第4四半期であると推定でき、S X 1性格不明遺構も9世紀第4四半期以前に形成されたものであると推測できる。

### 6まとめ

- ① V a層上面で畦畔1条、VI層上面で土坑2基、VI層上面で溝跡2条、土坑1基、性格不明遺構1基を検出した。
- ② 検出が予想されていた条带型地割に関係する大畦畔の検出ではなく、小畦畔が検出された。小畦畔は西側が搅乱で切られ、東側は途切れている。灰白色火山灰を含むⅢ層が平安時代の水田と考えられることから、耕作の際に畦畔が削平されてしまったと判断できる。
- ③ S X 1性格不明遺構は人工のものである可能性もあるが、直下に自然の作用によるとみられる基本層の攪拌が集中して確認されたことや、平面形が著しく不定形であることから、現時点では自然の作用によって形成された可能性が高いと考えられる。時期は、出土した須恵器环の年代から9世紀第4四半期以前と推定される。
- ④ IV層中からロクロ土師器甕の小片、須恵器甕の小片が出土した。いずれも年代は不明である。
- ⑤ S X 1性格不明遺構の2層中から須恵器环が出土した。年代は9世紀第4四半期と推定される。

#### <参考文献>

- 工藤哲司 1999「富沢遺跡 第104次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書235集  
 佐藤甲二・小川淳一 1987「五本松窯跡 都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書」  
 仙台市文化財調査報告書第99集  
 佐藤甲二 1994「富沢・泉崎浦・山口遺跡(7) - 富沢遺跡第87次発掘調査報告書 -」  
 仙台市文化財調査報告書第184集  
 村田晃一 1992「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」  
 『大戸窯検討のための「会津シンポジウム」東日本における古代・中世窯業の諸問題』



1 調査終了全景（東から）



2 南壁東部断面状況（北から）



3 深掘区南壁断面状況（北から）



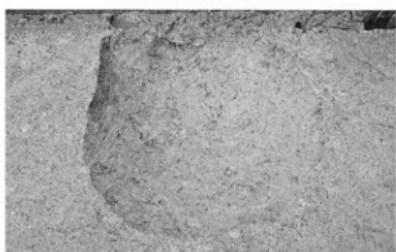
4 Va層上面検出状況（西から）



5 Va層上面畦畔完掘状況（南から）



6 VI層上面遺構検出状況（西から）



7 SK1 土坑完掘状況（南から）



8 SK2 土坑完掘状況（南から）

図版30 調査区全景・基本層序・土坑



1 SD1・2溝跡完掘状況（東から）



2 SX1性格不明遺構断面（南から）



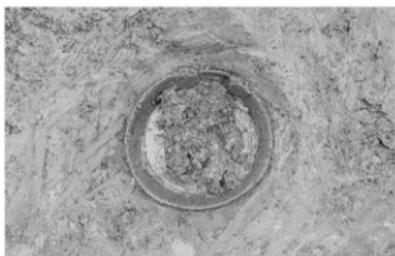
3 SX1性格不明遺構断面（南から）



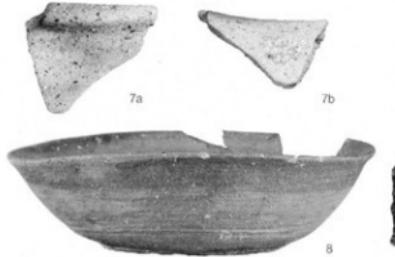
4 SX1性格不明遺構完掘状況（北から）



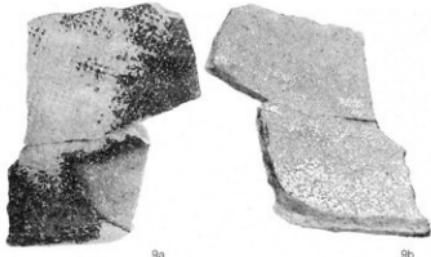
5 Ⅳ層上面検出状況（東から）



6 SX1性格不明遺構遺物（図版35-8）出土状況



7b



8a

8b

図版31 遺構検出・断面・完掘状況・出土遺物

# VI 沖野城跡第4次調査報告書

## 1 調査要項

遺跡名	沖野城跡（宮城県遺跡番号01234）
調査地点	仙台市若林区沖野七丁目303-3・5・6の一部、303-18、303-5地先道路・水路の一部
調査期間	平成20年9月16日～17日
調査対象面積	296.74m <sup>2</sup>
調査面積	67.5m <sup>2</sup> （南北トレンチ45m <sup>2</sup> 、東西トレンチ22.5m <sup>2</sup> ）
調査原因	宅地造成工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主事 加藤 隆則 主事 森田 義史 文化財教諭 佐藤 正弥 文化財教諭 熊谷 敏哉

## 2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成20年7月24日付けで地権者より、道路下の下水道掘削工事に係る「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」（H20教生文第183-17号）に基づき実施した。確認調査は平成20年9月16日に着手し、東西に延びる溝跡が検出されたため、引き続き本調査を実施した。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	沖野城跡	城郭	自然地帯	中世	9	篠根古墳	円墳	自然地帯	古墳
2	南小泉廻跡	集落、庭園	自然地帯	弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世	10	砂押: 造跡	造跡	自然地帯	古墳、奈良、平安
3	迷見塙古墳	前方後円墳	自然地帯	古墳	11	寺津丘古墳跡	古墳跡	自然地帯	古墳、奈良、平安
4	若林城跡	内堀、塹壕、城壁	自然地帯	古墳、中世、近世	12	寺地廻跡	古墳廻跡	自然地帯	奈良、平安
5	渡利湖跡跡	蓄水、施設、窓井	自然地帯	縄文、古墳、平安、中世、近世	13	牛形古墳跡	古墳跡	自然地帯	弥生、古墳、奈良、平安
6	保春院空堀跡	古墳	自然地帯	古代、中世、近世	14	油谷東源寺空堀跡	古墳跡	後古代	奈良、平安
7	法輪理古墳	円墳	自然地帯	古墳	15	牛谷東源寺跡	古跡	自然地帯	平安
8	成塙古墳	円墳	自然地帯	古墳	16	牛谷東源寺跡	墓地、河川、水田	自然地帯、後古代	弥生、古墳、平安、中世、近世

第42図 遺跡の位置と周辺の遺跡

調査は1トレンチ(12m×2.5m)・2トレンチ(2.5m×9m)を設定した。二つのトレンチともI層のみ重機による掘削を行い、人力で遺構検出作業を行った。1トレンチは20cmほど掘り下げた段階で北端に溝状構造(SD 1~3溝跡)が検出されたため、北側へ6m程拡張した。2トレンチではI層を掘削しピットを検出した。工事計画の掘削深度がG L-300mmのため、下層の調査は行わなかつた。

### 3 遺跡の位置と環境

沖野城跡はJR仙台駅の南東約4.5kmに位置する。西南方約3kmを流れる名取川の支流広瀬川の後背湿地に立地する。周辺には縄文時代以降の遺跡が分布しており、南小泉遺跡、養種園遺跡、若林城跡では中近世の遺構・遺物も検出されている。本遺跡は、明治時代の地籍図や昭和になってからの『六郷村沖野館屋敷割図』などから復元された地割で、主郭を中心にその周りを曲輪と堀・土塁が取り囲む平城であったことが推測されている。『仙台古城書上』等によると、栗野氏の居城で100間四方の規模をもっていたとされている。

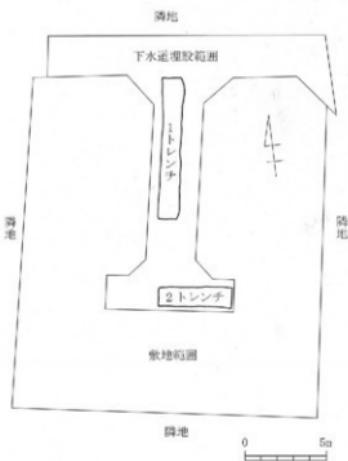
本遺跡は、これまで個人住宅建設や宅地造成に伴って小規模な調査が行われてきた。昭和60年度の第1次調査、平成4年度の第2次調査では、城館の北西部分にあたる館西地区で二重の堀跡が検出されている。調査された区画自体が一つの曲輪で、少なくとも北と東側に二重の堀があったと推定されている。また第3次調査を含め近世の遺構・遺物も散見されることから、城館の廃絶時期やその後の景観についても今後の調査で明らかになるとと考えられる。

### 4 基本層序

調査地点は現況が水田のため、盛土はほとんど見られない。基本層は7層に分かれ。IIa~d層は調査区北半分のみ分布する現代の搅乱層で、SD 1~3溝跡の上面を切っているため遺構の検出面の特定を困難にしている。V層以下はSD 3溝跡層で確認したのみである。



第43図 調査地点の位置



第44図 調査区配置図

## 5 発見遺構と出土遺物

1 トレンチにおいてIV層上面で溝跡3条を検出した。2トレンチではピットが5基確認されたが、柱痕などは検出されず、有機的に結びつくものではなかった。

### 1) 溝跡

SD 1～3 溝跡　すべて遺物が出上しておらず、時期は不明である。切り合い関係よりSD 1溝跡が最も新しく、SD 3溝跡が最も古い。SD 1溝跡は検出幅1.4m、確認面からの深さは30cmである。SD 2溝跡は検出幅60cm、確認面からの深さは18cmである。SD 3溝跡は上幅1.7m以上、下幅約50～60cmの逆台形を呈し、箱型状になっている。確認面からの深さは90cmである。堆積土は単層であり、一時に埋められた可能性が高い。

### 2) 出土遺物

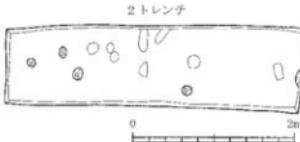
出土遺物はない。

## 6まとめ

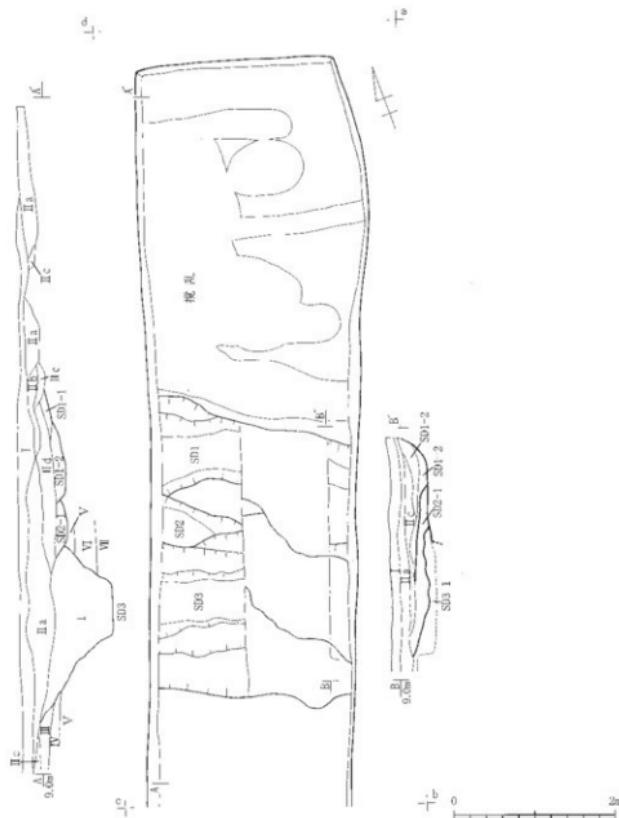
- ①今回調査地点は沖野城跡の中央西に位置し、標高は9mである。
- ②IV層上面で溝跡3条、ピットが検出された。
- ③出土遺物はなく、年代は不明である。
- ④SD 3溝跡は上幅1.7m以上の箱型状を呈しているが、過去の調査例との比較から、溝の規模も性格も異なったものであると考えられ、中世城館との関わりは不明である。

### ＜参考文献＞

- 佐藤甲二・渡辺誠 1986「II調査報告　沖野城跡」『年報7』仙台市文化財調査報告書第91集
- 鈴木隆 2009「沖野城跡第3次調査報告書」『仙台平野の遺跡群X IX』仙台市文化財調査報告書第346集
- 柳原敏昭 2006「沖野城」『仙台市史 特別編7 城館』
- 結城慎一 1992「III本調査報告（2）沖野城跡」『年報14』仙台市文化財調査報告書第176集



第45図 遺構配置図



層位番号	土 色	特 性	目 次
I	2.5Y2/1 黄褐色	シルト質粘土。現代水用渠。	
IIa	2.5Y2/2 黄褐色	シルト質粘土。粘土 (2.5Y6/4) ブロック (酸化鉄を含む) を多量に含む。古代の役瓦層。	
IIb	2.5Y4/3 黄褐色	シルト質粘土。埴 (2.5Y6/4) ブロック (酸化鉄を含む) を極多量に含む。古代の役瓦層。	
IIc	10Y5/2 黄褐色	粘土。粘土 (2.5Y6/4) ブロック (酸化鉄を含む) を多量に含む。古代の役瓦層。	
IIIe	10Y3/2 黑褐色	粘土。現代の廻田渠。	
E	2.5Y4/2 線状黒色	砂土。酸化鉄を少量含む。下部に凹凸ブロックをやや多量に含む。	
IV	2.5Y7/2 黑褐色	砂土。酸化鉄を微量に含む。	
V	2.5Y5/1 オリーブ色	シルト質粘土。V3.3との互層堆積。酸化鉄を極多量に含む。(グライ化)	
VI	2.5Y7/3 深褐色	粘土。	
VI	2.5Y7/1 暗オリーブ色	細粒砂。V層がヨリナビに入る。(グライ化)	
層 位	土 色	土 性	備 考
SD1-1	2.5Y3/1 黒褐色	粘土。酸化鉄を微量含む。下部ブロックを少額含む。腐物質を極量に含む。	
3	2.5Y5/1 オリーブ灰褐色	粘土。下部に粘土 (2.5Y6/1) をやや多量に含む。	
	2.5Y3/1 黑褐色	シルト質粘土。粘土ブロックを少額含む。酸化鉄ブロックを少量含む。	
SD2-1	2.5Y5/1 黒褐色	シルト質粘土。可塑ブロックを少額含む。SD1-1層ブロックを多量に含む。	
SD3-1	2.5Y5/1 黒褐色	粘土。下部に機械堆積を含む。	

第46図 溝跡平・断面図



1 1 トレンチ検出状況（北から）



2 2 トレンチ検出状況（西から）

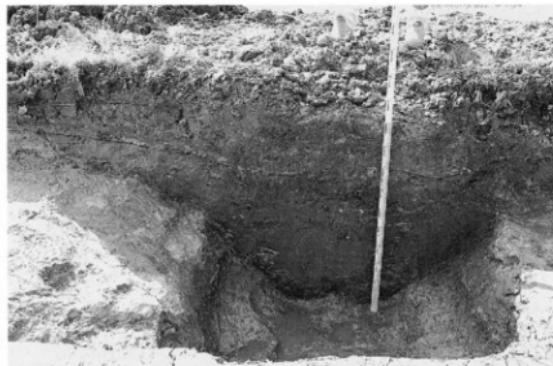


3 SD 1～3溝跡検出状況（東から）

図版32 調査区全景、遺構検出状況



1 SD 1・2溝跡断面（東から）



2 SD 3溝跡断面（東から）



3 SD 1・2溝跡（北西から）

図版33 SD 1～3溝跡断面

## VII 小鶴城跡第3次発掘調査報告書

### 1 調査要項

遺跡名 小鶴城跡（宮城県遺跡番号01194）  
 調査地點 仙台市宮城野区新田三丁目238他  
 調査期間 平成20年10月27日～平成20年10月29日  
 調査対象面積 69.96m<sup>2</sup>  
 調査面積 21m<sup>2</sup>  
 調査原因 賃貸住宅建設工事  
 調査主体 仙台市教育委員会  
 調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係  
 担当職員 主事 鈴木 隆 文化財教諭 志賀 雄一 文化財教諭 佐藤 正弥

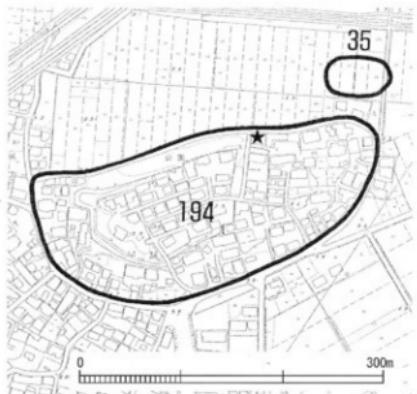


番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	小鶴城跡	五跡	丘陵	中世	10	小田原城址跡	遺跡	丘陵斜面	奈良、平安
2	寺貝山古墳群	複数	丘陵斜面	奈良、平安、古墳	11	安樂寺下丘陵跡	遺跡	丘陵斜面	奈良、平安
3	高美山配本根新居	複数	丘陵斜面	奈良、平安	12	大森寺裏跡	遺跡	丘陵斜面	奈良、奈良
4	安樂寺の山古墳群	複数	丘陵斜面	奈良、平安	13	津戸公園史跡	遺跡	丘陵斜面	奈良、奈良
5	安樂寺跡丘陵跡	複数	丘陵斜面	半定	14	御幸寺跡	遺跡	丘陵斜面	古墳
6	二の森遺跡	複数	丘陵斜面	半定	15	御幸寺東側六角塔	獨石塼	丘陵斜面	古墳
7	二の森遺跡	複数	丘陵斜面	平安	16	森次遺跡	散在物、集落、寺院	近隣	銅文、佈笠、古墳、奈良、平安
8	御幸寺古墳群	複数	丘陵斜面	奈良、平安	17	吉沢遺跡	散在物	丘陵	平安
9	御幸寺空堀	複数	丘陵斜面	奈良、平安	18	小鶴遺跡	散在物	自然地帯	平安

第47図 遺跡の位置と周辺の遺跡

### 2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成20年9月18日付けで地権者より提出された、賃貸住宅の建築工事に係る「埋蔵文化財の取扱いについて(協議)(H20教生文第183-21号)に基づき実施した。なお発掘届は、調査終了後に平成20年12月18日付けで提出された(H20 教生文第184-243号)。建物建築予定地(2棟分)に対し、東西3m×南北5mの調査区を南北2箇



第48図 調査地点の位置

所に設定した。まず、北側の調査区で重機により盛土およびI・II層を掘削した。その後南側へ2m拡張したところ、溝跡の南側立ち上がりが確認されたため、人力により遺構検出作業を実施し、調査区は1箇所のみとした。溝跡の堆積土は、安全面を考慮し部分的に掘り下げを行い、堆積土6層までを確認した。

### 3 遺跡の位置と環境

小鶴城跡は、後背湿地に突き出した舌状丘陵に立地する。かつて、城域の南側一帯は小鶴沼が広がっていたといい、その南を東西に小鶴川が流れている。しかし小鶴沼は、江戸時代中期に大部分が水田化されている。城の西側には、戦国期の幹線道路である「東街道」が通っていたと考えられている。城の頂部の標高は約16mで、周囲の水田との比高差は約11mである。これまでの発掘調査では、主に城の北東部および北西部における堀跡が確認されている。特に北東部では、上幅6m以上、深さ2.6mと大規模なものであることが判明している。

### 4 基本層序

基本層は、1.3~1.4mの盛土直下でI~V層を確認した。I・II層は、現代および近世頃の耕作土である。

### 5 発見遺構と出土遺物

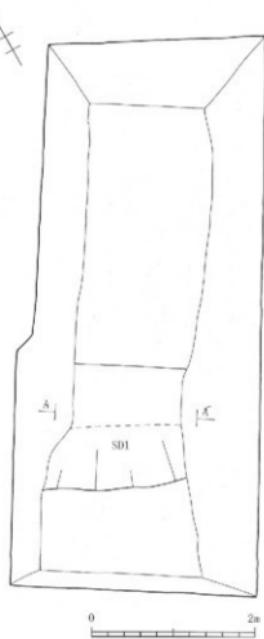
III層上面で溝跡1条を検出した。遺物はII層中より、近世の染付皿1点が出土した。

#### 1) 溝跡

S D 1 溝跡 掘り込み面はIII層上面である。調査区やや南寄りの箇所で、溝跡の南側立ち上がりが確認された。東西方向に延びる溝跡である。規模は、幅4.8m以上、深さ60cm以上である。堆積土は6層に細分される。遺物は出土していない。



第49図 調査区配置図



第50図 遺構配置図

## 2) 出土遺物

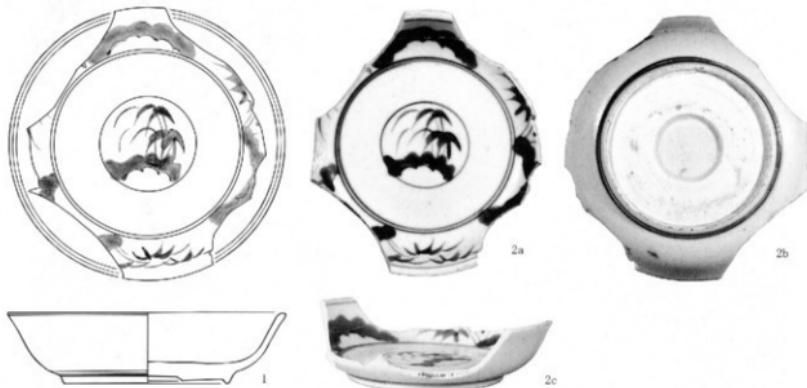
遺物は、II層より出土した肥前産の染付皿1点のみである。年代は18世紀後半代と考えられる。

## 6まとめ

今回検出した溝跡は、小鶴城北側における堀跡の一部と考えられる。堀の成立年代を示す遺物の出土はないが、埋没年代については、II層中より出土した染付皿の年代から、18世紀後半以前と考えられる。



第51図 南壁・西壁断面図



第52図 出土遺物実測図 (遺物写真図版合む)



1 SD1 溝跡掘削状況（南東から）



2 拡張前SD1 溝跡検出状況（北から）



3 拡張前調査区南壁（北から）



4 SD1 溝跡断面状況（東から）



5 調査区全景（北から）

図版34 調査区全景・SD1溝跡

## VIII 与兵衛沼窯跡隣接地発掘調査報告書

### 1 調査要項

遺 跡 名 与兵衛沼窯跡（宮城県遺跡番号01134）  
調 査 地 点 仙台市宮城野区蟹沢地内  
調 査 期 間 平成20年9月8日～9月12日  
調査対象面積 5,300m<sup>2</sup>  
調 査 面 積 350m<sup>2</sup>  
調 査 原 因 公園整備  
調 査 主 体 仙台市教育委員会  
調 査 担 当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係  
担 当 職 員 主査 渡部 弘美 主事 大久保 弥生

### 2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成11年9月8日付けで仙台市建設局公園課長より提出された与兵衛沼公園整備工事に係る協議書（教生文H11第7-22）に基づき実施された、窯跡等の有無の確認を目的とした試掘調査である。試掘調査の結果により、工事が埋蔵文化財に影響がある場合は、確認調査を実施する旨を回答した。整備予定地に11箇所の調査区を設定し、平成20年9月8日に調査を実施した。

### 3 遺跡の位置と環境

与兵衛沼窯跡は、仙台市北部の青葉区新堤、宮城野区蟹沢に所在し、JR仙台駅から東へ約2km の地に位置している。遺跡は、仙台市西部から派生する台原・小田原丘陵の南斜面に位置している。窯跡は、与兵衛沼の北岸斜面、標高50～65mに確認されている。遺跡の規模は、東西約1km にわたっており、奈良・平安時代的一大窯業地である。出土遺物には、偏行唐草文軒平瓦や細弁蓮華文軒丸瓦があり、多賀城や国分寺、国分尼寺に供給されている。



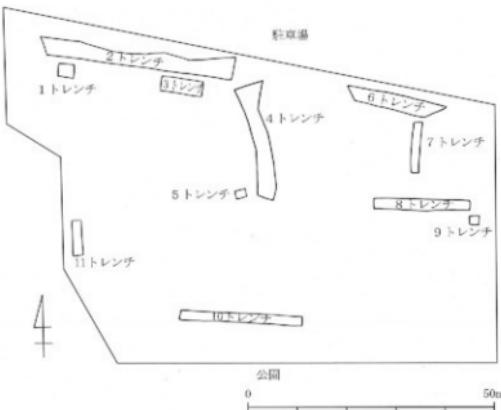
第53図 調査地点の位置

本調査地点は、遺跡範囲の中央北側の遺跡隣接地にあたり、現在は公園として整備されている。

#### 4 調査の概要

当調査地点の東西では、古代の窯跡が多数発見されており、今回の調査地点でも窯跡や工房跡等の発見が予想されたが、すべての調査区で遺構・遺物は発見されなかった。また、その周辺で遺物の採集もされなかった。調査区は、掘削すると湧水が激しく、地盤が非常に不安定である。

この調査により、公園周辺の地形は、当初の整備によってかなり変化していることがわかり、今回の公園整備工事による埋蔵文化財への影響はないとの判断した。



第54図 調査区配置図

#### <参考文献>

仙台市史編さん委員会 1995『仙台市史 特別編2 考古資料』



1 1トレンチ（北から）



2 2トレンチ（南東から）



3 2トレンチ北壁



4 6トレンチ（南西から）

図版35 調査区全景・断面状況

報告書抄録

ふりがな	やまぐちいせきほか							
書名	山口遺跡他							
副書名	発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第345集							
編著者名	主演光朗 鈴木降 加藤隆則 森田義史 大久保弥生 佐藤正弥 熊谷敏哉							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒960-8671 宮城県仙台市青葉区国分町3丁目7-1 電話 022-214-8894							
発行年月日	平成21年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やま 山 口 遺 跡 (第17次)	せんだいし たいはくくとみざわ 仙台市太白区富沢三 丁目 103-57の一部	04100	01178	38° 13' 2"	140° 51' 47"	2007.11.26 2007.11.30	24m <sup>2</sup>	個人住宅 建築
やま 山 口 遺 跡 (第18次)	せんだいし たいはくくとみざわ 仙台市太白区富沢三 丁目 103-57	04100	01178	38° 13' 2"	140° 51' 47"	2007.11.26 2007.11.30	25m <sup>2</sup>	個人住宅 建築
れ つ こくぶんじ じ あと 陸奥国分尼寺跡 (第12次)	せんだいし あゆびのくあやち 仙台市宮城野区宮千 代一丁目 2-12-11.2-14.2-16.2-17	04100	01020	38° 15' 10"	140° 54' 35"	2008.4.30 2008.5.30	217m <sup>2</sup>	共同住宅 建築
し ろう まる あて 四郎丸館跡 (第3次)	せんだいし たいはくくわが本ち 仙台市太白区四郎丸 二丁目 93-1.93-2.93-51の各一部	04100	01240	38° 11' 22"	140° 55' 4"	2008.5.28 2008.6.16	140m <sup>2</sup>	共同住宅 建築
とみ さわ 富 沢 遺 跡 (第142次)	せんだいし じいはくくわが本ち 仙台市太白区長町 南一丁目 209-8地先	04100	01369	38° 13' 21"	140° 52' 44"	2008.6.3 2008.6.27	65m <sup>2</sup>	共同住宅 建築
おき の じょう 沖 野 城 (第4次)	せんだいし かわばらしきおきの 仙台市若林区沖野七 丁目 303-3.303-5.303-6の一帯.303-18	04100	01234	38° 13' 45"	140° 55' 3"	2008.9.16 2008.9.17	67.5m <sup>2</sup>	宅地造成 工事
こ 小 づる じょう 小鶴城 (第3次)	せんだいし みどりのくしんでん 仙台市宮城野区新田 三丁目 238他	04100	01194	38° 16' 50"	140° 55' 51"	2008.10.27 2008.10.29	21m <sup>2</sup>	賃貸住宅 建築
よ へ え むは かた 与兵衛沼窯跡	せんだいし おやめのくわいさわ 仙台市宮城野区蟹沢 地内	04100	01134	38° 17' 7"	140° 53' 54"	2008.9.8 2008.9.12	350m <sup>2</sup>	公園整備

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山口遺跡 (第17次)	集落跡・水田跡	弥生～中世	溝跡、土坑、 ピット	陶磁器、木製品	
山口遺跡 (第18次)	集落跡・水田跡	弥生～中世	溝跡、土坑、 ピット	土師器	
陸奥国分尼寺跡 (第12次)	寺院跡	奈良・平安	豎穴住居跡、 溝跡、 土坑、ピット	瓦、土師器、須恵器	
四郎丸館跡 (第3次)	方形周溝墓・集落跡・ 城館跡	古墳・平安・中世	溝跡、土坑、 井戸跡、 ピット	土師器	
富沢遺跡 (第142次)	包含地・水田跡	旧石器～近世	溝跡、土坑、 性格不明遺構	須恵器	
沖野城跡 (第4次)	城館跡	中世	溝跡	陶磁器、瓦	
小鶴城跡 (第3次)	城館跡	中世	溝跡	磁器	
与兵衛沼窯跡	窯跡	古代・近世	なし	なし	

仙台市文化財調査報告書第345集

## 山口遺跡他 発掘調査報告書

2009年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町二丁目7-1

文化財課 TEL 022(214)8894

印刷 株式会社建設プレス

仙台市青葉区折立三丁目2-10

TEL 022(030)0177

